

令和 2 年度

年 次 報 告 書

神 戸 常 盤 大 学
神戸常盤大学短期大学部

目次

頁

第1部 各組織年間活動報告書

I. 学科別 年間活動報告書

1. 保健科学部 医療検査学科	1
2. 保健科学部 診療放射線学科	6
3. 保健科学部 看護学科	9
4. 教育学部 こども教育学科	14
5. 短期大学部 口腔保健学科	21
6. 短期大学部 看護学科通信制課程	26

II. 学内組織別 年間活動報告書

1. ときわ教育推進機構	31
2. 自己点検・評価委員会	33
3. 学生委員会	35
4. 入試委員会	37
5. 教務委員会	39
6. S D委員会	41
7. 広報委員会	47
8. 図書・紀要委員会	49
9. 危機管理（災害）委員会	51
10. 神戸常盤地域交流センター	53
11. 国際交流センター	55
12. K T U研究開発推進センター	58
13. 研究倫理委員会	60
14. 個人情報保護委員会	62
15. ハラスメント防止対策委員会	63
16. 神戸常盤大学健康保健センター	64
17. 教職支援センター	66
18. 口腔保健研究センター	68
19. 子育て総合支援施設K I T	69
20. ライフサイエンス研究センター	71
21. 事務局	73

第2部 「学生による授業評価」報告・・・・・・・・・・74

第3部 「就職先・卒業生へのアンケート調査」報告・・・・ 117

第1部 各組織年間活動報告書

I 学科別 年間活動報告書

1. 保健科学部 医療検査学科（M科）年間活動報告書

学科長 坂本 秀生

基礎データ						
	入 学 者 数	在 籍 者 数	退 学 者 数	休 学 者 数	留 年 者 数	卒 業 者 数
1 年	86	86	2	0	0	
2 年	79	79	2	0	0	
3 年	96	90	2	2	0	
4 年	89	94	4	9※	18	72
休退学等の理由： ※1名在籍含む。 進路変更、疾患治療への専念、 学修意欲の低下 *在籍者数はR2. 5. 1現在、他欄は年度中の動向						
学科目標資格取得状況						
臨床検査技師		受験者数	72名	合格者数	69名	合格率 95.8%
細胞検査士		受験者数	14名	合格者数	14名	合格率 100 %
		受験者数		合格者数		%
卒業後の進路						
就職内定者数 (率)	64 (88.9%)	進学者数 (率)	3 (4.1%)	その他 (率)	(%)	
卒業年次累積GPA平均		2.335				
第Ⅰ期中期実行計画に基づく組織の中期目標						
1. 社会貢献に資する教育・研究の遂行 2. 現行カリキュラムの検証を行い、多様なニーズの応じた教育システムの構築 3. 卒業生が講師となるキャリアサポーターによる教育システムの充実 4. リカレント教育の構築						
組織の中期目標を達成するための本年度の目標						
1. 教育及び研究の社会還元 2. 現行カリキュラムの検証開始 3. キャリアサポーターに対する教員支援 4. リカレント教育実現に向けた教材作成						
主な活動内容・成果						
【本年度の目標に基づく活動】						
1. 社会貢献に資する教育・研究の遂行 教育及び研究の社会貢献として、本学 2020 年度後期公開講座「兵庫県内におけるコロナ流行の特徴と世界の状況」、日本医療検査科学会大会「今後の POC 更新セミナーの進め方について」、日本臨床検査医学会学術集会「POCT に係わるわが国の認定制度」「新たな臨床						

検査技師教育実施に向けて「臨床検査技師教育内容見直しの経緯」他、複数の講演依頼、日本臨床検査学教育協議会の副理事長、兵庫県臨床検査技師会の理事、兵庫県精度管理専門委員等、複数の学外役職を学科教員が務めた。（根拠資料：教員年次報告、リサーチマップ）

2. 現行カリキュラムの検証を行い、多様なニーズの応じた教育システムの構築

2020年4月に厚生労働省の臨床検査技師学校養成所カリキュラム等改善検討会から報告書が公表され、その内容に沿い臨床検査技師学校養成所指定規則が改正され、2022年入学者から適用される。本学科の現行カリキュラムは2017年入学生から導入され、5年ごとにカリキュラムを見直す時期とも重なり、2022年入学者から新たなカリキュラムを実施できるよう、学科内にカリキュラム検討委員会にて現行カリキュラムの検証を行い、改正すべき項目の確認を初めた。（根拠資料：カリキュラム検討委員会議事録）

3. 卒業生が講師となるキャリアサポーターによる教育システムの充実

新型コロナウイルス感染症の感染防止のため、本年度はキャリアサポーターによる活動を自粛し、成果は出せなかった。

4. リカレント教育の構築

大学における臨床検査技師を対象としたリカレント教育の構築のため、本学着任前に生理学的検査の業務経験が長い本学教員が中心となり、業務として超音波検査を担っている臨床検査技師を対象にし、リカレント教育プログラム構築に向けた準備を開始した。ただし、本年度は新型コロナウイルス感染症の感染防止により対面での実施は行えず、リカレント教育が再開した際のプラットフォーム構築を行った。具体的には①Googleサイトを用いた連絡事項を含めた開催日等の講座情報や受講した講座に対するアンケートを実施するためのページ作り。②心エコー動画マニュアルの作成。③腹部エコー動画マニュアルの作成、である。（根拠資料：Googleサイト、作成教材）

【学修成果】

■退学者・休学者・留年者・卒業生

本年退学者は2名が疾患治療、4名は不本意入学後の進路変更であり、いずれも保護者および本人と面談または連絡を重ねた。不本意入学者には学修指導を繰り返したが、臨床検査技師への関心が薄れた状態であり、最終的に本人の意思を尊重した。

留年者のうち9名が4年時の単位不足であり、この9名に関しては緊急事態宣言で休講となった前期から遠隔授業で課題提供、登校可能になってからは補習を行う等の支援を行ったが及ばなかった。（根拠資料：学生対応報告書）

■学科目標資格取得状況・就職内定者数

学科の目標資格取得である臨床検査技師の国家試験合格率は95.8%と全国平均の80.2%を大きく超え、全国新卒者合格率の91.6%も上回る良好な状況であった。また、細胞検査士では、全国平均合格率に関する正式公表は無く例年30%前後と言われる中で、本学科の合格率は100%に加え、合格者数も14名と全国で最多数であり学修成果は出ている。

卒業後の就職先は一般病院が41.7%と約半数を占めて多く、病院公務員20.8%、大学病院6.9%を含め全体の69.4%が病院へ就職した。ついで衛生検査所4.2%、健診センター6.9%、クリニック5.6%など様々な職に就いた。また、大学院進学者は4.2%であった。これはカリキュラムポリシーのもとに学修した成果であり、ディプロマポリシー

に定める要件を身につけた証と言える。（根拠資料：就職委員会議事録）

■卒業評価(卒業生アンケート)

卒業生へのアンケート調査では発送数 86 通に対し、回答数が 69 通と回収率が 80.2%であり、卒業生の帰属意識が高いことが伺え、3つのポリシーが活かされている。肯定的回答が 70%以上で特に評価が高いのは、「医療検査に必要な基礎知識および基本的な専門知識を修得」、「医療検査の実践に必要な基本的技術を修得すること」であった。肯定的回答が 30%以下で評価の低い項目「地域社会や国際社会で保健医療の向上に貢献できる能力を身につけることができた」であった。今年度の卒業評価ではディプロマポリシーの認識が低い傾向があり、大学の学びはディプロマポリシーに基づく事を理解できるよう働きかける必要がある。（根拠資料：卒業生アンケート集計結果、学科会議議事録）

■授業評価

学科全体の授業評価は前期が 4.1、後期が 4.2 と良好であった。

■GPA

どの年度の学生も 1 年時は前期より後期は下がる傾向であるが、本年度は 2.95 から 2.15 と大きく下がった。遠隔授業による学修効果への影響も可能性はあるが、R2 年度入学生の学修状況を注視する必要がある。（根拠資料：学科会議議事録）

■国家試験対策委員会の活動内容・成果

国家試験対策教材として、B6サイズの厚紙の表面に年度毎に国試問題を印刷した「B6カード」を作成し、配布の2～3ヶ月後に当該年度の国家試験を元に作成した模擬試験を行った。また、国家試験問題対策集として作成してきた冊子を、本年度より「臨床検査技師国家試験対策マスタードリル2020」として医学書院より全国出版した。4年前期は模擬試験、後期の総合医学検査演習試験の結果を毎回解析し、成績不振者を対象に補習や個別指導を行った。また下位学生が所属する卒業研究担当教員が学生指導し、その内容を学科会議にて共有した。国試直前の2月から成績下位学生及び既卒生を対象に、過去5年間の国試問題や国試対策問題集を用い学科教員による集中補習を行い、学力向上に努めた。この結果、新卒者72名中で69名が合格し、合格率は95.8%と全国平均の80.2%および新卒者の合格率91.6%も上回る成果となった。既卒生は17名中7名が合格し、合格率は41.2%で全国平均の41.7%とほぼ同等であった。（根拠資料：学科会議議事録、国試対策委員会議事録、B6カード、臨床検査技師国家試験対策マスタードリル2020）

■臨地実習委員会の活動内容・成果

新型コロナウイルス感染症等の理由で 14 施設が実習不可となり、新規施設開拓および受入数拡大依頼で 42 施設を確保し、1 月 13 日～3 月 8 日に行った。実習開始直後に緊急事態宣言発令、同居者または実習先の濃厚接触者、本人の発熱等により臨地実習が不可となった 9 施設の 20 名に対し、厚生労働省の指針に沿い、学内代替実習を行った。学内代替実習の受講生からは「臨地実習に行けず悔しい思いをしたが、様々な実習のおかげで、現場に触れる期間は短かったが学内で基礎をしっかりと固める事ができた。また、少人数であるから、授業では行わない発展実習など密度が濃い、質問のしやすい環境で、先生方に心より感謝しています。」と報告があった。（根拠資料：臨地実習委員会議事録）

□学科内 FD(教育に関する内容)

1. 2022 年度のカリキュラム改正に向け、対面で開催した。7 月実施：参加率 100%。

新カリキュラム作成に活用するため、教育内容変更点等を教員間で共有した。学科長より臨床検査技師教育内容の改正に関する説明を受け、教育内容の追加による必修科目の設定、単位数、各科目の配当年次・開講時期変更の必要性につき教員で理解を図った。

2. 医療系大学等の学生理解と対応をオンライン受講した。12月実施。参加率 86.4%。

コロナ禍で多様な状況に置かれた学生への対応についての講演であり、学科でも様々な学生へ対応する頻度が増えている印象が有り、学生指導を行う上で有用な内容であった。（科会議事録、SD 委員会年次報告書）

【学修支援】

■学科としての学生支援制度

1～3年生に対し教員1名が4～5名の学生を担当するチューター制度を用い、4年時は卒業研究担当教員がサポートを行った。入学時から学科オリジナルの「学生カード」を作成し、入学直後の履修登録から新生活スタートアップ等の個人的な事項にも対応した。

全学年の共通事項として、学生支援に有用な事項は学科会議で共有し、緊急を要す際には学科会議外でも教員間で迅速な共有を行った。退学に至りそうな学生、卒業延期が確定しそうな学生に対して面談し、学科教員のみが確認できる共有データベースに保存し、至った過程を教員が理解し、同様な状況にある学生への早期対応にも役立てている。

オフィスアワーだけでなく教員の電子メールアドレスも学生に連絡し、学生が相談しやすい環境を整えている。その成果もあり、チューターやクラス担任以外の教員にも学生が相談に訪れ、学生の個性にあった相談が可能である。また、就職委員会及び国試対策委員会を通じ、学生の進路相談を含めたキャリア形成に関する支援を学科として、系統立てて行った。（根拠資料：学科会議録、学生カード、学生対応報告書国試対策アンケート、就職委員会及び国試対策委員会の議事録）

成績下位学生へのサポート

再試験前に学科として補習プログラムを組み、再試験対象者数が多い科目で補習を行った。対象者が少ない科目では資料配布等を行い、学生の自己学習を支援した。

欠席が多い学生への対応

欠席が多い学生にはチューター、クラス担任が対応し、必要に応じて保護者と連絡を取り各個人にあったサポートを行った。特にサポートが必要な学生に対しては、キャリア支援課、学生相談室とも連携し対応している。必要あれば学科長も個別面談を行い、学生の不安を取り除けるようにした。（根拠資料：学生対応報告書）

【その他】

新型コロナウイルス感染症対策として、1年生は新入生ガイダンス中から確実に連絡が取れる方法、コンピュータ・タブレット・インターネット環境の調査も学科独自で行い、大学及び遠隔授業に関する不安除去に注力した。2～4年生はガイダンスも行えず、6月まで登校出来なかったため、チューターが中心となり個々の学生と連絡を取った。全学年へ学科長から定期的に情報を発信し、学生の不安を取り除けるよう配慮した。

自己評価
本年度の成果に対する自己評価と次年度への課題 本年度は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、4つの目標のうち「3. キャリアサポーターに対する教員支援」を達成することが出来なかったが、それ以外の項目では達成が出来たので、達成度の自己評価は「ほぼできた」とした。 次年度の課題として、中期目標のうち本年度は行えなかった「キャリアサポーターに対する教育システムの充実」を行えるようにしたい。 【達成度の自己評価】： ○2. ほぼできた

2. 保健科学部 診療放射線学科（R科）年間活動報告書

学科長 松田 正文

基礎データ						
	入 学 者 数	在 籍 者 数	退 学 者 数	休 学 者 数	留 年 者 数	卒 業 者 数
1 年	86	86	2	0	0	
2 年						
3 年						
4 年						
休退学等の理由： 進路変更等						
*在籍者数はR2.5.1現在、他欄は年度中の動向						
学科目標資格取得状況						
		受験者数		合格者数		合格率
		受験者数		合格者数		合格率
		受験者数		合格者数		合格率
卒業後の進路						
就職内定者数 (率)		進学者数 (率)		その他 (率)		(%)
卒業年次累積GPA平均		－ (卒業生なし)				
第Ⅰ期中期実行計画に基づく組織の中期目標						
1. アドミッション・ポリシーに基づいて迎え入れた学生を、ディプロマ・ポリシーに掲げている、優れた診療放射線技師として育てる。そのために、カリキュラム・ポリシーに基づいて作成した教育プログラムを展開する。同時に、遅滞なくそれを評価し、評価結果は速やかに学生教育に反映させる。						
2. 短期大学部を含めると、多様な医療系および教育系の学部・学科を擁している本学の特徴を活かして、基盤（基礎）教育を推進する。						
3. 教育とともに、研究活動に取り組む。地域医療機関との共同研究を推進する。						
4. 本学の地域貢献事業やボランティア活動に積極的に関わってゆく。						
組織の中期目標を達成するための本年度の目標						
本年度は新設学科である診療放射線学科第一期生の初年度であることから、下記を目標とした。						
1. 「基盤教育分野」の科目を中心に、将来の多職種連携業務を視野に入れながら大学生に必要な基礎あるいは教養教育を進める。同時に、診療放射線技師の専門教育に備える教育を行う。						
2. 新型コロナ・ウイルス感染症の影響を最小限に抑えるよう、保健・教育環境を整える。						
3. 教員の研究環境を整備する。学生の新鮮な探究心・研究意欲を引き出し、育てる。						
4. 本学の地域貢献事業やボランティア活動に積極的に関わってゆく。						
5. 入学試験を含め、2021年度入学生を迎える準備をする。						

主な活動内容・成果
【本年度の目標に基づく活動】 1. 「基盤教育」 基盤教育科目を多数の学生が積極的に履修した。しかし、「専門」を意識しすぎたのか、物理学関連の科目に集中したきらいがある。基盤教育の理念からすると、やや問題がある。 2. 新型コロナ・ウイルス感染症対策としての on-line 授業 On-line 授業そのものに大きな問題はなかった。しかし、その成果を把握する過程に不十分・不正確なところが認められた。 3. 教員の研究環境の整備 授業の進捗状況に合わせて教員が順次採用されるという事情から教員数は少なく、今年度の授業以外の学内公務は教員にとって負担であった。しかし、研究室の入る棟が年度なかばの 8 月に完成するなど、徐々にではあるが研究環境は改善されてきた。 4. 地域貢献事業やボランティア活動 「神戸災害ボランティア・ネットワーク事業」(大学コンソーシアムひょうご神戸 学生交流委員会)オンライン研修会や「淡路島岩屋活性化プロジェクト」に参加するなど、新型コロナ・ウイルス感染症に見舞われた中ではあったが、活動に参加した。 5. 入学試験を含め、2021 年度入学生を迎える準備 少数教員による体制の中、筆記、面接に加えて試験科目を工夫するなどして、平成 3 年度も平成 2 年度とほぼ同数の 85 名が入学することになった。志願者数からみても、入学試験が選抜試験としての機能を発揮しており、アドミッション・ポリシーに沿った学生を受け入れることができた。 【学修成果】 学生による授業評価（学科平均）は以下の通りである。 前期 1. 学生自身 4.0 2. 授業内容 4.1 3. 授業方法 4.1 4. 学習成果 3.9 5. 総合評価 3.6 後期 1. 学生自身 3.9 2. 授業内容 4.3 3. 授業方法 4.3 4. 学習成果 4.3 5. 総合評価 4.3

新型コロナ・ウイルスの影響があるなか、学習意欲の醸成に苦心したところもあるが、概ね想定内の結果であった。

【学修支援】

担任はもちろん、チューターを配置するなどにより、第一期生という、先輩のいない、やや特殊な環境にある学生をさまざまな面から支援した。加えて、学科に所属する全教員のメール・アドレスを学生に公開し、オフィス・アワーも設定して、生活面を含む多面的な支援体制をつくった。

さらに、入学試験では多様な学生を迎え入れるという本学の方針に沿って所謂文系学生も入学しているので、本学科に必要な学力を補償する学習支援として基礎物理学の補習を行った。

【その他】

1. 国家試験対策委員会

国家試験対策(模擬試験問題作成作業の効率化など)などに組版ソフト **LaTeX** を利用することになり、これに関する学科内研修などを行った。すなわち、

○国試対策の模試作成において組版ソフトである **LaTeX** を利用することになり、次のような研修を行った。

- ・ソフトのインストール
- ・**LaTeX** を国試形式の問題で利用する方法

○演習を兼ねて、国試関連科目担当者が第 72 回の国試問題を **LaTeX** のコマンドが入ったファイルにした。

○問題作成作業の効率化のため新規のコマンド等を作成した。

○国試問題データベースの項目を決定した。

2. 2名の学生が放射線医学総合研究所において研修を受けた。

3. 放射線取扱主任者試験対策の講義を行った。

2.3.は、診療放射線技師に止まらない、将来の発展・飛躍を期待するものである。

自己評価

【達成度の自己評価】:

1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

3. 保健科学部 看護学科（N科）年間活動報告書

学科長 長尾 厚子

基礎データ						
	入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	留年者数	卒業者数
1年	81	81	0	1	0	
2年	83	81	1	1	0	
3年	90	89	2	1	0	
4年	85	87	1	0	10	78
休退学等の理由： 進路変更・学力不足・学習意欲の低下						9月卒業2名含む
*在籍者数はR2.5.1現在、他欄は年度中の動向						
学科目標資格取得状況						
看護師国家試験		受験者数	81	合格者数	80	合格率 98.7%
保健師国家試験		受験者数	22	合格者数	22	合格率 100%
卒業後の進路						
就職内定者数 (率)	76 (97.4%)	進学者数 (率)	0 (%)	その他 (率)	2 (2.6%)	
卒業年次累積GPA平均		2.551				
第Ⅰ期中期実行計画に基づく組織の中期目標						
1. 地域に開かれた大学としての使命を果たすために、豊かな知性と感性を備えた専門職業人の育成に向けたカリキュラムの現状（基盤教育の推進を含む）を検証する。						
2. 国が示す「地域包括ケアシステムの構築」を受けて、チーム医療・多職種間共同を図り、病院・施設看護はもちろん、在宅系サービス、地域における生活支援・介護予防等の実践力育成のための看護の基礎教育内容を検討する。						
3. 在宅看護実践力の向上のために、卒業生を主な対象とするリカレント教育、また大学院を視野に入れた卒後教育のシステムを検討する。						
4. 「地域拠点において看護学科が提供する all generations の健康支援に向けた実践モデルの検討」での平成30年度の研究成果から、地域における健康課題が抽出されたが、その解決に向けての取り組みとして「まちの保健室」や「KIT」での活動を中心に、地域の高齢者への健康相談・介護予防、子育て支援等、長田の地域に密着した健康支援活動を継続する。						
組織の中期目標を達成するための本年度の目標						
*中期目標達成に向け、3つのプロジェクトを立ち上げ、全教員がそれぞれのプロジェクトに参画し、本年度の目標に向かって活動する。						
1. カリキュラム検討プロジェクト（中期目標1.2） 令和元年10月に通達であった「看護基礎教育検討会報告書」に基づく改正カリキュラムの方向性に沿って、今年度末に本学看護学科の改正カリキュラムの骨子を策定する。						

2. リカレント教育検討プロジェクト（中期目標3）

在宅看護実践力の育成に向け、基礎教育での内容、卒後の育成内容を検討するために、「在宅看護実践力の向上に向けたニーズ調査」のための**予備調査を実施**（現実習施設の訪問看護ステーション・地域包括ケアセンター等に協力依頼）する。

3. 地域における健康課題プロジェクト（中期目標4）

（健康相談・介護予防・子育て支援）

「all generations 健康支援モデル」の試案の元に、「まちの保健室活動」「KITでの健康相談」の中で、健康相談・介護予防・子育て支援の内容を検討し、健康支援モデルの具体化を図る。

主な活動内容・成果

【本年度の目標に基づく活動】

<中期目標1. 2について>

*カリキュラム検討プロジェクトを中心に検討を進めていった。

1. 前年度までにカリキュラム等検証（将来構想）委員会で検討してきた内容を中心に、カリキュラムに向けて具体的な内容の検討を行う。

1) 前年度よりの検討課題である「臨地実習科目」について、改正カリキュラムの意図に沿って、また、本学独自の考えに基づき臨地実習科目を検討する。

カリキュラム改正の方向性の中で臨地実習科目として、新たに「地域活動基礎実習」を取り入れ、早期から地域を学ぶ内容とした。また、各看護学領域の臨地実習科目も再検討し、一部の実習科目の内容を充実させるべく、変更した。

2) 教員全体に改正カリキュラムの共通理解を深めるため、学科内FDにおいて研修会を実施する。（8月）

カリキュラム検討プロジェクト委員長が講師となり、全教員対象に、改正カリキュラムの意図、本学のカリキュラムの方向性等、全教員の共通理解を深めるために、研修会を実施した。研修会終了後のアンケート結果では、80%が「とても理解できた」「まあまあ理解できた」（回収率57.7%）であった。

3) 定例でカリキュラム検討プロジェクト会議を開催し、3月には改正カリキュラムの骨子を作成する。

カリキュラム検討会議は8回実施し、基盤教育分野の科目以外は看護学科の教育理念・教育目標・カリキュラムポリシーに沿って、また、臨床判断能力の基礎や地域における学習内容を構築するためのあらたな授業科目を設定した。3月には、専門基礎分野・専門分野の科目設定ができ、科目の内容を共有し、新カリキュラムの骨子は出来上がった。

<中期目標3について>

*リカレント教育検討プロジェクトを中心に検討を進めていく。

1. 在宅看護実践力の育成に向け、基礎教育での内容、卒後の育成内容を検討

今年度は、在宅実践力育成に向けた基礎教育での内容を、改正カリキュラムの検討と同時に検討を進めていった。

2. 「在宅看護実践力の向上に向けたニーズ調査」のための予備調査を実施

今年度は新型コロナウイルス感染症蔓延のため、予備調査の対象となる訪問看護ステーションは

患者対応に迫られ、調査の実施には至らなかった。次年度の課題となる。

3. 卒業生の「在宅看護実践力の向上に向けたニーズ調査」を実施する。

今年度は、新型コロナウイルス感染症蔓延のため、調査を見送った。次年度の課題となる。

<中期目標4について>

*地域における健康課題プロジェクトを中心に検討を進めていく。

1. 看護学科が実施している「健康相談」「介護予防」「子育て支援」について、今年度実施の内容・方法を検討しモデル化の素案を考える。

①健康相談：今年度は「健康フェア」「まちの保健室活動」が新型コロナウイルス感染症蔓延のため中止となり活動が実施できなかった。次年度の実施状況での検討が課題となる。

②介護予防：輝はすいけの介護予防講座の依頼を受け年3回実施の予定であったが、今年度は、9月が実施できず、2月・3月に「こころの健康と閉じこもり予防」「高齢期の起こりやすい病気を予防しよう」について、12名の対象者に実施した。その他の長田地域の介護予防活動の実態把握については今後の課題となった。

③子育て支援：健康フェアの育児相談、KIT・モトロクでの講座開設についても、新型コロナウイルス感染症蔓延のためすべて中止となり、「長田区の子育てをしている母子の抱える健康問題を分析・検討する。」「発達が気になる子どもへの本学における支援を検討する。」については今後の課題となった。

【学修成果】

<資格取得状況>

看護師国家試験受験者は81名（新卒者77名、既卒者4名）合格率98.8%であり、保健師国家試験受験者は22名で全合格し、合格率100%であった。さらに、養護教諭免許取得者は5名であった。

<退学者数・休学者数・留年者数・卒業者数>

今年度卒業者は10期生となり、76名の卒業者であった。その内、3名が留年生であり、また、9月卒業の2名を加えると78名の卒業者となる。

退学者は4名あり、いずれも進路変更・学力不足・学習意欲の低下等であった。休学者は3名であり、1名は結婚・出産による休学と、2名は学力不足による単位未修得となり、休学を余儀なくされた。今年度は新型コロナウイルス感染症蔓延の影響で、学力不足が学習意欲の低下につながったケースがあり、不本意の学科選択も退学への引き金になっている。今後も各教員の個別な学生の状況把握と、学習意欲にかかわる指導が課題となる。

<卒後評価>

自己点検委員会が実施する「卒業生アンケート」は、本年度は回収率が53.3%（昨年29.4%）と高くなった。ディプロマポリシーに関する内容は「国際感覚を身につける」が最も低く「非常に思う・思う」を合わせて13%であった。カリキュラムの特性との関連であるため今後の課題とする。また、本学看護学科の教育理念である「ヒューマンケアの視点」は95%で昨年度（68%）からは高くなっている。今後もカリキュラム運用の中で理念をもとにディプロマポリシーに向かって教育を進めていきたい。大学の各種支援については「国家試験の支援について満足している」が93%で昨年の36%からは高くなっている。今後も国試対策委員会と協働し、国試の合格率をあげていくのが課題となる。

<授業評価>

専任教員の授業評価は概ね良好である。今年度は、コロナ禍であり、マナバでの遠隔授業が多く、授業方法の評価に若干の差が見られた。しかし、年度末に実施する総括会議にて各教員が授業評価をもとに次年度の課題を明らかにし、授業改善に取り組んでいる。

<国家試験対策委員会の活動内容・成果>

今年度の看護師国家試験は 81 名受験し、1 名のみが不合格であった。全国平均 90.4%を上回る 98.8%の合格率であり、成果を上げている。

活動内容は、4 年生には看護師国家試験模試 8 回、保健師国家試験模試 3 回実施し、コロナ禍であったが、教員によるオンデマンドの特別講義なども取り入れ、きめ細やかな対応を実施した。また、低学年からの学修成果も含め、模擬試験も全国レベルでも中間以上に位置し、今年度の国家試験の合格率につながったと考えられる。次年度は、3 年次の臨地実習がコロナ禍のため臨地で学ぶ機会を失った学生もいることを考慮して、更に、きめ細やかな指導が課題と考える。また、低学年への学修指導、オンデマンドの活用等も含めた学修支援、更には保護者との連携、クラス担任・チューター、研究指導教員との連携も必要に応じて積極的に取り入れ、学生個々の指導に役立てることも重要である。

<臨地実習委員会の活動内容・成果>

今年度は、コロナ禍のため、臨地実習の一部が学内実習となり、教員が実習目標到達のための教材の工夫等に努力した。また、「臨地実習指導者研修会」は「効果的な学びにつながる授業デザイン」「実習指導を構造的に考える」をテーマに実習施設の指導者 37 名の参加者にオンデマンド配信で実施した。終了後のアンケート結果からも概ね良好であった。次年度もコロナの影響で、臨地での実習ができない可能性があり、実習目標達成のための工夫が課題となる。

【学修支援】

学生支援体制として、各担任・チューターが年 2 回面接をし、連携を図りながら支援している。今年度、休学・退学に至った学生は、3 年次の臨地実習科目での学力不足による学習意欲の低下からの要因が大きかった。臨地実習科目担当者も学習内容の指導を行い、チューターや担任と連携し、状況に応じて家族とも連絡を取り本人の意思決定の支援を行った。学力不足や学習意欲の低下に関するサポート体制が課題である。

就職に関しては、就職委員会活動において、卒業年次にはきめ細やかな指導を実施し、8 月には 88.6%が内定した。コロナ禍の中での就職活動支援は今後も課題となる。

自己評価

<中期目標 1・2について> 2022 年度から実施する新カリキュラムについては検討が終了し、次年度は申請準備に取りかかる。また、新しく臨地実習施設としての依頼準備が課題となる。

<中期目標 3>について 今年度はコロナ禍のため、ニーズ調査が実施できなかったが、次年度は、在宅看護実践者と卒業生に向けたニーズ踏査の実施が課題となる。

<中期目標 4について>今年度はコロナ禍のため一部しか実施できなかったが、次年度は地域の健康課題の実態把握が課題となる。

【達成度の自己評価】:

- | |
|---|
| 1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった |
|---|

4. 教育学部 こども教育学科（E科）年間活動報告書

学科長 光成 研一郎

基礎データ						
	入 学 者 数	在 籍 者 数	退 学 者 数	休 学 者 数	留 年 者 数	卒 業 者 数
1 年	96	96	0	0	0	
2 年	94	93	4	0	0	
3 年	71	71	1	0	0	
4 年	92	89	0	0	5	84名
休退学等の理由：進路変更、一身上の都合等						
*在籍者数はR2.5.1現在、他欄は年度中の動向						
学科目標資格取得状況						
幼稚園教諭一種 59名	●公立幼稚園教諭 1名 ●公務員正規採用 1名 ●公立小学校正規採用 4名（内2名期限付）※希望者 14名中 ●県・市・町の外郭事業団正規採用 3名					
小学校教諭一種 21名						
保 育 士 資 格 57名						
卒業後の進路						
就職内定者数 (率)	80名 (100%)	進学者数 (率)	2名 (2.4%)	その他 (率)	2名 (2.4%)	
卒業年次累積GPA平均		2.607				
第Ⅰ期中期実行計画に基づく組織の中期目標						
1.特色ある教育システムを構築する						
2.地域と大学との連携強化を図るため、学部の専門性を生かした子育て支援活動に取り組む						
3.高大連携の強化を図るために、系列校（常盤女子校）および協定校を中心として、高校生向けの授業や学生と高校生の交流企画を充実する						
組織の中期目標を達成するための本年度の目標						
1. 特色ある教育システムを構築する						
①チーム力育成教育、こどもの健康教育、防災教育の3つのプログラムを学科独自の教育プログラムとして構築するために科目の整理、調整を行う。						
②再課程認定後の新カリキュラムを検証し、子育て支援施設 KIT および附属幼稚園との教育連携を強化する。						
③教員採用試験の対策強化を図る。						
2.地域と大学との連携強化を図るため、学部の専門性を生かした子育て支援活動に取り組む						
①KIT での活動をカリキュラム内に取り入れる。また準正課活動として、KIT での学生ボランティア活動を実施する。						
②附属ときわ幼稚園との連携を強化するため、KIDS クラブを開催する。						

3.高大連携の強化を図るために、系列校（神戸常盤女子校）および協定校を中心として、出張授業や学生と高校生の交流企画の充実を検討する

①神戸常盤女子校との高大連携を強化する。

②協定校との出張授業を実施する。

主な活動内容・成果

【本年度の目標に基づく活動】

1. 特色ある教育システムを構築する

①

・チームベースドラニングで実施できる科目を検討し、体系的にチームベースドラニングで学ぶカリキュラムを構築した。「基礎研究演習Ⅰ」▶「基礎研究演習Ⅱ」▶「保育教育課題研究Ⅰ」▶「保育教育課題研究Ⅱ」▶「保育教育課題研究Ⅲ」

・学科では、独自資格「チャイルドヘルスサポーター」、「こども安全サポーター」の取得を可能としているが、本年度は「こども安全サポーター」資格を改編し、防災教育に力を入れるべく「地域防災スペシャリスト」資格を新設した。それに伴い「防災教育実践」を新設、カリキュラムの系統化を図り、学則変更も行った。

②

・再課程認定後の新カリキュラムを検証し、子育て支援施設 KIT および附属幼稚園との教育連携強化を図るため、当該施設での実践活動を取り入れた授業計画を立案した。KIT での活動をカリキュラム内に入れた計画は下記に詳述した。

・「基礎研究演習Ⅱ」の中に附属幼稚園での実習を計画していたが、コロナ感染症の影響で実施することができなかった。代わりに KIT での実習を行った。また3年の教育実習を見据え、保育経験を積ませるべく保育者養成コース選択の2年生には空きコマボランティアを幼稚園で計画していたが、これも実施することができなかった。

③

・従来の教員採用試験対策に加えて、コロナ禍という状況下で新たに教員採用試験対策講座（EN1、E2 対象）遠隔学習コンテンツを作成し、manaba にて実施した。また2次試験対策（個人面接・集団面接）を中心とした自主学習会（E4 対象）を本年度より実施した。（詳細は教職支援センター報告書参照）

2. 地域と大学との連携強化を図るため、学部の専門性をいかした子育て支援活動に取り組む

①

・本年度より KIT における活動をカリキュラム内に位置づけた。「基礎研究演習Ⅰ」（1年必修科目）、「基礎研究演習Ⅱ」（2年必修科目）、「保育教育課題研究Ⅱ」（3年必修科目）において、KIT 内で実践学修を実施した。ボランティア活動については、コロナ感染症の影響により自粛せざるを得なかった。

②

・KIDS クラブを附属ときわ幼稚園で開催し、学科教員が講師を務めるなど、学部の専門

性を生かした子育て支援活動に取り組んだ。本学9名の教員が9回にわたってクラブの開催を計画していたが、コロナ感染症の影響で1講座が中止となるなど、計画変更を余儀なくされた。しかしながらその他のプログラムは実施し、幼稚園創設50周年記念として、本学教員監修のもと、染め物を園児と制作することもできた。

3.高大連携の強化を図るために、系列校（神戸常盤女子校）および協定校を中心として、出張授業や学生と高校生の交流企画の充実を検討する

①

- ・4月には神戸常盤女子校3年生を対象に進路講座（進路ガイダンス）を実施した。
- ・7/1（水）、神戸常盤女子高等学校の生徒に対して、学科説明会（見学会）を実施した。そのプログラム内容に、学生と生徒との交流会を企画した。
- ・12/17（木）、2/15（月）の両日、本学科入学予定者に対して入学前教育を実施した。本学科のアドミッションポリシーや教育について説明を行い、入学前課題に対する説明などを行った。
- ・9/11（金）には、2年生を対象に9/18（金）には、1年生を対象に保育における音楽の授業を実施した。
- ・2/3（水）、3/2（火）には体験授業を実施した。

②

- ・協定校である鈴蘭台高校へ出張授業を定期的実施した。
- ・コロナ感染症の影響で、中止になった出張講義もあったが、鈴蘭台高校以外4高校にのべ7回出張講義に赴いた。

【学修成果】

学科では、学修成果の点検・評価のための指標として、休退学者数・留年者数・卒業者数等の学籍異動に関する情報、教員免許状（幼、小）取得数・保育士資格取得数等の免許資格取得に関する情報、進路決定状況（就職内定、進学先決定）等の情報、卒業生アンケート結果、授業評価、卒業年次累積GPA値などを用いている。

本年度は別表に示したとおり、退学者が4名、休学者・留年者は合計6名で、昨年度の退学者1名、休学者・留年者0名と比較して大幅に増加となった。気になる学生は各学年とも数人存在し、担任およびゼミの担当者等が継続的に丁寧に対応し、学科会議等で情報共有している。今年度はmanaba上に学生の状況を共有できる欄を作成し、タイムリーに教員間で連携がとれる仕組みを構築した。学生間において、学力格差が広がっていることが課題であり、成績上位者、下位者両者に対して配慮していく必要がある。

免許資格取得状況と進路決定状況に関しては、年度末に実施される卒業判定教授会の資料に基づいて、学科会議内で総括的な評価を行い、次年度以降の教育指導方針策定の基礎資料としている。その上で、いずれも入学から卒業に至るまでの過程を重視して、その都度の評価とフィードバックを行っている。1・2年の時期は本学科の各コースや臨地実習委員会と連携して、学生の学修特性と取得を目指す免許・資格が一致するような学修指導を行い、課題がある学生はその都度個別に学科会議で検討して学修指導の方針を決定している。3・4年の時期は、免許・資格とともに各コースや就職委員会と連携して、学生の特性

にマッチする進路選択ができるように同様の学修指導を行っている。その成果は、免許・資格取得者数と高い進路決定率が示している通りである。資格を取得しないで卒業した学生は3名おり、3名の学生は、警察、一般企業、社会福祉施設（社会福祉主事任用資格を取得）にそれぞれ就職した。

卒業生アンケート結果は、学科で共有して次年度以降の学修指導の参考にしている。また、授業評価結果は、各教員にフィードバックされた後に、それに基づく各教員の教育内容・方法の改善のための基礎資料としている。また、そうした各教員の振り返りは、学科長に報告書として提出されている。学科長は、その内容を確認するとともに、必要に応じて各教員に対する助言を行っている。今年度は遠隔授業が実施されたこともあり、その方法や内容にも課題があることが明らかとなった。それらの課題に対して、学科会議およびメールで共有し、改善に努めている。後述している学部長の遠隔授業方法を参考にするSDも実施した。その成果は、授業評価の学科平均値が高い値を保っていることが示唆している。

GPAの活用方法としては、経年変化を確認し、指導助言の材料としたり、大学推薦の判断材料として活用しているが、今後、実習要件として用いるなど活用方法についても検討している。卒業年次累積GPA値に関しては、経年変化を見ることができる程にデータが蓄積されていないが、昨年度と比較して下降した。

臨地実習委員会の活動内容および成果に関しては、下記の通りである。

- ・臨地実習委員会を定期的に開催した。（年間10回開催）
- ・実習時期における一括休講時期については、保育実習Ⅱの実習時期を基本として、保育実習Ⅲの実習時期が開始する4月末から実施することの検討を行い、学生の授業参加への不利益が生じにくい4月27日～5月20日と設定した。
- ・KITでは2年生の保育者養成コースの学生と、2・3年生の教員養成コースの学生が主となって活動を行った。昨年度までは保育者養成コースの学生のKITでの実習は希望者のみであったが、今年度は2年生科目の中で全員が活用できるように改編した。
- ・各実習に対して、科目担当者が学生の配属を考え、施設長や学校長や教育委員会と連携を図り、教員が学生の取り組みについても指導を行い、資格取得を希望する者の実習を終了することができた。

学科FDの年間目標を「新入試制度の共通理解と入学前教育の充実」とし、入試委員が、学科会議（終了後）において、新入試制度の概要、特徴に関する説明を行った。入試制度の改編に伴い、入学前教育について見直しを図り、課題や実施方法についても検討を行った。また公開授業を参観し、報告書を作成した。SD委員会の取り組みと連携して、今年度生じた遠隔授業の課題について、ICTの授業活用を専門とする学部長の遠隔授業方法について学ぶ機会を得た。

【学修支援】

1・2年生は各4名のクラス担任を配置しており、各学年担任が、ゼミ形式で実施する授業も担当しているので、きめ細かい学生の支援が可能となっている。3・4年生は卒業研究ゼミの担当教員に加えて、各学年に2名のクラス担任を配置している。そうした体制で、

1年生から4年生まで、少人数制で切れ目のないような学修支援を行っている。1・2年生には、大学への適応状態や進路志望等の確認のための個人面談を実施している。また3・4年生では、より具体的に進路を見据えた面談等を実施している。

進路対策として、個別にその都度、学科教員（就職委員、ゼミ担当、各科目担当、各コース担当等）の立場から面談や個別指導を実施すると共に、教職支援センター職員、キャリア支援課職員等の力を借りながら必要な指導を重ねた。面談・指導の過程で、課題があることが判明した学生については、毎月の学科会議において全学科教員間で共有して課題の解決に努めた。また、IR推進室から提供された学生のデータは、必要に応じて関係教員において共有し指導の参考としている。

本年度も求職及び進学希望者82名の内定率100%を達成することができた。その結果は以下の通りである。

①小学校 計12名（14.6%）

- ・公立小学校（教諭）4名（前年度比－3名）
- ・公立 小学校（講師） 8名（前年度比±0名）

②保育所・認定こども園・幼稚園 計40名（48.8%）

- ・公立保育所・幼稚園（正規）1名（前年度比－7名）
- ・社会福祉法人保育所（正規）7名（前年度比－2名減）
- ・社会福祉法人認定こども園（正規）28名（前年度比＋6名）、
- ・学校法人幼稚園（正規）4名（前年度比＋2名減）

③社会福祉施設 計17名（20.7%）（前年度比＋5名）

- ・社会福祉法人及び外郭団体（障害児者 16名・児童養護 1名）

④一般企業 10名（13.4%）（前年度比＋4名）

⑤公務員 1名＜述べ2名＞（1.2%）（前年度比±0名）

- ・大阪府警察 1名
- ・兵庫県警察 1名

⑥進学 計2名（2.4%）（前年度比±0名）

- ・兵庫教育大学大学院 2名

就職委員会の就職支援の内容は以下の通りである。

- ・就職委員会を定期開催した。（年間10回開催）
- ・就活指導：3回生・4回生「就職ガイダンス」の実施
- ・志望・進路調査（別紙3）及びゼミ毎個別進路面談の実施
- ・インターンシップへの参加及び調整・契約を奨励し就活への動機づけを図る
- ・職域ごとの就職フェアへの参加促進と引率の実施
- ・採用試験対策模擬面接の実施
- ・採用試験時提出書類の添削指導
- ・求人票の精査及び掲示（研究棟5階ホール）
- ・公立保育所採用試験に関する自治体の情報収集
- ・公立・私立対策講座及び模擬試験の実施
- ・就職体験報告会の開催

・保護者を延期（新 2 回生：卒業式後、新 3 回生:夏期に次年度実施予定） ・卒業生就職先巡回訪問（挨拶）の実施 ・就職委員会に対する当該年度卒業生アンケート実施 ・求人を持参してくる法人等への接客対応 以上の取組の成果として、本年度は、進路決定率 100%を達成することができた。	等
【その他】 科研費は研究代表者として新規採択 1 名、3 名が研究継続中であり、2 名が共同研究者として研究継続中である。学内テーマ別研究、教育研究の代表者として 2 名、2 件が採択されており、4 名が共同研究者として携わっている。研究に関して、一定の成果があると言える。 社会活動として、附属幼稚園との連携強化に関する取り組みとして、学科教員が、ときわキッズクラブの開催（放課後専任教員の専門性を活かしたプログラムを実施）に携わった。一部コロナ感染症の影響で中止になったプログラムもあったが、8 名の学科教員のべ 9 名が活動の支援を行った。今年度は幼稚園設立 50 周年にあたり、記念事業として、2 日にわたって、染め物体験を実施した。 以上より、一定の成果があったと判断できるが、それをもって完結したとは言えず、今後も継続した取組が必要と判断する。	
自己評価 組織の中期目標を達成するための本年度の目標については、先述したように、ほぼ目標を達成することができたと考えるが、1. 特色ある教育システムを構築する「③教員採用試験の対策強化を図る」、に関しては、採用試験実績が昨年度結果を下回った。今年度はコロナ禍にあったが、採用試験対策には、昨年度以上に時間を費やすことができた。しかしながら結果が伴わなかったということは、例年通りの対策に留まらず、年度ごとの学生の特性に応じた対応が求められるということである。来年度は LMS を活用した学習コンテンツの充実を図りたい。2. 地域と大学との連携強化を図るため、学部の専門性を生かした子育て支援活動に取り組む「①KIT での活動をカリキュラム内に取り入れる。また準正課活動として、KIT での学生ボランティア活動を実施する」、に関しては、今年度はボランティア活動を推進する状況にはなかったため、来年度は状況に応じてボランティア活動の推進に対応する。 次年度の課題 チーム力育成教育、こどもの健康教育、防災教育の 3 つのプログラムを学科独自の教育プログラムとして構築するために科目の整理、調整を引き続き行うが、学科改編に伴うカリキュラムの構築、新たな資格取得を可能とするあらゆる対応事項に尽力する。教員採用試験実績の向上に関しても採用自治体の傾向を分析・把握し、個別の学生の特性に応じた対応に努めるとともに上記したように、LMS（manaba）を活用した学習コンテンツの充実を図る。またコロナ禍の社会状況を見極めつつボランティア活動を実施し、専門職に就くものとしての意欲喚起を図る。 【達成度の自己評価】：	

1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

5. 短期大学部 口腔保健学科（O科）年間活動報告書

学科長 吉田 幸恵

基礎データ						
	入 学 者 数	在 籍 者 数	退 学 者 数	休 学 者 数	留 年 者 数	卒 業 者 数
1 年	77	77	1	0	0	
2 年	84	82	1	1	0	
3 年	64	66	1	2	1	64
4 年						
休退学等の理由： 進路変更、学習意欲の低下 *在籍者数はR2. 5. 1現在、他欄は年度中の動向						
学科目標資格取得状況						
歯科衛生士試験	受験者数	63	合格者数	59	合格率	93.7 %
	受験者数		合格者数		合格率	%
	受験者数		合格者数		合格率	%
卒業後の進路						
就職内定者数 (率)	59 (92.1 %)	進学者数 (率)	0 (0 %)	その他 (率)	1 (1.6%)	
卒業年次累積GPA平均		2.531				
第Ⅰ期中期実行計画に基づく組織の中期目標						
1. 4年制大学への移行を視野に入れ、次の課題に取り組む。 ① 口腔衛生に適した優秀な学生を確保するため、一貫した3ポリシー(アドミッション、カリキュラム、ディプロマ)を検討するとともに多様な入学者選抜制度を構築する。 ② 豊かな教養と多様な技能を兼ね備えた歯科衛生士を育成するために、基盤教育及び専門教育を見直すとともに両者の有機的連携を図る。 2. 学生の学びの振り返りや実践力の強化、他者との関係を取り結ぶ姿勢を涵養するために、上級生による教育サポーター制を導入し、教員とともに下級生の学習支援を行うシステムを構築する。 3. 低学年からキャリア意識を高め、歯科衛生士という職種への理解を深めるための支援システムを構築する(キャリア教育の充実)。 4. 口腔保健研究センターと連携した口腔保健に関する多彩な知的・文化的な生涯学習の拠点を形成し、現行のリカレント教育の拡充を図るとともに、地域イノベーションの創出等、社会貢献への取り組みを推進する。						
組織の中期目標を達成するための本年度の目標						
1. 教育理念に即したディプロマポリシーの検証を行い資質の高い歯科衛生士を輩出することを目指す。 2. 豊かな教養と多様な技能を兼ね備えた歯科衛生士を育成するために歯科衛生士専門課程の教育カリキュラムの検証を行う。 3. 学修成果として国家試験合格率が全国平均を上回り、100%を目指す。						

4. キャリア意識を高め、歯科衛生士という職種への理解を深める。 5. 口腔保健研究センターと連携した口腔保健に関する地域イノベーションの創出への取り組みを推進する。
主な活動内容・成果
【本年度の目標に基づく活動】 本学科においては4年制大学への移行準備のため、8月より口腔保健学科四大開設準備WGを設置した。以降、3月までの間にWG会議を15回開催し、その中で本年度の目標1.、2.の達成について検討した。具体的な活動内容は以下に示すとおりである。 目標1.では、①アドミッション、カリキュラム、ディプロマの各ポリシーの一貫性についての検討、②口腔保健学科独自の達成可能な学修成果の検討、③資質の高い入学生を確保するために入試委員会と連携した広報活動の充実、を活動内容とした。①、②は検討を終了し、4年制口腔保健学科の教育理念に沿った一貫した3ポリシーと達成可能な学修成果を策定する事が出来た。③はコロナ禍での活動となり縮小せざるを得なかったが、鈴蘭台高校や明石南高校での高大連携授業（各校3回）の継続実施や兵庫県下12高等学校への訪問によるガイダンスを推進するなど精力的に広報活動に努めた。また、オープンキャンパスでは感染予防対策の一環でもあったが、全参加者への丁寧な個別相談を実施し、参加者からは概ね好評を得た。このような広報活動の結果、志願者数は昨年度に比べて36名増加した。しかし、学科の独自の試みとして初めて企画したグランフロント大阪・大学紹介ブースでの口腔保健学科紹介は緊急事態宣言発出のため動画配信のみとなったため、次年度再度取り組む予定である。 目標2.では、①専門教育（特に歯科衛生士3大業務科目：歯科保健指導・歯科予防処置・歯科診療補助）の実習内容の見直し、②臨地実習教育内容の均質化（主に病院・一般診療所）を、活動内容とした。①は専門教育に留まらず専門基礎教育も見直し、基礎教育と専門教育の連携を考慮した4年制の教育課程を作成した。②は教育内容の均質化のために実習施設の適格性について検討した。検討は四大開設準備WGだけでなく学科の臨地実習委員会も合同で行い、実習目的にあった具備すべき施設要件について新たに基準を設定し、現行の実習施設をその基準に照らし合わせて、施設の適格性を確認した。その結果、実習施設として適合していない施設については実習を依頼しない事とし、併せて学生数が増加した場合に備えて新たに適合する施設を開拓することにした。施設の新規開拓については次年度以降の課題とした。 目標3.では、①専任教員・業者による集中講義と個別指導の充実化、②成績不振学生の早期絞り込みとカスタムメイド教育の実践、③現存する上級生による下級生への学修支援の充実化を図り、教育サポーター制導入にむけた検討、を活動内容として学科内に設置した国家試験対策委員会が推進した。①、②は感染対策を行いながら計画通りに実施したが、早期に絞り込んだ成績不振学生数が想定以上に多く、またコロナ感染防止の観点から、カスタムメイド教育が例年に比べて徹底出来なかった。これらの事が合格率100%を下回った要因の1つであると考え。今後、感染防止策を取りながらの国家試験対策の再検討が必要と考える。③はコロナ感染防止対策の観点から今年度は見送り、次年度以降の課題とする事にした。

目標 4. では、現状のキャリア支援システムの充実として、①外部講師を招いてキャリアコンサルティング講演の実施、②従来から実施している既卒生による職場の歯科衛生業務の紹介、③職場体験実習（インターシップ）の検討、を活動内容とした。学科内に設置した就職委員会とキャリア支援課とが連携しながら活動を推進した。①は3年生対象に7月13日にキャリア1級技能士による講演を実施した。②は、卒業生サポーター複数名がオープンキャンパスで職場紹介を行った内容を、ご本人たちの承諾を得て、ビデオ編集して学生に紹介した。さらに、多彩な職歴を持つ本学歯科衛生士教員の体験談を講演形式で実施した。③は四大開設準備WGで教育課程にインターンシップを導入することの可否について検討を行った。並行して、歯科関連企業および本大学関連企業等にインターンシップ受入状況についての調査を開始した。次年度以降も継続して検討を行う予定である。

目標 5. では、口腔保健研究センターと連携して「口腔保健に関する地域イノベーションの創出への取り組みを開始する」ことを活動内容とした。口腔保健学科の4大化において他校との差別化の柱は歯科診療所を有する口腔保健研究センターの存在である。本年度は地域イノベーションの創出への取り組みの手始めとして、口腔保健学科学生の臨床実習のみならず歯科衛生士のリカレント教育の臨床実習施設となるよう、歯科診療所の整備・拡充を検討した。検討にあたり歯科診療所のニーズ調査を本学学生に実施したところ、653件の回答がありホワイトニング診療が最も高い希望として抽出された。ホワイトニング診療を次年度より開始するために年度末に学生・教職員へのモニター募集（10名）を行い、多数の応募者（32名）があった。次年度よりモニターのホワイトニング診療を開始する予定である。

【学修成果】

本年度の退学者数は1年生1名、2年生1名、3年生（過年度生）1名の3名で、昨年度の退学者数5名を下回り、この数年継続して退学者数は減少している。退学理由は体調不良と進路変更であり成績不振による退学者はいなかった。履修単位数の不足で3年生が1名留年となったが次年度での修了に強い意欲を示している。昨年度1単位のみを残して過年度生になった2名は揃って修了する事ができた。本年度は休学者する者はいなかった。

学生による授業評価のカテゴリー別学科平均値は昨年度に比べて、「Ⅰ学生自身」4.1→4.2、「Ⅱ授業内容」4.3→4.5、「Ⅲ授業方法」4.3→4.5、「Ⅳ学習成果」4.3→4.4、「Ⅴ総合評価」4.3→4.5と全ての項目において昨年度より評価が高くなっている。本年度は遠隔授業と対面授業が並行して実施されたが、対面授業のみだった昨年の評価に劣らない高い評価が遠隔授業においても認められた。特に、昨年度の課題であった「授業以外に学習した時間」が改善された事は、遠隔授業のメリットの1つと考えられる。

国家試験の合格率は93.7%であった。過年度生1名を含む63名が受験をして59名の合格であった。2年連続の100%は達成出来なかったが、全国平均は上回った。今年度の国家試験受験者は入学時に定員が満たされず選抜が行えなかった学年であったことや、コロナ禍で3年前期での臨床実習が中止になるなど、学習指導や学習環境が極めて難しい状況であった。さらに、例年であれば成績不振者の個別指導を国家試験直前まで学科の国家試験委員が行っていたが、コロナ感染防止のため試験前の2週間は自宅学習となった。そのためオンラインによる個別指導になり、微かな感覚が掴みきれず学習の進捗状況の把握

が困難な状態であった。しかし、来年度も同様の環境下が想定できるので、国家試験合格率 100%を目指すための活動内容の再検討は急務である。

卒業生アンケートは 65.8%の回収率で、昨年、一昨年の 40%台に比べて高い回収率である。ディプロマポリシーに対する評価は概ね高く、「基礎知識」や「学ぶ姿勢」に関して身についたと「非常に思う」や「思う」と回答した学生は 70%にも上った。「問題解決能力」については、身につかなかったと回答した学生は 2%しかいなかった。

【学修支援】

学科の学修支援は主としてクラス担任制度により行われている。各学年の早い時期に担任（学年 1 クラス 2 名の 4 名体制）がクラス毎に学生面談を実施して、学修面、生活面等の問題や悩みを抱える学生を早期に発見する体制を設けている。今年度は登校できる状態になってから面談を開始したが、退学や休学を訴えた者はなく、一部遠隔授業への対応などの支援を実施した程度で面談時期の遅れによる支援への影響は見られなかった。担任に加えて各科目担当者とも情報（欠席や授業態度などの学生の行動）交換をより緊密にして学修支援を強化した。その結果、心因性の体調不良を抱える学生の抽出が出来、早期に保護者を交えた面談が行え、健康回復を優先するための退学に繋がった。

今年度はコロナ禍で 3 年生の前期臨地実習 3 科目が中止となった。その代替として各科目責任者が臨地実習内容を勘案した特別プログラムを策定した。地域口腔保健支援実習Ⅰでは急遽実習用模型を購入しての学内実習や、歯科診療補助実習Ⅱでは病院における歯科衛生士業務をビデオ撮影して視聴覚教材による学習、口腔保健衛生学実習Ⅱでは他職種連携を学ぶために医療専門職種を学外から招いての講義などを行い補完した。また、2 年生の後期臨地実習では、新型コロナウイルス感染症対応として、実習開始 2 週間前から実習終了後 2 週間、毎身体調管理をチェックして記録させ、臨地実習期間中は臨地実習指導者に提出を義務付けた。加えて、日々の行動記録についても管理表で確認した。

3 年生の就職支援としては、就職委員会と 3 年生担任、キャリア支援課担当者、さらには国家試験対策委員会とが情報を共有し、学習の進捗状況を鑑みながら学生支援を実施した。感染対策のため manaba のアンケート機能を利用して希望進路の聞き取りを行ったが、必要に応じて対面での個別面談を実施した。その結果、進路決定率は 92.1%（国家試験合格者においては 94.9%）（3 月末）であった。就職ガイダンスは、3 年生向けを 5 回、2 年生向けを 2 回実施し、保護者にも進路状況についての説明文を郵送した。

自己評価

今年度は新型コロナウイルス感染症対策に加えて、短期大学認証評価受審や 2022 年度開設の 4 大化に向けた準備等、大きな課題が山積したが、学科教員が一丸となって取り組み順調に成果を上げている、このことは高く評価できると考える。

今後継続して取り組む課題は以下の通りである。

- ①学科の独自の広報戦略として、グランフロント大阪・大学紹介ブースでの学科紹介。
- ②感染防止策を勘案しながらの国家試験対策の検討。
- ③インターンシップの検討。

【達成度の自己評価】：

1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

6. 短期大学部 看護学科通信制課程(C C N)年間活動報告書

課程長 金川 治美

基礎データ						
	入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	在籍延期者数	卒業者数
1 年	109	109	2（除籍含）	—		—
2 年～		208	29（除籍含）	7	65	124
休退学等の理由： 健康上の理由、家族の介護、経済的困難、仕事との両立困難、育児 *在籍者数はR2.5.1現在、他欄は年度中の動向						
学科目標資格：看護師国家資格取得状況						
受験者数 既卒者	新卒 124 既卒 84	合格者数	新卒 96 既卒 30	合格率（％）	新卒 77.4％ 既卒 35.7％	
卒業年次累積GPA平均 ※本学で取得した単位に限る				2.77		
第Ⅰ期中期実行計画に基づく組織の中期目標						
1. 安定的な学生確保と国家試験合格率のアップ 2. 「保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部を改正する省令 2. 検討」での内容である「改正後 3 年をめどに入学要件をさらに 5 年に短縮」した場合のカリキュラムの整合性についての検討						
組織の中期目標を達成するための本年度の目標						
1. 150 名の定員を確保する 2. 国家試験合格率が、現状より挙が上がる 3. 居住地域別に学生数に見合う実習施設が確保できる						
主な活動内容・成果						
【本年度の目標に基づく活動】						
<目標 1 について>通信教育委員会と共に広報及び入試委員を中心に以下の活動をした。 1) 広報活動の強化 キャンパスライフの内容を現状に合わせ見直し 5 月中旬に完成した。しかし、今年度は新型コロナウイルスの影響で春期に予定していた東京および金沢での進学説明会は中止となった。その後、金沢会場では 8 月に開催（9 名参加し 9 名受験）したが、東京会場では開催できなかった。また、看護協会主催の進学説明会は、静岡・兵庫・京都・奈良県は中止になったが、岡山・滋賀では予定通り実施されたため参加した。ちなみに、静岡県では中止となったのち、2 月に准看護師進学支援研修会が Web で実施されたため次年度の入学者確保のため参加した。本学ではこれまでのオープンキャンパスへの参加（8 名（延べ 8 回）の参加者があり 5 名が受験に至っている。）に加えて、11 月に C C N 単独でのオープンキャンパスを実施し参加者から入学者を得ている。 2) 受験者数の確保 今年度は、例年実施している病院施設を訪問しての進学説明は実施できなかった。そのた						

め、進学説明会及びオープンキャンパスについての周知を HP とビラの送付で図った。
結果的には、受験生は 119 名で入学予定者 114 名（関東 25 名、東海 2 名、北陸 32 名、関西 55 名）と昨年より微増であった。北陸では入学者は増えており、関東で減少していた。北陸が増えたことで総受験者数の大きな変化は見られなかったが、安定して受験者を確保することは今後困難になると考えられる。次年度は、コロナ感染状況に応じてではあるが、今年度減少した東京での説明会の実施とオープンキャンパスへの卒業生の協力を得ていきたい。11 月に実施した通信制課程独自のオープンキャンパスは参加者から好評であったために継続していく予定である。

＜目標 2 について＞ 国家試験対策委員・教務委員を中心に以下の活動をした。

1) 各学生の学習進捗状況の把握と対応

専任教員で担当学生を持ち、8 月～9 月に全学生の学習進捗をチェックし支援（電話又はメールでの指導）を行った。その際、模試の成績を課程内で共有し、チューターによる指導の際に活用可能とした。

2) 国家試験対策の実施

新型コロナ感染拡大による影響で中止や変更を行いながら、以下のとおり実施した。

- ・ 国家試験対策オリエンテーションは会場実施は中止し、代替え措置として資料を送付するとともに、国試対策について動画を作成し、視聴の案内を行った。
- ・ 学習説明会での国家試験対策の説明は、オリエンテーション及び学習説明会が感染予防のため中止したため、資料を送付するとともに、1 年次からの国試対策について動画を作成し、視聴の案内を行った。
- ・ 例年会場で実施していた模試は同内容で自宅受験と WEB 解説講義視聴へ変更して実施した。講座は一部中止し、変更可能なものは WEB 動画講座へ変更して実施した。
- ・ その他、模試の効果的な受験と活用法について動画を作成し、視聴の案内を行った。

模試や講座を自宅で受ける方法に変えたことで、結果的に多くの学生が国試対策行事に参加することができた。また、国試の情報や模試の受験方法等も動画を作成・配信したが動画視聴回数から例年国試対策行事に参加する学生数よりも多くの学生が視聴しており、遠方で来校できない学生や仕事等で都合がつかない学生にとっては有用な方法であった。

第 110 回看護師国家試験における新卒者の合格率は 77.4%であり、本課程の昨年度新卒者合格率（74.6%）を上回ったが、全国 2 年課程通信制学校新卒者合格率（81.4%）は下回った。新卒者の受験地別合格率は、愛知・石川および広島は 100%であったが、大阪 79.7%、香川 66.7%、東京は 63.9%と低かった。今年度は、昨年度の課題を克服するべく取り組んだ活動による一定の効果はみられたと考える。

＜目標 3 について＞実習検討委員会を中心に以下の活動をした。

1) 及び 2) 科目別実習対象学生数とエリア別科目の受入枠の確保について

前年度より獲得数を一覧表にし、過不足について早期に把握し配置を進めた。しかし新型コロナ禍において実習開始前の実習中止の報が次々と入った。結果的には、実習配置病院・施設総数 108 に対し、42 病院・施設の中止となった。実習中止に対して当初、実習施設の変更を検討し実習に臨ませるケースもあったが、その後の配置対象病院・施設の実習中止の増加を考え、学生には文書によって通知し、代替え学習課題の資料と共に送付して

対処した。受け入れ数が不足する科目とエリアについては新規実習施設を開拓し確保することが出来た。(計5施設)

3) 次年度の実習に向けての受け入れ枠の確保と確認事項については文書送付とメール、電話により調整を図った。今後、継続的に実習中止となる施設の不足する科目については新規病院の開拓を図り、科目と数の受け入れを依頼し確保に努めた。

4) 新型コロナに関連した感染対策について

① 実習に対しては、感染対策措置として、健康管理チェックシートを作成し、実習日2週間前から検温、症状、行動など記入し実習時持参すること、不織布マスクの着用、また携帯用手指消毒液のホルダー貸与と、通信制課程の新型コロナ感染症対策マニュアルを作成し全員に送付した。

② 実習スクーリングに関しては、本学・金沢会場においては対面授業で実施した。

グループの机上のパーティションの設置、手指消毒液、物品消毒用物品の設置、換気、教員のフェイスシールドの使用などの措置を図り実施した。東京会場に関しては、当初会場と時期の変更を図ったが、感染拡大に伴い結果的には全面中止とし、遠隔授業を実施し、本学への登校を勤務先から禁止された学生に対しても同様に遠隔授業で対処した。実習期間を通して上記対策を実施した結果、感染者などは出なかった。

③ 授業方法について

- ・ 実習の代替学習は、各科目担当教員により、見学実習を想定した事例による課題を資料で送付し、実習スクーリングに臨むよう提起した。

- ・ 実習スクーリングについて、対面授業では、グループ討議の場合は密にならないよう工夫し、グループ討議をしない場合は講義形式による授業の変更を図った。

- ・ 遠隔授業による実習スクーリングについての学生の声を集約し、教員で共有した。

上記の結果、代替え学習の対象となった学生は、延べ786名中276名であり、スクーリング受講生数は延べ918名中、遠隔授業受講者は312名であった。

- ・ 到達目標に対して、記録物の提出や授業評価としては、大きな差はみられなかった。

遠隔授業については、一方向での教員主導の授業内容となり、学生の理解の程度や気づきの反応が得られず、その場で学生からは質問できないことが問題であると考えます。今後この点について、双方向での方策を検討することが必要である。

【学修成果】

年度途中の退学者数は14名(昨年17名)・休学者数3名(昨年7名)であった。理由は家庭・仕事と学業との両立や経済面、介護などに加えて、今年度はコロナ禍の影響などがあった。卒業者数124名のうち2年間で卒業した学生の割合は66.9%(昨年54.3%)、また、卒業対象者の59.6%(昨年50.8%)が卒業に至っている。

国試対策委員会、臨地実習委員会の活動内容・成果は上記のとおりである。国家試験対策として、今年度はコロナ禍の中方法を変更しながら実施し、教務委員とも連携して、主にチューターを通してここに支援した。国家試験結果は、新卒77.4.0%(昨年74.6%)、既卒35.7%(昨年38.1%)で昨年度の結果より微増ではあるが、医療現場である職場の負担が増す中での受験を考えると、一定の効果があったと評価できる。

卒後評価(卒業生アンケート)では、総合評価で肯定的にとらえている学生が91%で、

昨年の87%よりも上回っていた。国家試験対策に対する支援に関して、肯定的回答は増えてはいるもののまったく思わないと回答した者の割合も増えている。

授業評価結果は、17項目中16項目で4.0～4.4と評価が高く、昨年度と比べてほぼ変化はなかった。カテゴリー別評価でも全てにおいて4.1以上と高い評価を得ており、昨年度にほぼ変わらない結果であった。今年度は、同じ講義内容を実際に受けた学生と遠隔授業で受けた学生が混在しているが、評価結果にはほぼ差がなかった。FDなどで、授業内容に合わせて遠隔授業の方法を個々の教員が工夫した結果が反映されている。

GPAは、本学で取得した科目のみで算出した。結果は平均2.77（昨年度は2.47）であった。

課程内FDでは、コロナ禍で実施できなくなった対面授業の内容の補完について取り組んだ。通信制課程において数少ない対面授業の持つ意味は大きく、効果的な遠隔授業を実施するために、必要な知識と技術を習得することを目的に、基本的な遠隔授業の方法について講義をし（動画撮影の方法、手順・ナレーション付きパワーポイントの作製方法）、自身の担当科目の遠隔授業実施後、アンケートを行い、遠隔授業における問題点、今後の改善点など教員間で意識を共有することが出来た。

【学修支援】

学修支援制度としては専任教員が担当学生を受け持ち、入学時からサポートしていく体制をとっている。各教員が教務委員と連携して担当学生の学習進捗に合わせて連絡・指導を行った。1年次の学生への学修支援としては、早期入学手続きをした入学予定者に対して「練習レポート課題」を提示し添削指導を継続しておこなった。対象者64名中21名（昨年74名中29名）の32.8%のレポート提出があった。入学時の学習説明会は中止となったため、学習の進め方について動画を作成し、視聴の案内を行った。10月実施の基礎実習オリエンテーションと同日に、学習計画の立て直しの指導をし、2年次の学習につなげた。その結果、令和2年度入学生で基礎実習及び看護マネジメント実習に進める学生は78.9%

（昨年83%）で昨年よりも減少している。今年度入学の学生は春期スクーリングの開講時期が遅かったことと東京会場では遠隔授業になったこともあり、今後の学習のモチベーションを維持するようチューターを中心に支援している。

卒業年次の学生には、これまで同様、個々の学生の学習進捗に合わせて卒業のための要件を満たすための指導と同時に国家試験勉強の支援も個別に対応し、加えて職場での状況も考慮しながら、国家試験勉強に取り組む時間の確保をするよう支援した。

生活支援では、神戸常盤大学奨学援助資金について、通信制課程の枠に従い公募を行い応募者について個別面接を実施、支援の必要度が高い学生に対して支給されている。また地方の県独自の奨学金や学生支援機構の活用などの紹介をしている。

【その他】

（教育研究環境）

今年度は、遠隔授業に伴う煩雑さで研究に費やす時間の確保はさらに困難な状況であった。

自己評価

150名の定員を確保するという目標は達成できなかったが、コロナ禍で地方での広報活動ができなかった中で昨年度より受験者が増えていることと、相対的に受験者が減少している現状からは、今年度だけで評価することは難しいと考える。国家試験合格率が、わずかではあるが上がった。医療現場で働きながら、就学している本学学生の成果としては評価できると考える。居住地域別に学生数に見合う実習施設の確保はできた。

【達成度の自己評価】：

1. できた ☒ 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

Ⅱ 学内組織別 年間活動報告書

1. ときわ教育推進機構 年間活動報告書

委員長 濱田 道夫

第Ⅰ期中期実行計画に基づく組織の中期目標
1. 三つの方針を踏まえた学習支援体制の確立 2. 基盤教育の充実 3. 学生個々の能力を引き出すための教育プログラムの構築 4. 大学の特色を生かした学部・学科横断的な教育プログラムの検討・実施 5. リメディアル教育（学習支援、補習授業）の構築 6. 入学前教育の構築 将来的には1～6のテーラーメイド教育を有機的に連携させ、社会への発信も意識した本学独自の「教育の質保証」システムの構築を目指す
組織の中期目標を達成するための本年度の目標
M科・N科の指定規則改正及びO科の四大化を見据え、2022年度の全学的なカリキュラム変更に向かい次の目標掲げる。 1. 学習支援体制の確立に向け、ときわ教育目標及び各方針の更なる一体化を目指す 2. 基盤教育の振り返りをし、更なる充実を目指す 3. 準正課活動も含め、多様な学生の個々の能力が引き出せるような教育プログラムの構築を目指す 4. 学部・学科の特色を生かした、横断的な教育プログラムの構築を目指す 5. 教育の質保証及び大学の特色化に繋がるリメディアル教育の構築を目指す 6. 教育の質保証及び大学の特色化に繋がる入学前教育の構築を目指す
主な活動内容
【本年度の目標に基づく活動】 『ときわコンピテンシー見直しWG』『リメディアル・入学前教育デザインWG』『基盤教育見直しWG』という3つのWGを設置し次の活動を行った 1. 令和元年度に作成した「ときわコンピテンシー可視化（学修成果の可視化）」の有効活用という課題を受け、ときわコンピテンシーの4つの力と19の諸能力の見直しに着手した 2. 基盤教育新カリキュラム案を作成した（対象学生の増加による科目数の増加、情報・英語・地域・国際系科目の充実） 3. 各学科より入学前教育とリメディアル教育の情報を収集した 4. 基盤教育から専門教育への繋がりを意識した学科横断的教育プログラムを提案した（多職種連携教育） 5. リメディアル教育の定義付けを行い、各学科より情報を収集した 6. 入学前教育の定義付けを行い、初年次教育との繋がりを意識した全学科合同の入学前教育を実施し大学案内に掲載した（リエゾン・モデル）

【その他の活動】
自己評価
2022 年度からの全学的なカリキュラム変更の準備の 1 年となった。多くの活動は予定通りに進んだが、専門科目も対象となる広義のリメディアル教育については、継続的な活動が必要となる。 【達成度の自己評価】： 1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

2. 自己点検・評価委員会 年間活動報告書

委員長 鎌田 美智子

第Ⅰ期中期実行計画に基づく組織の中期目標
1. 自己点検・評価の継続及び、第三者評価機関等による評価を実施し、それらの結果に基づき、内部質保証システムを効果的に機能させ、大学運営の改善につなげる。 2. 着実な評価の継続・向上のために研修会の実施を含め、学内の評価風土を高め、エビデンスや評価指標の設定を重視したより客観的な評価の実施を行う。 3. 大学運営のPDCAサイクルを着実に機能させ、学長の下に設置されている「ときわ教育推進機構」や「IR推進室」等との連携において、評価の質向上と評価方法の改善につなげる。
組織の中期目標を達成するための本年度の目標
1. 「目指す大学像（2018）」を基本に系統的な目標管理を指向してきたが、今年度からは「第Ⅰ期中期実行計画」に基づく方向性が確立した。その下にPDCAサイクルの各段階を効果的に進め、自己改善機能の強化を図る。
主な活動内容
【本年度の目標に基づく活動】 1. 第三者評価受審の過程、及び準備を円滑に進め、かつ本学の自己点検上の課題を明確に認識する。 (1) 短期大学基準協会による受審に対して、短期大学部口腔保健学科及び看護学科通信制課程の「自己点検評価報告書」を、7月27日に提出。その書類審査を経て、10月16日に実地調査を受ける（コロナ禍のためオンライン）。結果は、12月18日に「適格」の内示を受ける。（正式通知は3月末日） 総評では、「三つの方針は建学の精神を基盤とし、教育理念・教育目標と一体的に定められ、それを踏まえた教育活動が行われており、自己点検評価においても、規定・組織を有し、日常的な自己点検・評価活動がおこなわれ、全学アセスメントポリシーに基づき学習成果は査定され、自己点検・評価活動の中で査定手法の点検、課題の把握を行い、教育の向上・充実のためのPDCAサイクルを活用している…」という良好なものであった。 評価結果と連動してはいないが、向上・充実のための課題の中に、「教授会を併設大学と合同で開催しているが、その際の規定を有していないため、規程の整備等が望まれる」との指摘があり、早急に規定整備をする必要がある。 さらに基準別評価の記述に、「自己点検・評価報告書において記述の過不足が見られたので組織的なチェック体制が望まれる」とあり、今後委員会での検討を要する。 (2) 高等教育評価機構による次年度受審の準備に対しては、8月21日の第1回の会議開始以降、年度内に準備委員会を4回、代表者連絡会議を2回開催し、6つの基準に対して評価項目をすべてチェックし、エビデンスの整備を行った。コロナ禍のため、ほとんどがリモートによる審議のため、進行に不便さが伴ったが、3月15日の運営委員

会には、「自己点検・評価報告書」の中間報告を行った。次年度はこれを精選し、記述の推敲を行い、6月末の報告書提出及び11月17日～11月19日予定の実地調査に向けて、適切な準備を行う必要がある。

2. 「第1期中期実行計画」策定に基づき、今後の点検評価活動のサイクル修正を行う。
3. 上記策定の下に、「各組織の活動計画」を立て、それを全学的に俯瞰し、年度進行過程で評価しつつ、効果的な目標達成への認識を高める。
4. 「第1期中期実行計画」策定に基づき点検評価活動の変更。

上記2～4に関して、2の目標については、サイクルを基本的に4年間のスパンとし、学科委員会等は、毎年度の報告書を作成（年報レベル）。さらにこれまでの委員会での評価報告書は、外部委員を含む「新たな評価組織」により、中間及び最終に行うことにする等、点検評価のサイクル図を提示して進めた。

3の目標に関しては、各対象活動組織を、中期実行計画下のA組織（18）、及び関連外のうち指定するB組織（8）に整備し、「令和2年度第I期中期実行計画に基づく各組織活動計画一覧表」として、7月末に学内に配布し、教職員専用ホームページにも掲載している。（コロナ禍により、年度当初の提出が遅れ、この時期となった）。

4の目標に関して、学科・委員会等の年次報告書作成（年報レベル）に関して、今年度の学修成果及び学修支援を中心にその成果が明確に把握できるよう、評価項目及び記載要領を検討し、2月末に依頼文・記載要領を送付し、次年度当初に提出を依頼している。

【その他の活動】

- ＊「神戸常盤大学・神戸常盤大学短期大学部 内備質保証の推進に関する方針」の策定
認証評価の準備過程で、「基準6の内部質保証」における全学的な「内備質保証の推進に関する方針」を作成し、全学に明示した。基本的な考え方として4項目「目的、推進及び実施組織、客観性に担保、学内評価風土の醸成」を示し、同時に自己点検・評価活動の体系図を、「内部質保証システム体系図（教学中心）」を中心に提示している（運営委員会の承認を受け、教授会に報告）。これにより、自己点検・評価委員会の全学的な推進を機能させる組織としての位置づけが、明確になり、今後の進展への課題が見いだされやすくなったと思われる。

自己評価

【達成度の自己評価】:

- ①. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

3. 学生委員会 年間活動報告書

委員長 析倉 匡文

第Ⅰ期中期実行計画に基づく組織の中期目標
1. 学生支援体制の改革と強化・発展 2. 教育環境の整備 3. 卒煙指導の推進 4. 修学支援奨学金制度の見直し
組織の中期目標を達成するための本年度の目標
1. コロナ禍の中、診療放射線学科開設に伴う学生数の増加を視野に入れ、(1)今年度学園祭、(2)次年度新入生対象の学外オリエンテーションの実施方法について検討を行う。 2. 学生満足度調査（3年毎）の実施部署として調査回収を行い、ひとりでも多くの学生が回答できるよう努める。また、学生実態調査についても早期に学生全員が回答できるように支援する。 3. 喫煙学生の実態を把握し、対応を検討する。 4. 高等教育の教育費負担軽減新制度と本学独自の修学支援奨学金制度を連動させるために制度の見直しを行い、経済的な理由で修学が困難な学生に対して支援を行う。
主な活動内容
【本年度の目標に基づく活動】 1. (1)については 8/25 に学生自治会の学生を集め、コロナ禍の中での大学祭開催の是非について意見交換を行った。その結果、実地開催を希望する学生からの意見が多かったことから、学生自治会の意向を尊重し、感染防止対策を十分に行った上で 1 日に限定して実施を認めた。主な感染防止対策としては①参加者をプロのゲスト演奏者以外は全て在学生に限定②野外ステージと屋外での模擬店の中止③参加者への COCOA (新型コロナウイルス接触確認アプリ) の登録義務付け④メインホールへの入場者数の制限 (収容人員の 6 割以下) である。また、学園祭に参加する 3 団体 (器楽ボランティア、軽音学部、ダンス部) の本番までの練習等については各部が作成したガイドラインに則り、活動を認めることとした。当日は学生委員が見回りを行い、感染防止対策が徹底して行われていることを確認した。(2)については診療放射線学科が新たに増えたため、従来のプログラム内容で利用できる施設 (淡路夢舞台国際会議場、ウェスティンホテル淡路) の収容能力が食事会場も含めて限界にきている。また、食品アレルギーや障害をもった学生が増えてきており、宿泊を伴うことが負担とを感じる学生の割合も増加しているのが現状である。さらにコロナ禍で移動の制限や感染防止措置が必要となることも考えられ、次年度に関しては宿泊を伴わないプログラムに変更して学内で実施することになった。 2. 学生満足度調査に関しては、授業の前後の時間を回答時間に充てて記入させたことにより、前回 (平成 30 年度) よりも大幅に回答率が上がった (前回 : 60%、今回 : 80%)。学生実態調査については、オリエンテーション期間中に回答時間を設けることで、早期に新入生の調査を回収 (4 月中に 100%) することができた。 3. 学内の見回りを強化し、喫煙者の実態把握に努めた。

4. 令和元年度から新たに文部科学省が実施する「高等教育修学支援新制度」が始まり、大学独自の修学支援奨学金の見直しを行う予定であったが、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、家計の収入が減少した学生を対象に支援を行った。具体的には、選考基準を令和元年度の平均月収と令和2年度の3月から6月の平均月収を比較して、家計収入が30%以上減収している者を対象とし、支援金額の上限を30万円とした。今年度の採用実績は11名であった。

自己評価

コロナ禍の中、規模を縮小しての实地開催に踏み切ったが、結果的にひとりの感染者もなく、無事に終わることができたことは評価できる。次年度も同様な状況が想定されることから、今回の経験を次年度以降に繋げる取り組みを進めていく。

【達成度の自己評価】:

1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

4. 入試委員会 年間活動報告書

委員長 瀬川 和子

第Ⅰ期中期実行計画に基づく組織の中期目標
1. IRを活用した入学者選抜制度の検証と改善 2. アドミッション・ポリシーに基づき、入学志願者の学力及びそれ以外の能力・意欲・適性を多面的・総合的に評価・判定するための入学者選抜を実施 3. ホームページの充実やインターネットの活用による積極的な広報展開 4. オープンキャンパスの実施方法の改善
組織の中期目標を達成するための本年度の目標
1. 各学科の R.2 年度卒業生に関する卒業次の成績（取得単位、資格、国家試験結果）と入試形態に関する解析 2. 新テストにおける評価基準の設定 3. 広報委員会の協力を得ながら「今の常盤」、「最新の常盤」を発信することで本学の周知をはかり、認知度を高め、志願者増に結びつける。 4. 新型コロナウイルス感染症の予防を徹底しながら、新たな方法で 8 回のオープンキャンパスを実施し、来場者を受験に結びつける。
主な活動内容
【本年度の目標に基づく活動】 1. IR 推進室と協力して各学科 R.2 年度卒業生に関する卒業次の成績（基礎力テスト結果在籍中の成績推移、取得単位、資格、国家試験結果）と入試形態に関する解析を行った。 2. R.3 年度選抜で本学が導入する新テストに対応する調査書評価基準、面接試験評価基準、大学入学希望理由書の評価基準を設定し、入試ガイド等掲載やオープンキャンパス等で周知をはかった。 3. 在学生と教職員の協力を得ながら動画による web オープンキャンパスを作成し各学科の魅力と最新の情報を提供することで志願者の要望に応えている。 4. 新型コロナウイルス感染症の感染状況によるオープンキャンパス実施方法の変更等の告知を迅速に行い、web 相談会により他府県からの受験生対応の実施につなげることで受験生の不利益防止に努め、来場者を受験に結びつけた。具体的には、新型コロナウイルス感染症の予防（3 密の回避、消毒の徹底）に配慮しながら対面型のオープンキャンパスの方法として、予約制人数制限有り、登録制人数制限無し、学生動員の有り無し、午前午後の 2 度実施、来場者を複数班に分割しての実施等を企画し運営することで、高校生、来場者の要望に応えた。R.2 年度来場者総数は生徒 1,132（1,694）、保護者 739（1,026、）合計 1,871（2,720）名。高 3 の人数は 891(956)名。（カッコ内は R.元年度人数）であった。 【その他の活動】 制約のある中でも入試広報課を中心に高校訪問、指定校依頼など募集活動に務め、高大連携校へ出張講義や出前授業、高校での進学ガイダンスにも各学科教員が参加し模擬授

業を実施した。CCNはコロナ禍の影響により指導拠点の関東、北陸での広報活動が困難であったが入学案内を送付し、可能な限り実習先病院や看護協会訪問を実施した。

センター試験はR.3年度入学者選抜から大学入学共通テストと名称・内容ともに大きく変更されたが、教職員の高い意識と協力体制により無事に監督業務を遂行できた。

自己評価

本委員会の目的は、志願者の増員を目指し、各学科のアドミッション・ポリシーに基づいた基礎学力が有り確固たる目的意識を持つ入学生を確保することで定員を充足することにある。R.3年度入学者選抜試験は高大接続改革の実現に向けた大学入学者選抜の見直しに係る新しい選抜方法により実施された。具体的には総合型選抜の導入とこれに伴う各選抜日程の変更、大学入学共通テストの変更であったが、加えて新型コロナウイルス感染症の感染対策から広報活動の制限がある中での実施であった。

予期せぬ制約を受けながらであったが、新型コロナの感染状況に応じた適切な判断・対応をすることで結果的には全学科、前年を上回る志願者があり定員を充足することができた。今年度から導入した総合型選抜を専願制としたことで、全学科で以降の選抜を計画的に進められた。ただし、看護学科3年次編入学およびCCNに関しては志願者数の低迷が続き定員を充たしていない。

①今後の課題

保健科学部に0科が四大化し加わることで、より強力になった大学全体の存在感をアピールし、認知度を高めることで受験生確保につなげたい。

また、R.3年度入学者選抜から実施時期、名称を始め、基本的に入試のあり方が大きく変化した。R.4年度入学者選抜においてもその対応には各学科教員、問作者が内容を共通理解、熟知する必要がある。そのために各学科において入試委員を中心として新入試制度の意図を全教員に周知した上で実施に臨みたい。

② 中長期にわたって取り組む必要がある課題

いずれの学科も近隣に同系統の養成校が増えてきた中で、本学の特色を鮮明に出す必要がある。HPやOCの見直しにより現状の教育内容を周知すること以外に、志望動向や前年度の問題点の分析、新入生アンケートの実施・分析等IR室と連携しながら学生受け入れに関する適正性を検証し、将来的に求められる分野を見極めることが重要と考える。各学科の特徴となるものを強化しつつ、時代に合った、また新たに求められているものを見極めることも必要と考える。

【達成度の自己評価】:

1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

5. 教務委員会 年間活動報告書

委員長 尾崎 雅子

第Ⅰ期中期実行計画に基づく組織の中期目標
大学教育における教務的事項に関する変化に対応すべく情報収集を行い、学科・ときわ教育推進機構と連携し、教学マネジメント改革を推進する。 1. 学修成果の保証と充実した学修機会の提供 2. ICT を活用した学修方法の更なる充実 3. 激甚災害を想定した学修環境および学修の方法の整備・検討 4. 学修成果・教育成果等の積極的な情報公表
組織の中期目標を達成するための本年度の目標
1. 学科ごとの教育の特徴をふまえ、学修成果の保証と充実した学修機会の提供する 2. manaba を活用した遠隔授業の効果や課題について対応しながら、今後の充実した活用にに向けた情報収集を行う。 3. 新型コロナウイルス感染対策下において、安全に学修できるような環境の整備及び学修方法の整備・検討を行う。 4. 学修成果・教育成果等の情報公表に向けた検討を行う。
主な活動内容
【本年度の目標に基づく活動】 1. 1) 新型コロナウイルス感染拡大が全国的な問題となり、4月の緊急事態宣言下で本学も休講措置を余儀なくされた。その間遠隔授業を開始し、その後解除に伴い、一部面接授業を再開した。前期はほとんどが遠隔授業であったが、後期は大学の方針のもと、演習・実習系科目が多い本学の特徴も踏まえ、面接授業と遠隔授業の比率は6:4となり、後期は定期試験も学事歴に沿ったスケジュールで実施することができた。今後も周辺地域の感染拡大の状況を見ながら、大学の方針に則り、また文科省の法令を遵守した上で、学修成果の保証に向けた柔軟な対応を行う。 2) 本年度診療放射線学科スタート、2022年度からの医療検査学科、看護学科は指定規則変更に伴うカリキュラム改正、こども教育学科のカリキュラム充実に向けた変更、口腔保健学科4大化に向けた検討が学科ごとになされている。現在のところ委員会での共有が不十分である。しかし、ときわ教育推進機構において学部や全学共通での新たなカリキュラム設計が検討されていることから、今後は委員会において学科ごとのカリキュラムの特徴を情報共有し、調整する必要がある。 3) 基盤教育が開始して4年目となり、ときわ教育推進機構により2022年度に向けた見直しが進められている。学科の教育内容への関連があるため、ときわ教育推進機構と連携を図り、今後も情報共有していく。また基盤教育は学科を超えた専任・非常勤で組織され、コロナ禍において連絡体制など運営面での課題が明らかとなった。他にも実務的な役割を担う組織が不明確であったが、ときわ教育推進機構の規定に「基盤教育の運営・推進」が追加された。今後はときわ教育推進機構と連携をとり実務的な課題について検討していく。

2. 大学での面接授業が実施できない時期より、manaba による遠隔授業を開始した。教員・学生双方にとって不馴れで、混乱もあったが、遠隔サポートチームの支援もあり、大きな問題もなく後期授業まで終えることができた。manaba をはじめとするメディアの活用の効果については遠隔授業のアンケート結果にもあり、また多様なメディアを活用した授業展開については国も推奨するところである。2021 年度より学則変更（第 27 条）が認められたことから、今後はコロナ禍による特例措置に関わらず、効果的な活用について検討していく。また、Web 上での学生便覧、シラバスなどの情報公開を充実させ、学生に周知した。テキスト販売について、前期は予定していた対面販売ができず、販売の時期が遅くなったが、後期は Web 上での注文・販売が可能になり、後期は滞りなく学生の手元に届けることができた。

3. 3 密を避けた安全な学修環境のために、教室の収容人数に対して使用人数が半数程度になるように、教室の調整を行った。履修者数が多く、教室の準備が困難な場合は、遠隔授業の依頼や 2 教室に分かれたライブ授業など感染対策を行った。またマスク着用、手指消毒、体調管理など学生に向けてはガイダンス等で注意を促した。

4. 学修成果・教育効果については学生個々に情報を公表している。個人の成績結果についてはポータルシステムにて確認できる。今年度は GPA の活用について学科ごとの現状を情報交換した。履修指導や学修計画の見直しや奨学金選考の基礎資料とすることはもとより、臨地実習の履修要件や選択課程の選考など、学科ごとに検討中である。しかし、科目ごとの評価が影響することから選考のために明確なポイントを示すにはさらに精査が必要である。今後は GPA について学生自身へも意識づけができるよう、ガイダンス等で説明していく。

【その他の活動】

特になし

自己評価

【達成度の自己評価】:

1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

6. SD委員会 年間活動報告書

委員長 畑 吉節未

第Ⅰ期中期実行計画に基づく組織の中期目標
I 当初の予定は以下のとおりであった。 <u>(1)「内部質保障の実質化」に向け</u> ①昨年に継続し、全学で使う IR を目指し、蓄積されたデータの活用方法を検討する。 ②R 科の開設を機に大学教育の将来像としての IPE に関する基本的事項を理解し、教育の質の確保及び教育環境の向上を目指す。 ③医療の将来像を理解し、高等教育における医療人の育成に活用する。 ④新型コロナウイルス感染による緊急事態に対応するため、オンラインシステムによる授業を急遽強化する必要となったため、予定していた ICT 研修のマナバの活用方法をオンライン等の方法を駆使しタイムリーに実施する。 <u>(2)教職員の教育力・教育支援力を向上させる研修会の機会を継続する。</u> <u>(3)大学全体の研修会を効果的・効率的に運営するために他の委員会と共催する研修会を行う。</u> <u>(4)認証評価に向け SD 活動の意義と実際を文章化し準備する。</u> II 新型コロナウイルス感染症の影響で計画した研修が対面で実施できない中、年度途中から教育の質保証の観点から遠隔授業における教育力がより明確な課題となった。
組織の中期目標を達成するための本年度の目標
I 当初の予定 研修の観点①医療・教育行政の動向の把握、②学内で優先して共有すべき内容、③教育力・教育支援力の向上 ③教育力・教育支援力の向上 ④教職協働を図る 〔SD 全体〕研修の観点①医療・教育行政の動向の把握、②学内で優先して共有すべき内容、④教職協働を図る 研修会 4 回 1. 新任教職員に、本学の建学の精神や沿革・教育理念を理解し、本学教職員として望ましい姿勢を培うとともに業務遂行に必要な本学のシステムを理解していただく研修の機会を持つ。 2. 「全学で使う IR」 IR に基づいた教育と研究を戦略的に推進するため「全学で使う IR」を目指し、蓄積されたデータの活用方法を検討する。 3. 医療専門職に期待される将来像を再認識できる研修の機会を持つ。 4. 各委員会が開催する研修会を効果的・効率的に運営するための調整を行う。 5. 研修会への参加率を維持・向上する(参加率 75%)。 〔FD 部門〕(観点 3 教職員の教育力・教育支援力の向上) <u>1. ICT研修 (パート 1) マナバ研修</u>

新型コロナウイルス感染による緊急事態に対応するため、オンラインシステムによる授業を急遽強化する必要となったため、予定していたICT研修のマンバの活用方法をオンライン等の方法を駆使しタイムリーに実施する。 <u>ICT研修（パート2）エクセル研修</u> 学内諸業務の効率化を図るためにエクセルの基本的操作を学ぶICT研修 <u>2. IPEの概念と取り組みについて</u> 大学教育の将来像の一つとして、IPEに関する基本的事項を理解し、本学教育の質の確保及び教育環境の向上を目指す機会を持つ。 <u>3. 学科内FDの促進</u> 各学科の状況に即した教育技法の開発を図るために機会を継続する <u>4. 公開授業の促進</u> 教員相互の教育技法を学び合う機会として公開授業の促進を継続する（各学科 10 件の公開授業実績を目指す）。 <u>5. 関西 FD 連絡協議会・大学コンソーシアムひょうご神戸の相互公開による研修機会の情報をタイムリーに学内に発信し、外部の FD 研修会の機会の確保を図る。</u>	【事務部門】 1. 認証評価に向け準備をする。 2. 共催研修を開催の準備をする。 Ⅱ コロナの影響で目標 1 と以外は 7 月に以下のとおりに変更 〔趣旨〕国内で新型コロナウイルス感染症が引き続き拡大している現在の状況に鑑み、「教育の質保証」の観点から遠隔授業の取り組みをより効果的な教育の機会とするために、前期の遠隔授業を振り返るとともに、後期の双方向での遠隔授業の質を向上させる手がかりを得るために研修会を開催する。 〔目標〕 1. 教育の質保障の観点から、遠隔授業の成果の検証を行う 2. モデル授業を参考にして、遠隔授業を見直しさらなる充実を図る 3. 各学科の状況に即した教育技法の開発を図るために学科内FDの機会を継続する 4. 教員相互の教育技法を学び合う機会として公開授業の促進を継続する（各学科 10 件の公開授業実績を目指す）。 5. 関西 FD 連絡協議会・大学コンソーシアムひょうご神戸の相互公開による研修の情報をタイムリーに学内に発信する。
主な活動内容	（目標に沿って記述） S D 研修の 4 つの柱のうち「教職協働の推進」「教育力・教育支援力技法の向上（F D）」により計画的に研修会を企画運営した。 【SD 全体】 <u>1.新任教職員</u>

4月3日に第1回研修会において、学長・法人本部長・SD委員長・各課課長が講師となり以下についてオリエンテーションを実施し、新任教職員の大学への早期適応を図った。

- ①大学の研究・教育の理念や目標 ②大学の歴史や文化 ③本学教員に求められるもの
④SDの義務化と役割 ⑤大学における学習・教育・研究の支援環境

2. 研修会への参加率を維持・向上する(参加率 75%)。

いずれの研修会も高い参加（100%、83.3%）であった。そのための取り組みは以下の4点である(表1 参照)。

- ①研修会の2ヶ月前に各回のSD研修会の趣旨と内容を全学メールで広報するとともに、各学科会議や事務局会議においてSD委員からの研修会の参加への周知を図った。
②当日に参加できなかった教職員のためにオンラインでの研修の視聴期間を1週間設け参加率の向上を目指した。
③ホームページのSD活動欄に、参加者の意見を公開する工夫を続けた。
各研修会のアンケートから参加者の理解度・満足感・教育への活動可能性が高く評価され、意味のあるコメントが多く寄せられ目標は達成できた。

【FD 部門】

1. 第2回の研修会は全教職員を対象に以下のとおりで開催した。

〔月 日〕2020年9月14日(月) 10:00～9月30日(水)

〔テーマ〕当大学の遠隔授業の取り組みと今後の展望

構成 1. 特命チームが果たした遠隔授業の総括と現時点での展望

2. モデル授業の紹介①スタンダード授業

②manabaの機能を駆使した授業の工夫

3. 全教員の授業への取り組みと課題及びmanabaシステム改善への要望

〔講師〕特命チームサブリーダー 大森雅人 学部長

看護学科 教授 生島祥江

〔方法〕①全学メールを通して研修会を広報し、視聴する方法を説明する。

②教職員をmanabaのコースメンバーとして研修を視聴する。

③レポート機能を活用しアンケートを実施する。

遠隔授業特命チームの代表である教育学部長の大森先生から前期の取組の総括と今後の展望についてご報告をいただいた。さらに教職員が共有すべき遠隔授業の標準形を示していただきました。看護学科の生島先生からはmanabaの機能を効果的に活用した授業展開方法についてご紹介いただいた。研修会を通して参加者は遠隔事業のあり方を確認し、前期の遠隔授業を振り返りながら、後期の授業を考える貴重な機会となった。研修会後のアンケートでも積極的な意見が多く寄せられた。

2. 学科内FDの促進

各学科の状況に即した教育技法の開発を図るために機会を継続する。

実際には各学科内FDの年間目標・計画、中間評価・最終評価を適宜確認し、進捗状況を共有した(表3参照)。各学科では学科の目指す教育の観点から年度の目標・展開方法・評価のプロセスを踏み、SD委員がリードし運営した。

3. 公開授業の促進

対面授業が困難な中にも関わらず、教員相互の教育技法を学び合う機会として公開授業は例年を上回る件数の公開状況であった（表2参照）。特に開設初年次で教員数が少ないにも拘らず、診療放射線科は公開授業の促進に努力された。

4. 関西FD連絡協議会・大学コンソーシアムひょうご神戸の相互公開による研修機会の情報をタイムリーに学内に発信し、外部のFD研修会の機会の情報を発信した。

〔事務部門〕

1. 認証評価に向け準備をする。

認証評価に向けて、法人本部長、統括部長、SD委員長が協議し認証評価の準備を確実に行った。

表1. 研修会の全体像

研修の分類	開催日・参加率	テーマ
○教職協働の推進	1回：4月3日 (100%)	新任教職員研修（オリエンテーション）
○教育技法・教育支援力の向上(FD)	2回：9月14日 (教員 83.3%) (職員 17.1%)	当大学の遠隔授業への取り組みと今後の展望

表2. 公開授業の所属別件数

所属	M科	N科	R科	E科	O科	CCN科	計
2年度	12	13	7	11	7	3	53
元年度	(8)	(12)		(10)	(9)	(10)	(49)

自己評価

1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

2. 次年度の課題：昨年度実施できなかった研修をオンラインの活用等で可能にする。

- ・「内部質保障の実質化」に向け①一昨年に継続し、全学で使うIRを目指し、蓄積されたデータの活用方法を検討する②R科の開設を機に大学教育の将来像としてのIPEに関する基本的事項を理解し、本学教育の質の確保及び教育環境の向上を目指す。③コロナ禍での遠隔授業に関して当大学での活用可能性を検討する。
- ・大学全体の研修会を効果的・効率的に運営するために共催する研修会を検討する。
- ・教員の教員力を向上させる研修会の機会を継続する。

3. 中長期にわたって取り組む必要がある課題

- (1) 大学の「目指す大学像」を念頭に置き、「教育」「研究」「社会貢献」から内部質保証を図れるような取り組みの活性化を図るため必要な研修会を効果的に企画・運営する
- (2) 大学を取り巻く環境の変化をとらえ諸改革に適切に対応するために研修会は以下の4つの観点から計画的に企画する。

①医療・教育行政の動向の把握、②学内で優先して共有すべき内容、③教職員の

教育力・教育支援力の向上、④教職協働を図る

(3) 研修の参加者の意見を活用するなど研修効果を検証しながら実施する。

(4) できる限り 100%に近い参加率（公務の重複の方はビデオフォロー）を目指す。

表 3.令和 2 年度：学科内 FD 活動の取組概要

	目的	活動の概要	成果
M 科	以下 3 点を目的とした。 ①入学選抜における変更点についての共通理解を図る ②2022 年度のカリキュラム改正に向け変更点等を教員間で共有し、新カリキュラム作成に活用 ③コロナ禍で多様な状況に置かれた学生への対応について理解	①入学選抜の変更点を入試委員より説明を受けた。6 月実施。参加率 100%。②学科長より臨床検査技師教育内容の改正に関する説明を受けた。7 月実施。参加率 100%。③「医療系大学等の学生理解と対応について」オンライン受講 1 月実施。参加率 86.4%。	①集団面接や試験科目追加の狙いの理解を図ることができた。 ②教育内容の追加による必修科目の設定、単位数、各科目の配当年次・開講時期の変更の必要性について教員で理解を図ることができた。③学生指導を行う上で有用な内容であった。
N 科	2022 年度の第 5 次カリキュラム改正を見据え、改正カリキュラム作成に向けての取り組みのありかたを学科内で共有し、今後の検討に活用することを目的とし実施した。	将来構想、カリキュラム改正の背景と経緯、改正のポイントなど、今後の検討に向け共通言語となることを意図し講義を実施。カリキュラム検討プロジェクトの方向性の提案があった。8 月実施 参加率 96.4%	「看護基礎教育検討会報告書」（厚生労働省）等、関連する豊富な資料に基づいた講義によりカリキュラム改正の全体像を学科教員全員で理解できた。実施後アンケートでは概ね理解が深まったとの回答を得た。
R 科	学科内で国試対策模擬試験作成での利用が決まった、組版ソフト LaTeX について、利用方法を学ぶことを目標とした。	LaTeX の使用経験がある教員が講師を務め、国試問題を用いた文書ファイル作成の手順、コンパイルの方法等を学習し作成したファイルの利用方法の検討も行った。1 月実施 参加率 100%	概要については概ね理解できたようである。使用経験がない教員からは「コマンドを一つずつ理解することで活用できると感じた」という感想があった。今後も継続的に講習会の形等で利用方法を学んでいく必要がある。
E 科	2020 年度より変更される新入試制度と求める学生像について共通理解を図り、さらに、入学前教育についても併せて検討する必要がある。そこで「新入試制度の共通理解と入学前教育の充実」を目的に定めた。	新入試制度について入試委員長からの説明を受け、質疑応答を行った。また、入学前教育について、特に早期に入学を決定した入学予定者に対し充実させる必要性を確認した。6 月実施 参加率 100%	アドミッションポリシーの確認と、特に 2020 年度から導入される総合型選抜の入試制度について学科教員で共通理解を図ることができた。また、入学前教育はこれまでを踏襲しつつ課題の内容をコース別に変更した。
O 科	4 年制の設置認可に向けて、法人と開設準備室（教授・准教授）が中心となって準備を進めていくが、学科教員全員の共通理解を図り、2022 年度の開設に向け設置準備が円滑に進むことを目的とした。	開設準備室委員が講師となり、①進捗状況②取得可能資格③カリキュラムの編成などを説明した後、意見交換をおこなった。目指すべき教育体制について共通理解を図った。10 月実施 参加率 92.9%	国家試験受験資格に加え、将来のキャリアアップのための資格取得を可能とするなど、構想中の新カリキュラムについて理解することができた。設置認可に向けて各教員が準備することなどを確認することができた。
C C N	通信制課程において数少ない対面授業の持つ意味は大きく、コロナ禍で実施できなくなったことを受け、効果的な遠隔授業を実施するために、必要な知識と技術を習得することを目的とした。	基本的な遠隔授業の方法について講義を受け（動画撮影の方法、手順・ナレーション付きパワーポイントの作製方法）。その後、各教員の担当科目の遠隔授業実施後、アンケートを行った。5 月実施 参加率 100%	①遠隔授業の実施に必要な技術を習得し、教育に活用することが出来た。 ②遠隔授業における問題点、今後の改善点など、教員間で共有することが出来た。

7. 広報委員会 年間活動報告書

委員長 山崎 麻由美

第Ⅰ期中期実行計画に基づく組織の中期目標
ホームページの充実やインターネットの活用による積極的な広報展開
組織の中期目標を達成するための本年度の目標
1. 「魅力ある大学」として広く社会に発信できるコンテンツ作りのため、他部署と連携して 2020 年度内に HP の全面リニューアルを完了させる。 2. 教育・研究・社会貢献に関する情報公開を積極的に行う。また HP 記事の更新に学科や部署の偏りがないようにし、迅速に漏れなく掲載する。 3. SNS を使った広報を活性化させる。
主な活動内容
【本年度の目標に基づく活動】 1. 10 月 19 日新しい HP に変更した。本年度から導入の入試の web 出願も問題なく移行できた。アクセス数は 4 月から 2 月までのアクセス総数で比較すると 2019 年度の 431,478 回から 2020 年度の 525,756 回と 21.8%増加、リニューアル後の 10 月以降のアクセス数は前年度比 1.2%とわずかながら増加していた。また今年度スマホからの新規訪問率も 2020 年 9 月（リニューアル前）は 46.9%、リニューアル後は 54.1%と増加しており、新しい HP になってから新規の訪問者が増えたことが明らかである。利用者のニーズに合ったリニューアルになったのではないかと考えている（根拠資料：Web Analytics Reporting Service の報告書） 2. 「トピックボックス」を立ち上げ、学生および教職員の活動や業績を Google のスプレッドシートに記入し、教職員全員で共有できるようにした。（根拠資料：①広報委員秋議事録 ②「トピックボックス ブックマークまでの手順（12 月 10 日に tokiwa-all で配信）」③web 上の「トピックボックス」） 3. SNS を使った広報については、今年度の掲載は 8 件と小規模ではあるが、昨年度から継続して行っている。 【その他の活動】 本学の実績を報告するツールとして広報紙を年 2 回発行した。広報紙は HP にも掲載すると共に、オープンキャンパスでも配布し、受験生に対する広報にも利用している。その他、学外（KIT）にも設置し、広く本学を広報することに努めた。（根拠資料：広報委員会議事録、広報紙「キャンパスレポート 61 号、62 号」）
自己評価
1. 新型コロナウイルスの蔓延で、HP 制作に必要な動画や写真撮影のスケジュールが大幅に遅れた。そのため当初予定していた 4 月 1 日のリニューアルは叶わなかったが、今年度中に新しい HP を立ち上げることが出来た。今後は各部署の意見を聞きながら、修正を加えていく予定である。 2. ①新型コロナウイルスの蔓延のため本学主催のイベントや活動の中止が重なり、HP へ

の掲載数も減少した。しかしその中でも教員の教育・研究活動は遅滞なく掲載することが出来た。（根拠資料：HP トップページ「NEWS」への掲載記事）

②「トピックボックス」により教職員が自分の属している学科や部署にとどまらず、他学科や他部署のことを知る機会を作ることが出来た。また電子決済を活用し押印を廃止すると共に、掲載までの時間を短縮した。トピックボックス内の記事は学外での広報に使うこともできる。部署によって記事の更新回数にばらつきがあるので、引き続きトピックの提供や、トピックボックスの閲覧について呼びかける。また、広報活動に広く利用してもらうために常盤女子高校とも共有できるようにする。

3. SNS を使った広報については引き続き活性化の方法について模索している。昨年同様、Instagram更新に携わる専属委員の負担を考慮しつつ、効果的な広報を行いたい。今年度は新型コロナウイルスによる対応と掲載すべきイベントが軒並み中止や延期になったことも更新数が少なかった理由のひとつである。来年度は更新担当者の数を増やすなどを実践していきたい。

次年度への課題は、①HP の掲載 NEWS 等の更新数を増やすこと ②トピックボックスの掲載数の増加を目指すと共に、IR 推進室と連携しシステムの改善を加えていくこと ③SNS を使った広報の掲載数を増やしていくこと の3点である。

【達成度の自己評価】：

1. できた 2. ☒ ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

8. 図書・紀要委員会 年間活動報告書

委員長 八木 孝和

第Ⅰ期中期実行計画に基づく組織の中期目標
1. 図書館機能の充実・拡充のために電子資料のアクセシビリティの向上を図る。 2. 研究成果の情報発信である紀要発行について検討する。
組織の中期目標を達成するための本年度の目標
1. 電子資料のアクセシビリティの向上を図るために ①. 学生・教員の利用ニーズに応じた電子資料を収集する ②. 電子資料活用の利便性を高める ③. 電子資料の利用方法について周知拡大につとめる ④. 電子資料の評価・分析を行う 2. 学生の図書館利用を促進する取り組みを継続する 3. 紀要発行について検討するために ①. 編集・発行手順を整備する
主な活動内容
【本年度の目標に基づく活動】 1. 電子資料のアクセシビリティの向上を図るために ① リクエスト(購入希望)が出しやすいように、HP 上からのリクエストフォームを作成した。 (リクエスト件数 1 件) ② 図書館 HP、蔵書検索 OPAC をリニューアルし、マイライブラリ機能を追加し利用の利便性向上に努めた。(Web 予約 19%増) ③ 電子資料利用に関するアンケート調査を実施し、さまざまなニーズについての情報を得た。(回収率:学生 81%・教員 52%) ④ コロナ禍において、出版社各社の協力のもとデータベース・映像資料 6 種類の電子資料を期間限定で提供し、電子書籍のトライアル利用を行い自宅での学習の支援を行った。(トライアル利用閲覧 1,053 回) ⑤ 電子資料の利用方法について周知拡大のため、またコロナ禍において学外から利用ができる電子資料の広報のためのお知らせを約 20 回発信した。 ⑥ 電子資料の評価・分析として、各資料の利用ログを収集・分析をし、利用資料の傾向等を確認した。(電子書籍の利用:2018 年年度 2,995 回・2019 年度 6,083 回・2020 年度 1 月末 6,342 回+トライアル利用 1,053 回) 2. 学生の図書館利用を促進する取り組み ① 教員と連携した授業・課題等での図書館利用の促進として、データベースのガイダンス利用時のアクセス数追加をした。(2 回) ② コロナ対策のため利用制限せざるを得ない中で活発に行うことはできなかったが、読書マラソンの表彰を行い、読書マラソンニュースを配信した(読書マラソン表彰者 3 名)

③ 閉館中も郵送貸出・事前申込制利用の取り組みを行い学習支援を継続した。(郵送貸出 7 件・15 冊・事前申込利用 1 件) ④ 利用しやすい館内スペースの配置。学生用 PC のリニューアルに伴いデスクトップパソコンを減らし、ノートパソコンを増加し、パソコンブースを個人用閲覧席に転用したことで、閲覧席を 7 席増加した。窓側文献検索用 PC を移動したことで、コロナ対策として距離を置いた状況で、窓側カウンター席が有効利用されている。
3. 紀要発行について ① 「投稿の手引き」を改訂した。 ② 投稿者の利便性向上のために、学内 HP だけでなく学外からもアクセスできる Web 上に投稿の手引きを掲載した。 【その他の活動】
自己評価 1. 電子資料のアクセシビリティの向上を図る目的は、一部達成できたが、さらに利用方法の広報やニーズ把握に努める必要がある。 2. 図書館利用を促進する取り組みは継続しているが、来館での利用のみならず学外からの利用も含め教員と連携した授業・課題等での図書館利用の促進の必要がある。 3. 紀要投稿の方法は、周知でき一定の成果が見られる。査読方法について、検討していく予定である。 【達成度の自己評価】: 1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

9. 危機管理（災害）委員会 年間活動報告書

委員長 畠 榮

第Ⅰ期中期実行計画に基づく組織の中期目標
1. 学内全体の防災訓練の企画と学生の危機管理マニュアルの整備等、本学の危機管理機能を充実させる。 （参考）第Ⅰ期中期実行計画 1. 教育に関する計画（1）教育の質保証の推進 ⑤激甚災害を想定した学習環境および学習方法の整備・検討 5. 地域連携に関する計画（5）防災・減災教育 学生・教職員を対象とした防災訓練を行うなど防減災活動を実施する・・・
組織の中期目標を達成するための本年度の目標
① 本年度の目標 1. 消防訓練の実施 2. 新型コロナウイルス感染対応をふまえた危機管理体制を再構築する。 ② 中長期にわたって取り組む必要がある課題 1. 学生の危機管理マニュアルの作成 2. 学内全体の防災訓練検討
主な活動内容
【本年度の目標に基づく活動】 1. 消防訓練の実施 令和2(2020)年4月はコロナ禍で新入生に対する避難経路の説明や避難訓練を実施できなかった。更に「ふれあい健康フェスタ」に合わせ、教職員を交えた消防訓練を計画実施するところ、コロナ禍により「フェスタ」開催中止となるなど、当面実施が困難となった。 2. 新型コロナウイルス感染対策については、「学長会議」を中心として取り組み、その後、学長をトップとした「新型コロナウイルス対策本部会議」を組成し、本学の方針を定め、またガイドライン等を策定するなど、感染予防を行った。 これらの取り組みは、本委員会が中心となって策定した「新型インフルエンザ等対策マニュアル」に沿って実施されている。 【その他の活動】 ○ 自然災害については、台風・水害等、特段の襲来がなく、通常の運営のなかで対応が行われている。なお台風により、地域住民の避難対応要請があり、長田区役所と協議し、感染予防を取りながら対応した。 ○ 学生及び教職員の安否確認システムについて、manabaを活用した確認システムを立ち上げ、関係者全員を対象とするものとなった。 ○ 中長期の課題として、学生の危機管理マニュアルの作成と学内全体の防災訓練検討について、いずれもコロナ禍のなかで検討を進めることができていない。ただし、学生のマニュアルについては、神戸市危機管理室と内容について協議をしている。

自己評価

コロナ禍により委員会活動も制約され実施計画も進めることができなかったが、これまでのマニュアル整備が対策に生かしたのは評価できると考える。また、学生を対象としていた安否確認が、全教職員も対象とすることができた。ただし進めるべき避難訓練について、企画協議を今少し進めることができなかったのは事務局として反省点である。

【達成度の自己評価】：

1. できた 2. ほぼできた ③. あまりできなかった 4. できなかった

10. 神戸常盤地域交流センター 年間活動報告書

センター長 中村 忠司

第Ⅰ期中期実行計画に基づく組織の中期目標
1. 地域貢献：「子育て総合支援施設 KIT」「健康ふれあいフェスタ」「わいがやラボ」など地域交流の場を積極的につくるとともに、諸団体（地域団体・行政機関・企業等）との連携強化を図る 2. 多文化共生：多文化共生推進のためのワークショップ、シンポジウムを開催するとともに、学生参加プログラムとして国際保健室活動などの正課内外への組み込みを検討する。 3. 公開講座（生涯教育）：社会の多様なニーズに合った生涯教育の体制を体系的に整備するとともに、本学知財のさらなる可能性を探る。 4. インナーブランディング：建学の精神に基づく地域活動の充実と学内の理解の一層の深化のための仕組みづくりを行う。教職員・学生 がアクセスしやすい地域交流・社会連携活動情報サイトを構築する。 5. 防災・減災教育：学生・教職員を対象とした防災訓練などの防減災活動を実施するとともに、地域において防減災に関する知識 を啓発していく。
組織の中期目標を達成するための本年度の目標
1. 教学マネジメント改革により、平成 29 年度より開講された「地域との協働 A」「地域との協働 B」と連携した地域活動を企画する。 2. 学生に対し、積極的に地域活動を広報し、関心・参加を高める。 3. 既存の公開講座をベースに、高齢者を中心とした企画以外に、新たな年齢層を取り込める新企画を提案する。また、子育て総合支援施設 KITでの講座も年間 10 回以上の開催を目標とする。 4. 本学最大の社会貢献行事である「健康ふれあいフェスタ」を更に発展させ、来場者数で前年度比 10%以上を目指す。 5. 平時・有事に関わらず、神戸市長田区社会福祉協議会と連携し、学生の市民性の向上に寄与する活動を企画・運営する。 6. 多文化共生社会の実現に寄与する活動を企画・運営する。
主な活動内容
【本年度の目標に基づく活動】 本年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から多くの活動が制限され、小豆島合宿、福島スタディツアー、そして健康ふれあいフェスタも中止とせざるを得なかった。その中でも公開講座は、オンラインという新たな手法で開催し、地域的・世代的に幅広い層が受講できたことは、大きな意味があった。 【その他の活動】

自己評価
【達成度の自己評価】： 1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

11. 国際交流センター 年間活動報告書

センター長 鈴木 高史

第Ⅰ期中期実行計画に基づく組織の中期目標
1. ネパール交換研修プログラムの充実 20年以上におよぶネパールとの研修生交換事業のさらなる発展を目指し、短期研修プログラムの系統的な作成と効果的な実施に取り組む 2. 国際交流プログラムの実施 ① 各学科で実施の海外学生派遣プログラムの実施支援を行い、特に「国際保健医療活動Ⅱ」に関しては大学コンソーシアムひょうご神戸の参加大学に開放する ② 「異文化体験」等をテーマとした各種国際交流プログラムの実施を通して、学生がグローバルな視点から共生の意識を持てるよう支援する 3. 国際交流センター機能の充実 国際交流関連情報にアクセスできるセンター機能の充実を目指し、多言語・多文化に関心を持つことのできる資料の整備を進める
組織の中期目標を達成するための本年度の目標
1. ネパール交換研修プログラムの発展的な内容の検討 次年度実施に向けて、ネパール交換研修生のニーズに合ったプログラムの検討を行う 2. 国際交流プログラムを実施する ① 本学で実施されている海外渡航を伴う国際交流プログラムの現状を把握し、次年度以降の実施支援に必要な情報収集、並びに方向性の検討を行う ② 学生のグローバル共生の意識を高め、また国際貢献を担う人材を育成するために資する学内実施国際交流プログラムの検討を行う 3. 国際交流センター機能の充実を図る センター機能の充実を目指し、多言語・多文化に関心を持つことのできる資料の整備を進める
主な活動内容
【本年度の目標に基づく活動】 1. 今年度はCOVID-19 感染対策として渡航が制限されたため、次年度実施に向けて、ネパール交換研修生のニーズに合ったプログラムの検討を以下のように行った。 (1) 2021 年度渡航可能となった場合は本学の派遣より再開し、翌年受け入れと順次変更していくことを決定した。 (2) 例年ネパール研修受け入れの時期が本学の実習の時期に重なり協力者が得られにくいことから、実施時期を12月から2月末～3月末に変更できないかを検討し、今後調整していく。 (3) 研修内容については、医療系のニーズは満たされるが、教育系の研修内容が手薄になりがちであるため、本学のニーズを明確にしてネパール側と交渉していく必要があると考えられた。そのためには研修の計画段階からスケジュールと研修内容の調整を行う担当者がネパール側に（多忙な Rai 先生に加えて）複数人いることが強く望まれ、本検討内容を

次年度にネパール側にフィードバックを行っていく。

(4) コロナ禍においてネパールとの実際の交流は中止となったが、22 年以上に及ぶ貴重な交流を中断することなく存続させるために「ネパール交換研修オンライン勉強会

(OSEP)」を企画し、学生が参加しやすい時期を考慮して 2021 年 3 月 10 日に実施した。

参加者は、日本側の発表者 11 人、ネパール側が 2 名、日本側のオンライン視聴学生が 12 名 それに教職員を加えて総計で 30 名上となった。

OSEP 後、交流会参加者に行ったアンケートの回答では、オンライン交流会企画に概ね好意的であった。次回の勉強会で行いたいこととして、「文化」、「伝統的プレゼントを送り合って紹介する」、「在日（在ネパール）外国人支援」、「医療体制の違い」などの意見があり、次回に向けて、このようなトピックに興味がある学生に企画段階から参加を促すことにより、研修内容をより充実させられると考えられた。

2 - ①. 本学で実施されている海外渡航を伴う国際交流プログラムに国際交流センター独自の目標設定の検討を行った。しかし、ネパール交換研修以外は全て正課活動として行われており（「国際保健医療活動 II」（MN）、「海外研修」（E）、「海外研修」（O））、それぞれの学科が設定している目標があるため、国際交流センターがこれらの活動に独自の目標設定・効果測定を行うことは難しいと考えられた。そこで本学がコンソーシアムひょうご神戸に開放している「国際保健医療活動 II」に焦点をあて、コンソーシアム側の目標（本プログラムへの参加を通じて国際理解が深まったことを実感する学生の割合：参加学生の 80 パーセント以上（期間中に 2 回測定））に準拠して、参加学生の学修効果測定を行っていくとの結論に達した。

2 - ②. 例年実施している研修会や講演会は COVID-19 感染防止のため、中止とした。この間、これまでの研修会のアンケート調査を分析し、今後の活動方針を検討した。研修会の内容については、「満足」と「やや満足」が 100%であるが、日時や場所については「不満」を回答する学生も見られた。参加人数については、2016 年度の前期と授業の一部として学生に参加をさせた 2019 年度の JICA 講演会以外は、教職員を併せても 20 名に達することがなかった。そこで、研修会等企画・GCC ルーム活用推進担当の教職員を中心に協議を行い、これまで実施してきたプログラムの一部を 2022 年度から開講する基盤教育分野「国際理解」科目として、国際交流センターが提供することを検討し、準備を行った。科目化することによって、より多くの学生が国際理解や多文化理解についての知識を深める機会を持つことが期待できると考えられた。

3. 国際交流センターが同窓会とともに使用している部屋の次年度以降の使用形態が不明であったため、新規の書籍や CD 等の資料購入は行わず、学生の利便性を高めるため現有の書籍や資料を整理するための書棚購入・設置を行った。

【その他の活動】

打ち合わせ会議

2020 年度は、センター全体会議を 6 回開催（4 回対面、2 回メール審議）した。さらにサブグループ（ネパール交換研修、大学コンソ海外外研修、研修会等企画・GCC ルーム活用推進）に分かれての活動を随時行った。

大学コンソーシアムひょうご運営

国際交流員委員会副委員長校として、「“ひょうご神戸”の国際性を活かしたグローバル人材教育」課題に関して、Zoom 会議、メール審議を行った。

共同研究

国際交流プログラムでの活動内容を発展させ、Rai 先生らと共同で行った疾病媒介蚊研究結果を学術雑誌に報告した。

自己評価

2020 年度は COVID-19 の影響で、海外渡航を伴うプログラムに加えて、密を避けるため学内でのプログラム実施に関しても大幅な制限を受けた。このため中期目標にもとづいた活動を計画通りに行うことはできなかった。一方で今年度は次年度以降の活動に向けて振り返りを行うことができた。また、新規プログラムとして OSEP を開催し、さらに基盤教育科目「国際理解」の開講準備を行い、科目化に向けて大きく前進することができた。

【達成度の自己評価】：

1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

12. K T U研究開発推進センター 年間活動報告書

センター長 中田 康夫

第Ⅰ期中期実行計画に基づく組織の中期目標
1. 「私立ブランディング事業」により開設された本学独自の「子育て支総合支援施設 KIT」「ときわんモトクロ」を拠点とし、総合的な子育て支援関連の研究を系統的に推進する。 2. 地域社会における多文化共生の実現をめざし、保健、歯科衛生、教育、保育の分野での調査・研究を企画し推進する。 3. 多様な研究人材を活かし、医療・保健分野における基礎的・先導的研究の推進を図る。 4. 「外部資金」獲得のための支援体制を構築し、学内研究活動の促進を図る。
組織の中期目標を達成するための本年度の目標
1. 推進のための研究環境の整備 2. 推進のための研究環境の整備 3. 推進のための研究環境の整備 4. 「外部資金」獲得のための支援体制の構築
主な活動内容
【本年度の目標に基づく活動】 1. 「テーマ別研究」の応募区分に「地域研究」枠と「教育研究」枠の新設 2. 「テーマ別研究」の応募区分に「地域研究」枠の新設 3. 「研究シーズ集」の作成と学内外への公開 4. 「外部資金」募集案内の全学的発信と、特に若手研究者に対する応募書類の校閲と加筆修正のアドバイス 【その他の活動】 ・年1回の「神戸常盤学術フォーラム」の開催と、並行して科学研究費申請説明会 ・科研申請サポート
自己評価
【本年度の目標に基づく活動】 1. および2. については新設でき、本年度は「地域研究」枠4件と「教育研究」枠8件を採択した。3. の「研究シーズ集」についても作成でき、既に本学ホームページ上で公開している。4. 「外部資金」募集案内の全学的発信を随時学内オールメールで発信し続けているが、なかなか応募と採択には至っていない現状にある。 その他、本年度は科研の新規採択が6件（採択率25.9%）であり、過年度分を含め合計21件の科研が進行中である。科研の申請サポートを行い本年度は26件の申請書を提出することができた。科研も含めた「外部資金」の申請については、申請者数と申請者が固定化している現状もみられるため、特に若手の研究者や申請初心者を中心とした申請サポート体制のさらなる充実を図っていくことが最重要課題である。 【その他の活動】 本年度はコロナ禍のため毎年開催している「神戸常盤学術フォーラム」の開催が危ぶまれたが、学内の協力により日程を多少変更したうえで、onlineで開催することができた。

【達成度の自己評価】:

1. できた ② ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

13. 研究倫理委員会 年間活動報告書

委員長 庄司 靖枝

本年度の目標
1. 研究倫理委員会への新たな申請様式に関する検証 2. eーラーニング教材による研究倫理教育システムの導入の検討 3. 教職員および学生が行う研究に関する研究実施計画及び研究成果に関する審査
主な活動内容
【本年度の目標に基づく活動】 1. 昨年度導入の manaba で書類申請を行い、新様式にて円滑な申請を行うことができた。申請様式の精錬を目指し、申請書類の様式1『実施計画審査申請書』の書類のチェック欄に①「実施研究者の所属学科長の確認済み」を新たに付したこと、「科学者の行動規範（日本学術集会）」を「科学者の行動規範（日本学術集会） <u>の確認済み</u> 」の言葉を付け加え様式を更新した。
2. 本大学の研究倫理教育研修では「科学の健全な発展のために（日本学術振興会）」と「THE LAB（科学技術振興機構）」「研究活動上の不正行為の防止及び対応に関する規程」の2つの教材と学内規程を通読・視聴を行っている。研修受講者のうち、希望者に研修受講証を発行している。研修受講者がその場で終了証明を得て円滑に研修できるように、研究倫理eーラーニングコース『科学の健全な発展のために－誠実な科学者の心得－』『el core』の来年度導入について計画中である。
3. 教職員および学生が行う研究に関する研究実施計画及び研究成果に関する審査
1) 教職員が行う研究に関する研究実施計画及び研究成果に関する審査 令和2年度は10回の委員会を開き、26件の申請〔医療検査学科5件、看護学科9件、こども教育学科4件、口腔保健学科8件、（再審査含む）〕について審議した。 審議の結果、承認は21件、変更の勧告2件、取り下げ3件であった。
(1) 第1回委員会（5月11日）大学2件（こども教育1、看護1） (2) 第2回委員会（6月9日）大学2件（医療検査1、看護1） (3) 第3階委員会（8月12日）大学2件（子ども教育1、看護1） 短大部1件（口腔保健1） (4) 第4回委員会（9月8日）大学1件（医療検査1）、短大部1件（口腔保健1） (5) 第5回委員会（10月9日）大学5件（子ども教育1公表審査、医療検査2公表審査、看護2）、短大部2件（口腔保健学科2、計画変更1） (6) 第6回委員会（11月9日）大学1件（こども教育学科1公表審査） 短大部2件（口腔保健学科2） (7) 第7回委員会（12月12日）大学1件（看護1） (8) 第8回委員会（1月12日）大学1件（看護1）、短大部1件（口腔保健1） (9) 第9回委員会（2月5日）大学1件（看護1） (10) 第10回委員会（3月8日）大学1件（看護1計画変更）短大部1件（口腔保健1） (11) 第11回委員会（3月22日）大学1件（医療検査1 計画変更）

2) 学生からの申請によるものは各学科の学研委員会が審査し、研究倫理委員会に報告された。

【その他の活動】

1. 研究情報の公開（オプトアウトについて、現在行われている他大学の状況について勉強会を行い、本大学でも次年度中に導入できるよう検討する。
2. 「研究公正・研究倫理教育等に関するアンケート調査（文部科学省依頼）」に本大学教職員が協力し回答した。

自己評価

【達成度の自己評価】:

1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

14. 個人情報保護委員会 年間活動報告書

委員長 藤本 由佳利

本年度の目標
個人情報を取り巻く新たな課題をふまえ、本学の実態に即した 個人情報セキュリティポリシーの策定を目指す
主な活動内容
【本年度の目標に基づく活動】 1. 個人情報保護委員会委員による学習会と教職員全体の研修の実施 教職員全体への研修にむけ、研修用DVDを購入し、委員会委員で勉強会を行った。併せて、教員全体への研修の在り方について検討を行った。ただ、コロナ禍により、教職員の集会を行うことは困難となり事態を見極めることとなった。 2. 研究活動における個人情報の取り扱いにかかる申請はなかった。 【その他の活動】 ○ 学内で新型コロナウイルスの陽性者、もしくは濃厚接触者等の扱いについて、個人情報の取扱いが問題であったが、学長を中心とした新型コロナウイルス対策本部会議と連携し、「関係者」という標記に留めること、学内としての疫学調査にあたっての本人同意を取るなど慎重な取り扱いをすべく協議がなされた。 ○ 中長期の課題 ネット上の情報の取り扱い等については、引き続き検討することとした。
自己評価
コロナ禍のなかで、個人情報を取り扱いにあたり、慎重な配慮を要する局面があったが、対策本部との協議で適切な取り扱いを確認することができた。 ただし、いずれも委員会開催をする余裕がなく、委員長及び事務局で対応し、報告に留めるなど、審議の時間を取ることは困難であった。同時に開催ができないことから本来計画していた委員会独自の活動ができず、次年度に委ねることとなった。 【達成度の自己評価】: 1. できた 2. ほぼできた ③. あまりできなかった 4. できなかった

15. ハラスメント防止対策委員会 年間活動報告書

委員長 山下 敦子

本年度の目標
1. 新入生のハラスメント防止意識の向上を図る。 2. ハラスメントにかかる相談事例があった場合は、教職員に周知し、ハラスメント防止意識の向上を図る。 3. ハラスメント防止対策ガイドラインを作成し、周知を図る。
主な活動内容
【本年度の目標に基づく活動】 1) 新入生に対し、4月の学科ごとの学内オリエンテーションにて、リーフレットおよび学生便覧を用いて、ハラスメント防止についての啓発を行なった。 2) 7月よりハラスメント防止対策委員会を月1回、計8回開催した。各委員よりハラスメントにかかる相談事例の報告を行なった。今年度の相談回数は0回であった。 3) 「ハラスメント防止対策委員会規程」「ハラスメント調査委員会規程」「ハラスメント調停委員会規程」「ハラスメント防止対策ガイドライン」および、「ハラスメントに関する相談の対応フロー」を改訂、作成した。
【その他の活動】 1) ハラスメント防止対策について理解を深めるため、教職員に過去の研修会DVDの閲覧を促し、防止意識の向上を図った。 2) 令和3年度早期に教職員向けに「ハラスメント防止」の啓発研修を実施するため、DVDや資料等を購入し、効果的な研修方法について議論を行なった。感染症予防のため、manabaを活用した遠隔研修と事後評価を行う研修計画を立案した。
自己評価
本年度はコロナウィルス感染予防対策のため、対面による教職員への研修会を実施できなかった。しかし、上記目標を達成するために、DVDの視聴による研修を各学科で行い啓発に努めることができた。 ハラスメントの防止やハラスメントが生じた際の対応については、従前からの計画や資料に基づき規程やフローチャートを整備、改訂することができた。これにより事案の発生から解決までの手続きが明確となり、学生や教職員からの相談のより一層の円滑化が可能となった。 今後は、今年度作成した規程やガイドライン、フローチャートについてWEBでの掲載や研修における周知を図り、相談や解決のための方策を充実していく。 【達成度の自己評価】： 1. ☒ できた 2. ☐ ほぼできた 3. ☐ あまりできなかった 4. ☐ できなかった

16. 神戸常盤大学健康保健センター 年間活動報告書

センター長 安藤 啓司

本年度の目標
1. 健康保健センターを通じて健康に関する重要情報を適宜発信する 2. 健康管理室と学生相談室の情報の共有化を図る
主な活動内容
【本年度の目標に基づく活動】 1. 健康管理室と学生相談室が中心となって、学生および教職員の健康保持・増進を支援することを目的に、定期健康診断の実施や健康診断書等の交付、健康相談、けがや病気の緊急対応（一次対応）を行った。 2. 健康管理室と学生相談室との情報の共有化を一層図るため、健康管理室の健康調査、健康診断票、抗体検査・予防接種票と、学生相談室の入学後の保健室・カウンセリング室利用状況等の情報を一括管理することとした。 3. 新入生への健康調査票を基に有病者や配慮を要する者をチェックし、入学必要に応じて面談して情報を収集し、共有した。 4. 新型コロナウイルスの対応について学生並びに教職員へ注意喚起を行った。 5. 発熱者への対応マニュアルや対応表作成に当たり新型コロナウイルス感染症対策本部に協力した。 6. 新入生の定期健康診断は予定通り4月に実施し、その際、学生が密にならないよう感染防止対策指導を行うなどの工夫をした。 7. 健康診断結果有所見学生に対して再検査受診勧告を行った。 8. 在学生の定期健康診断については、厚労省より新型コロナウイルス感染症に係る緊急事態宣言を踏まえた健康診断事業の実施延期を受け、9月に実施した。その際、学生に感染防止対策指導を行うなどの工夫をした。 9. 定期健康診断未受診者に継続的に受診勧告を行った。今年度の健康診断受診率は98.6%であった。 10. 後期より学生委員会と共同で学生の感染症対策履行状況を確認するため、学内見回りを開始した。 11. 体調不良のため保健室を受診した学生（2020年度2月末までの利用者数は延べ39名）の対応を行った。多くは対処療法と市販薬の処方などにより改善し、必要に応じて医療機関に搬送するなどした。 12. 学生相談室では、週2日（月・木）カウンセリングルームを開室し、臨床心理士による学生相談を行った。 13. 緊急事態宣言が発令され、学内立ち入り禁止となった期間は電話カウンセリングで相談に対応した（電話カウンセリング利用学生2名）。 14. 授業再開後も対面のカウンセリングに加えて電話カウンセリングでの対応も継続しておこなった。2020年度の利用は延べ91件、実人数17名であった。学生相談室委員の教員も学生相談サロンで学生相談に対応した。学生相談サロンの2020年度の利用は1

月末までで延べ 64 件、実人数 32 名であった。

15. 学生がカウンセリングルームを利用しやすいよう、大学ホームページに開室カレンダーを掲載した。また、後期よりカウンセリングルームだよりを作成し、心の健康に関する内容を発信した。
16. 入試委員会と連携してオープンキャンパスと令和 2 年度入試にかかわるすべての入試日に医師の救護担当者を配置した。
17. 新入学生の情報を健康調査票から学科ごとに健康上問題があると思われる必要最小限の情報を抽出して一覧を作成し、できるだけ早期に授業担当教員（特に健康スポーツ関連）に提供した。

自己評価

【次年度への課題】：

オープンキャンパスと入学試験のすべてに医師の救護担当者を配置することは医師の教員が少ない状況では非常に困難であった。来年度も医師の教員確保に努めるとともに、看護師資格を有する者も救護担当者とすることを入試委員会と協議する。

【達成度の自己評価】：

1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

17. 教職支援センター 年間活動報告書

センター長 光成 研一郎

本年度の目標
1. 一般・教職・専門教養の学力を強化する 2. 実技試験対策を可能な範囲（コロナの影響により）で、計画的に実施する 3. 学びの常盤風土を促進する（含：異学年・異学科交流） 4. 子育て支援施設 KIT における活動をカリキュラム内に位置づけ、小学校教諭としての自覚を喚起し、実践力の養成を図る
主な活動内容
【本年度の目標に基づく活動】 〔主要な活動の内容〕 1. ・「定例学習会」、「夏季弱点フォロー勉強会」（コロナ感染予防のため縮小実施→教職教養を削減）、「自主学習会」、「春季セミナー」、「春季集中学習会」等の採用試験対策を実施 ・「学力把握テスト（兵庫県・神戸市・大阪府の傾向を踏まえた出題）」を年3回実施 ・教員採用試験対策講座（EN1、E2 対象）遠隔学習コンテンツを作成し、manaba にて実施 ・東京アカデミーによる「教職教養対策講座」、「基礎力養成講座」、「論作文・面接・討論対策講座」を実施 ・2次試験対策（個人面接・集団面接）を中心とした自主学習会（E4 対象）を実施 ・11/5（木）「学内スタート模試」（3年対象）を実施 ・1/6（水）「全国公開模擬試験」（3年対象）を実施 ・例年年度内に実施していた「自治体別模擬試験」は、次年度 4/3（土）・4/4（日）に実施予定（東京アカデミーの実施期間が後ろ倒しになったという事由による変更） 2. ・専門教養実技試験直前対策講座（体育実技）を 6/19（金）、7/3（金）、2/25（木）、3/2（火）に実施。音楽は個別指導で実施 3. ・「東京アカデミー採用試験対策ガイダンス」、「神戸市教員採用試験説明会」、「養護教諭合格者座談会」、「岡山市教員採用試験説明会」、「集団討論見学会」など実施予定であったがコロナ感染症の影響により中止 ・4/3（金）「受験対策説明会②」（4年対象）を実施 ・8/8（土）「先輩激励訪問」を実施。神戸市（大谷、橋下）兵庫県（白山、片山）・岡山（片山）卒業生が教育現場の様子や、自らの教員採用試験への取り組み方について語ってくれた。 ・11/2（月）「受験対策説明会①」（3年対象）を実施 ・11/26（木）「岡山市公立学校教職員募集説明会」をオンラインで実施 ・11/20（金）「小学校教諭合格者座談会」を実施 ・2/9（火）「小学校教員採用試験対策説明会」（2年対象）を実施

4.
・本年度より KIT における活動をカリキュラム内に位置づけた。「基礎研究演習Ⅰ」（1 年必修科目）、「基礎研究演習Ⅱ」（2 年必修科目）、「保育教育課題研究Ⅱ」（3 年必修科目）において、KIT 内で実践学修を行い、小学校教諭としての自覚を喚起した。
自己評価
本年度は正規の小学校教諭として、兵庫県（2 名）、神戸市（1 名）、大阪府豊能地区（1 名）、大阪市（2 名）、岡山市（1 名）において、のべ 7 名（うち 4 名は既卒生）が採用され、3 年任期付き教諭として 2 名が神戸市、東京都に採用された。 今年度の課題としてあげた大学推薦枠を活用して、3 年任期付き採用を含む計 3 名が正規採用された（神戸市に 2 名、大阪府豊能地区 2 名、川崎市 1 名の計 5 名を大学推薦）。 正規の養護教諭として、既卒生の 3 名が採用された。兵庫県 2 名と福井県 1 名である。その中には臨時講師を 5 年間務めた後に、採用になった卒業生もいた。養護教諭の採用試験がいかに難関であるかということを再認識させられた。 昨年度の正規採用小学校教諭 14 名（うち 6 名既卒生）および養護教諭 2 名（うち既卒生 1 名）の実績と比較すると小学校の教員採用試験については、厳しい結果となった。要因のひとつにコロナ感染症の影響により、本学学生の強みである実技や面接が廃止されたり、場面指導等も規模が縮小されたりするなど、人間性や教員としての実践力を評価する比重が小さくなり、いわゆるペーパーテストによる学力重視の採用試験が増加したことが考えられる。1, 2 回生から採用試験情報を伝え、学力向上に努める。採用試験結果に結びついたとは言えないが、コロナ感染症の影響下で一部活動を中止せざるを得ない中、上記したように本年度の目標を達成するための活動は可能な限り実施できたといえる。 【達成度の自己評価】： 1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

18. 口腔保健研究センター 年間活動報告書

センター長 八木 孝和

本年度の目標
1. 地域住民並びに職員・学生の口腔健康を維持・増進するために地域社会活動を充実する。 2. 歯科診療所の機能充実の継続と受診者増加への取り組みを継続して行う。 3. リカレント教育における口腔保健研究センターの役割の明確化
主な活動内容
【本年度の目標に基づく活動】 1. 今年度は1. に掲げた目標達成のために地域交流活動の充実化とワンストップ体制の確立を目指しました。一方で、新型コロナウイルス(Covid-19)の影響を受け、多くの学内活動ならびに地域活動が中止もしくは規模縮小となりました。下記に示す活動を通じ行いました。
①：地域交流活動（本活動は地域交流センターから依頼のあった歯系活動も含みます） ・市民公開講座：少人数対面型（前期）（11名）とweb利用（後期）（14名）実施 ・はすいけ介護予防教室講演会：1回実施（参加者14名） ・三木特別学校講演：1回 ・KITでの歯科相談と指導：9回実施（57件） ・モトロクでの歯科相談と指導：7回実施61件 その他に予定されていたイベントへの参加はすべて中止となりました。
②：歯科健診 ・神戸常盤女子高：816名 ・神戸常盤大学附属ときわ幼稚園：36名 ・神戸常盤大学短期大学部：74名 神戸常盤大学では、全体のスケジュールなどの影響で実施されませんでした。
③：歯科診療所での教職員・学生・地域住民の定期的な口腔管理の実施（6月から） ・一般248名、学生117名、教職員26名、合計391名（新患33名含む） ・歯科診療所活用のための需要アンケートを学生に実施（期間：9月10日から10月12日）：有効回答数653件（診療内容希望：1位 ホワイトニング（42%）、2位 う蝕治療（30%）、3位 歯科矯正（15%））。この結果を踏まえて、本年度はホワイトニングに関する施術のための準備を行い、モニター募集を開始した。
2. の目標に対して今年度実施できた活動は以下の通り。 ・診療所用新規パンフレット作成 ・受診者に対するスタンプカードと来院回数に応じて特典を実施 ・歯科診療所の周知としてアンケート実施：有効回答数653件、診療所が利用できることを知らない割合が25%、学生の実習対象とされると感じている割合が7%いることが判明 ・学生実習の二次利用として診療所での継続的な利用促進の呼びかけを行った。
3. 生涯教育に対するセンターの取り組みとして、リカレント教育の実践の場として、歯科診療所の活用に向けた検討を開始し、次年度以降、口腔保健学科の4年制化に合わせて診療室を拡充する方針で進めている。併せて、次年度リカレント生の募集等リカレント担当者と検討し、次年度性にはweb講義科目を選定した。
自己評価
【達成度の自己評価】： 1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

19. 子育て総合支援施設K I T 年間活動報告書

センター長 大森 雅人

本年度の目標
1. 開設3年目を迎え、事業の開催回数に関しては一定の水準に達しているので、本年度はより地域のニーズに沿った開催を目指すなど、質の面でのさらなる向上を目指す。 2. 専任職員やスタッフの体制が充実できて安定した運営が可能となったので、そうした人的資源を活かしたより活発な運営を目指す。 3. 利用者数に関しては、一定の水準に達しているので、本年度は満足度のさらなる向上等を目指す。 4. 私立大学研究ブランディング事業による支援が終了となったので、運営コストも含め、本施設が安定的に運営できる体制の構築を目指す。同時に、施設の存在意義を高める取り組みを実施して、経費をかけることの意味を高める。
中長期にわたって取り組む課題
1. 地域の子どもたちの学びの拠点や子育て支援、地域支援の拠点として位置付ける。 2. 真に生きた知識・スキルの修得を目指す本学の学生の学びのフィールドとして位置付ける。 3. 本施設で実施する学童や未就園児・保護者に対する教育や子育て支援に関する事業、地域支援に関する事業を、本学教員の研究対象やリカレント講座の場として位置付ける。
主な活動内容
【本年度の目標に基づく活動】 1. 新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、事業実施にあたっては、慎重な運営が求められている。そのため本年度は、特に安全面への配慮を念頭に置きつつ、そうした制約がある中で、地域のニーズに応じた内容で事業を実施する。 2. 人的資源に関して、専任職員・施設スタッフとともに、大学の人的資源の活用も模索して、それぞれの特性を活かした運営を行う。 3. 新型コロナウイルス感染症が流行しており、事業の開催には一定の制限があるので、昨年度の利用者数を目処とした目標は設定しない。その中で、利用者の満足度を向上させるために、より精選された内容での事業実施を目指す。 4. 各種の補助金・助成金等の活用も模索して、可能な限り運営に必要となる経費を外部から獲得することを目指す。また、大学本体との連携を深めて、教育・研究拠点としての存在価値を高める。そうした取り組みを通じて、受験生に施設の存在意義を訴求して、受験者数の増加に繋がるようにする。 5. 本年度は、新型コロナウイルス感染症の流行に対応した施設運営方法を模索し、何より安全面に配慮した運営を行うことが活動の中心となる。そのため中長期の課題に関しては、可能な範囲での取り組みを目指す。
自己評価
1. 今年度は年度当初より緊急事態宣言が出され、兵庫県もその対象となった。そのため、4

月から全館休館を余儀なくされた。緊急事態宣言が解除された後は、「ときわん」は時間帯を分け、参加組数を制限した上での予約制で6月1日より活動を再開した。「てらこや」も6月15日より、時間を短縮して活動を再開した。活動再開に当たっては、徹底した感染防止対策を実施した。休館期間中も、SNS等を活用して、お誕生会や遊びの動画を作成して6回の配信を行い、遠隔環境での子育て支援活動を継続していた。再開後は、毎月コンスタントにイベントや子育て相談、歯の相談等も実施した。その回数は、「ときわんクニヅカ」だけで54回に及ぶ。イベントがない日も、手遊び、音楽の時間、ふれあい遊びのいずれかを実施していた。以上より、安全面への配慮を念頭に置きつつ、十分に地域のニーズに応じた内容で事業実施が出来たと評価できる。

2. 大学の人的資源活用に関しては、歯の相談は口腔保健学科の教員が協力して実施された。また、こども教育学科の学生が断続的に活動に参加し、時には壁面作成を行うなどの活動を行った。また「てらこや」の活動にも、こども教育学科の教員が参画した。以上より、目標を達成できたと評価できる。

3. 利用人数に関しては、2ヶ月に及ぶ全面休館があり、さらに再開後の感染防止に配慮しての活動となった。しかしながら結果として「ときわんクニヅカ」「てらこや」や昨年実績を上回る利用者数となった。「ときわんトモロク」に関しては、感染症流行以前から施設面積に対して限界に近い利用者数となっていたため、休館及び感染症対策により利用者数は減少したが、これは施設の特性によるものである。また、活動に関しても、1.に述べたとおりの実績を残している。以上より、コロナ禍においても、すべての施設が想定以上の成果を達成したと評価できる。

4. 受けた補助金額が、2019年の約990万円から2020年度で1661万円と大幅に増額となった。これによって、KITの運営に関しての収支は極めて順調となった。受験生への訴求性も高く、入試時の面接では、KITの存在を本学選択理由に挙げる受験生が多い。受験生の総数の実績としても、昨年度を上回る結果となった。以上のことより、十分に成果が得られたと評価できる。

5. 本年度は、新型コロナウイルス感染症の流行に対応した施設運営方法を模索し、何より安全面に配慮した運営を行うことが活動の中心となったため、中長期の目標に関して十分な検討を行うことは出来なかった。しかしながら、中長期課題の1. 地域の子どもたちの学びの拠点や子育て支援、地域支援の拠点となることに関しては、コロナ禍においても上記1.～4.の成果が得られた。また、中長期課題2. の学生の学びのフィールドとしての位置づけに関しても、感染防止に配慮しながら、正課科目での経験実習や準正課の活動の場所としての活用が定着している。以上より、中長期課題に関しても、着実に取組が進んでいると評価できる。

【達成度の自己評価】:

①. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

20. ライフサイエンス研究センター 年間活動報告書

センター長 坂本 秀生

本年度の目標
1. 利用者同士の情報交換の活性
主な活動内容
【本年度の目標に基づく活動】 コロナ禍で対面での情報交換ではなく、メール等のデジタルツールを用い情報交換を行い、以下のように研究を実施した。 坂本秀生：「POCT の効果的利用法」をテーマに和文 4 編、国内口頭発表を 3 回行う。井本しおん：「ヘム誘導体による細胞死誘導における鉄イオンの役割」を継続。また、科研費研究「マクロファージを標的とした輸血後鉄過剰症治療薬の探索」を澤村と共同研究で継続し、和文論文 1 編、英文共著 1 編を発表した。鈴木高史：「ナトリウムチャンネル遺伝子導入システムの構築」「TbUNC119BP 分子に着目したアフリカトリパノソーマ原虫の増殖制御システムの構築」「光線過敏症の検査プロトコルの開発」を行った。研究代表者として科研費基盤 C、神戸大学と共同研究費を得た。国内学会 1 回、研究会 1 回、英文論文共著を 2 編を発表した。杉倉匡文：「脱ネコ免疫不全ウイルス感染細胞を標的とした抗体依存性細胞傷害作用」の基礎検討を行った。高松邦彦：「遺伝子解析」「オントロジーと深層学習の融合による生命情報推論システム」「遺伝子解析手法を応用した新分野 Eduinformatics」「遺伝子解析を保育学へ応用」「遺伝子解析手法を応用した IR」を行った。科研費基盤 C：分担者 2 課題を得た。英文筆頭 4 編、共著 3 編、国際学会発表筆頭 3 回、共著 3 回、和文論文筆頭 1 編、共著 6 編、国内学会筆頭 3 回、共著 2 回、招待講演を 2 回行った。また、IEEE/IIAI AIT 2020 で Outstanding Paper Award を受賞した。澤村暢：「フィブリノゲン合成・分泌に関する研究」、「DSCR9 の発現・機能解析に関する研究」を継続。国内学会共同 2 回の発表を行った。溝越祐志：「プレセプシンの産生機序の解明」「新規遺伝子導入細胞セレクションシステムの開発」「DSCR9 遺伝子の機能解明」を行い、和文論文共著 2 編発表した。三浦真希子：「保育施設におけるオムツ処理規定モデルの構築」「アジスロマイシン耐性淋菌の薬剤耐性機序の解析」を行い、研究代表者として科研費若手研究を得た。国内学会発表を 2 回行った。西村直行、佐守秀友：SARS-CoV-2 遺伝子検出キットを開発し、極東製薬工業の製品として発売し、同キットの改良し 10 月に保険収載され、対外診断薬申請の手続きを行っている。川野亜希：「歯周病原細菌が誘導する免疫応答における脂肪酸の影響」につき英語論文筆頭 1 編、九州歯科大学と共に「口腔細菌が形成する Perisster のメカニズム解明とその除去法の開発」を行い、英語論文筆頭 1 編と共著 1 編を発表。高岡 裕、大田美香：神戸大学医学部と大学間共同研究を進め、科研費基盤 C：代表者 2 課題・分担 3 課題、日本医療研究開発機構 (AMED)：研究分担 2 課題を得た。色素性乾皮症治療薬研究成果を報告し、Nature Com. など欧文原著論文 3 編、欧文総説 1 編、国際会議 1 演題を発表。
自己評価
【達成度の自己評価】：

1. できた	○	2. ほぼできた	3. あまりできなかった	4. できなかった
--------	---	----------	--------------	-----------

21. 事務局 年間活動報告書

事務局長 中野 潤一

本年度の目標
1. 新型コロナウイルス感染症対策に対応した適切な学校運営を図る。 2. 診療放射線学科開設にかかる円滑な業務運営を図る。 3. 短期大学認証評価および大学認証評価受審の適切な対応
主な活動内容
【本年度の目標に基づく活動】 1. 新型コロナウイルス感染症対策に対応した適切な学校運営を図る。 ○ 学長室を中心に組成された「新型コロナウイルス対策本部会議」における大学運営にかかる審議・検討事項について、法人本部と連携し事務的支援・調整に取り組んだ。また本部会議の決定に基づき、大学の消毒・清拭、学生指導等、感染対策に取り組んだ。 ○ 緊急事態宣言による大学閉鎖期間に設置された本部事務所の運営を、全教職員の協力のもと、法人本部と連携し行った。 ○ 本学で発生した陽性者、濃厚接触者(もしくはおそれのある者)の情報管理のため、学科と協力し実態把握を行い、学科による学生指導を支援した。 ○ コロナ禍での入学者確保のため、感染対策を徹底した予約制のオープンキャンパス(8回)により受験生の志願意欲をとらえ、新たな診療放射線学科も含め、入学者を確保した。 2. 診療放射線学科開設にかかる円滑な業務運営を図る。 7月の新学舎完成に向け、建設・整備を精力的に取り組み、またそれまでの間、他学科との調整のなかで、教室配分、授業展開などを行った。 3. 短期大学認証評価および大学認証評価受審の適切な対応。 ○ 短期大学部の認証評価にかかる事務を行い、令和2年10月16日(金)、オンラインによる評価を受け、適格との評価を受けた。 ○ 併行して、令和3年秋の大学認証評価にかかる事務を担った。 【次年度の課題】 ○ 大学認証評価年度として、これにかかる事務的な業務を引き続き行う。 ○ コロナ禍における大学運営の円滑な実施を行う。PCR検査センターの運用や、今後進められるワクチン接種への対応等について、法人本部との連携のもと取り組む。 ○ 令和4(2022)年4月の口腔保健学科の4年制大学化にかかる事務を行う。 ○ 本年度(令和3年度)の募集を最後とする通信制課程の収束に向け、法人本部と連携し取り組む。
自己評価
【達成度の自己評価】: 1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

第2部 「学生による授業評価」報告

I. 概要

本学では、自己点検・評価委員会が中心となり、非常勤を含めた全教員に対して学期毎に学生による授業評価を実施し、評価結果を教員が今後の授業改善に活用している。

さらに、教員個人の取り組みに留まらず学科及び大学・短期大学部全体のFD活動に資するべく、自己点検・評価委員会で「学生による授業評価」結果を学科および基盤教育に分けて解析したものを学科等にフィードバックし、学科等毎に授業改善策や考察を加えて授業評価報告書を作成している。授業評価の調査結果を学科内FD活動に活用するとともに、授業評価報告書を年次報告書に掲載し、授業改善に向けた情報を大学全体で共有している。

1. 調査から結果の活用まで

令和2年度の、学生による授業評価実施からその結果の活用までの流れを以下に示す。

- 1) 対象科目：原則として、全教員（非常勤教員を含む）の全ての授業科目を対象とした。卒業研究、臨地実習などの科目は除外した。
- 2) 調査時期・方法：各科目の最終授業時に科目担当教員がアンケートを実施した。科目ごとに作成された授業評価アンケートのURLまたはQRコードを、対面授業ではこれらを掲示、遠隔授業ではmanabaやポータルメールで提示し、学生がWeb上で回答した。
- 3) 評価結果の返却：科目ごとに集計された評価結果を、前期開講科目は9月、後期開講科目は2月に各教員に返却した。
- 4) 教員による「授業評価報告書」作成：各教員は、評価結果を検討し今後の授業改善対策等を「授業評価報告書」として学科長等に報告した。報告書への記載内容は、授業評価のカテゴリー別結果、科目の成績分布、本年度の授業で工夫した点と評価結果の解析、次年度の課題と対策である。報告書の提出は、Web上の入力フォームを用いて行った。
- 5) 教員による「学生へのメッセージ」作成：各教員は、カテゴリー別評価結果と教員の授業に対する考えや思いをまとめた「学生へのメッセージ」を作成した。メッセージの提出も、Web上の入力フォームを用いて行った。「学生へのメッセージ」は、①大学の学生・教職員ポータルサイトに掲載されたものを、パソコンやスマートフォン等から閲覧する。②学内3か所に設置された冊子を閲覧する。という2通りの方法で公開した。
- 6) 授業改善策の解析：授業評価を組織的な授業改善に繋げるために、個々の教員が挙げた授業改善策の解析を行った。令和2年度前期の授業評価について、学科長に提出された授業評価報告書に記載された授業改善策を、自己点検・評価委員会で計量テキスト分析・テキストマイニングを行い、学科等毎の改善策の傾向を捉えた。テキストマイニングの概要については後述する。
- 7) 授業評価報告書作成：各学科等の自己点検・評価委員は「学生による授業評価」の学科別年間平均値データ及び授業改善に向けた取り組みを解析し、学科会議等で報告した。学科等の授業評価報告書は学科教員の意見を反映して作成し、年次報告書に掲載し、

大学ホームページで公開した。

テキストマイニングによる授業評価改善策の解析

テキストマイニングは、質的な研究を行う際に用いられる文章解析手法のひとつである。授業の改善をどのようにしたいのか、またどのように実施したのかを明らかにするため、計量テキスト分析・テキストマイニングを実施した。なお、計量テキスト分析・テキストマイニングを、「計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析（content analysis）を行う手法」とした。今回は、「自動抽出した語を用いて、恣意的になりうる操作を極力避けつつ、データの様子を探る段階」としての、頻出語の抽出、共起ネットワークの作成にとどめ、「分析者が主体的かつ明示的にデータからコンセプトを取り出し、分析を深める段階」に踏み込んで、分析者がデータに対してなんらかの「評価」を行うことはしなかった。

解析結果としての共起ネットワークでは、出現数の多い語ほど大きいノード（頂点）で描画されること、共起関係が強いほど太いエッジ（線）で描画されること、ブルーから濃いピンクになるほど媒介中心性の高いノードであることを表す。媒介中心性は、ノード i の媒介中心性 = ノード i を通る経路数の総和 / ノード i を除く点の組合せ数で定義される。

2. アンケート設問項目および回答様式

アンケートの設問項目・回答様式、対象学科を下表に示す。

	設問項目	回答様式	対象学科
1)	学科共通（CCNを除く）の設問項目	5段階評価	M,R,N,E,O
2)	学科毎の設問項目	5段階評価	M,R,N,E,O
3)	看護学科通信制課程独自の設問項目	5段階評価	CCN
4)	記述式で回答する設問	記述式	M,R,N,E,O,CCN

M：医療検査学科、R：診療放射線学科、N：看護学科、

E：こども教育学科

O：口腔保健学科、CCN：看護学科通信制課程

1) 学科共通（看護学科通信制課程を除く）の設問項目

カテゴリー	問	設 問
I 学生自身	3	この授業への出席状況は？
	4	この授業に関連して、授業以外に学習した時間。（授業1回あたりの平均時間）
	5	この授業に意欲的に参加した。
II 授業内容	6	授業の到達目標がシラバスや授業でわかりやすく示された。
	7	毎回の授業内容はよくまとまっていて、よく理解できた。
	8	授業は知的関心や好奇心を起こす内容であった。
III 授業方法	9	聞きやすい話し方だった。
	10	板書、スライド、教材などの使い方は、わかりやすく適切だった。
	11	授業の進行速度は適切だった。
	12	学生の質問や意見への対応が十分になされていた。
IV 学習成果	13	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。
	14	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。
	15	自分で調べ、考える姿勢が身についた。
V 総合評価	16	この授業を受けて満足している。

2) 学科毎の設問項目

医療検査学科：

M	17	【実習科目】レポートや課題などのチェックは適切だった。
	18	【実習科目】器具・備品・試薬などの準備は適切だった。
	19	【実習科目】スタッフの補助・対応は適切だった。

診療放射線学科：

R	17	【実習科目】レポートや課題などのチェックは適切だった。
	18	【実習科目】装置・器具・備品などの準備は適切だった。
	19	【実習科目】教員の補助・対応は適切だった。

看護学科：

N	17	【演習科目】到達度の確認は適切であった。
	18	【演習科目】(複数教員授業の場合)教員間の連携、対応は適切であった。
	19	抽象的な内容については、適度に事例を示して具体的な説明があった。
	20	授業内容は、教員独自の意見や考えを適度に示し、心に響くものであった。

こども教育学科：

E	17	教員の学生への対応は公平であった。
---	----	-------------------

口腔保健学科：

O	17	【実習科目】実習器材や材料の準備は適切に行われた。
	18	【実習科目】教員の人数や配置は適切であった。

3) 看護学科通信制課程の設問項目

カテゴリー	問	設 問
I 学生自身	3	あなたはシラバスを読んで授業内容を確認して臨みましたか。
	4	3日間の授業に意欲的に取り組みましたか。
	5	この授業を受けて今後の学習に意欲的に取り組みますか。
II 授業内容	6	授業内容は無駄や重複がなく順序立てて整理されていた。
	7	専門的内容に対し、わかりやすい説明があった。
	8	抽象的な内容については適度に例を示して具体的な説明があった。
	9	授業内容は表面的ではなく教員自身の意見や考えを適度に示し、心に響くものであった。
III 授業方法	10	聞きやすい話し方だった。
	11	授業の進行速度は適切だった。
	12	授業の要点・テーマ・目的がわかりやすい展開であった。
	13	板書・スライド・教材などの使い方は適切だった。
	14	ノートをとるための時間はちょうど良かった。
	15	学生への質問の量、タイミングや方法は適切であった。
IV 学習成果	16	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。
	17	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。
	18	自分で調べ、考える姿勢の大切さに気づいた。
V 総合評価	19	この授業を受けて満足している。

4) 記述式で回答する設問（全学科共通）

- ① この授業でよいと思った点があれば書いてください。
- ② この授業で改善すべき点があった点があれば書いてください。
- ③ 教室、教育設備等で改善すべき点があれば書いてください。

3. 「学生による授業評価」結果の通知様式

教員に返却される授業評価結果の様式を示す。各設問に対する選択肢別の回答数と評価平均、右下にはカテゴリ別評価平均が示される。一番右の列は学科全体の評価点である。

年度前後期 学生による授業評価調査													
科目コード			科目名				担当教員名				受講者数	回答者数	
M													
1	所属学科	M科	N科	E科	O科	2	学年	1年生	2年生	3年生	4年生		
		7645	0	0	0			1858	2718	2329	722		
問	設問文						5	4	3	2	1	当科目平均	学科平均
I 学生自身	3	この授業への出席状況は？						5 すべて出席	4 1回欠席	3 2回欠席	2 3回欠席	1 4回以上欠席	4.66
	4	この授業に関連して、授業以外に学習した時間。(授業1回あたりの平均時間)						2時間以上	1～2時間	30分～1時間	30分未満	0時間	2.71
	5	この授業に意欲的に参加した。											3.97
II 授業内容	6	授業の到達目標がシラバスや授業でわかりやすく示された。											3.94
	7	毎回の授業内容はよくまとまっていて、よく理解できた。											3.91
	8	授業は知的関心や好奇心を起こす内容であった。											3.93
III 授業方法	9	聞きやすい話し方だった。											3.96
	10	板書、スライド、教材などの使い方は、わかりやすく適切だった。											3.91
	11	授業の進行速度は適切だった。											3.92
	12	学生の質問や意見への対応が十分になされていた。											3.97
IV 学習成果	13	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。											3.97
	14	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。											3.99
	15	自分で調べ、考える姿勢が身についた。											3.91
V 総合評価	16	この授業を受けて満足している。											4.00
学科別質問項目 M科	17	〔実習科目〕 レポートや課題などのチェックや指導は適切だった。											4.12
	18	〔実習科目〕 器具・備品・試薬などの準備は適切だった。											4.19
	19	〔実習科目〕 スタッフの補助・対応は適切だった。											4.16
	20	教員毎に独自設定											4.03

分野	当科目平均	学科平均
I 学生自身		3.8
II 授業内容		3.9
III 授業方法		3.9
IV 学習成果		4.0
V 総合評価		4.0

神戸常盤大学・神戸常盤大学短期大学部

4. 実施率・回答率等

令和2年度の学生による授業評価の科目実施率（実施科目数/対象科目数）および学生回答率等（回答者数/履修登録者数）を表に示す。なお、アンケート対象科目からは、卒業研究、臨地実習などの科目は除外している。また、同一科目名でも、開講時間や担当教員が異なるため別に授業評価を行った場合は、各々を独立した科目として計数している。

	総計	大 学					短期大学部	
		保健科学部			教育学部		口腔保健学科	看護学科通信制課程
		医療検査学科	診療放射線学科	看護学科	こども教育学部	基盤分野		
アンケート対象科目数 (①)	582	115	20	93	127	104	85	38
アンケート実施科目数 (②)	521	110	18	81	112	97	73	30
科目実施率 ②÷① ×100(%)	89.5	95.7	90.0	87.1	88.2	93.3	85.9	78.9
②の履修登録者数 (③)	33220	8476	1633	5259	5385	6410	5120	937
③の回答者数 (④)	19949	5196	956	2566	2973	4097	3486	675
学生回答率 ③÷④ ×100(%)	60.1	61.3	58.5	48.8	55.2	63.9	68.1	72.0

令和2年度授業評価アンケートの科目実施率は89.5%、学生回答率は60.1%と、令和元年度の科目実施率97.6%、学生回答率89.3%から大きく低下した。昨年度は対面授業の最後にマークシートを配布してその場で学生に回答してもらったが、今年度はコロナ禍による遠隔授業の実施で、本学の学修支援システムであるmanabaやポータルメールを通じたアンケート依頼が多くなったため、学生回答率が大きく低下したと思われる。また、特に前期には授業日程やアンケート実施方法の変更により、授業評価が実施できなかった科目もあったと考えられる。令和3年度も遠隔授業の実施は続くため、学生回答率を上げる何らかの工夫が必要となってくる。

Ⅱ．保健科学部 医療検査学科

1. 授業評価実施数

- ①授業評価アンケート回答数（延べ人数）：5,138 名（受講者数名 8,003、回答率 64.2%）
 ②学科長に報告書が提出された科目数：103 科目

2. 学生による授業評価の集計結果

1) 設問別回答分布(図1)

令和2年度前期医療検査学科の学生による授業評価調査の設問別回答分布を図1に示す。

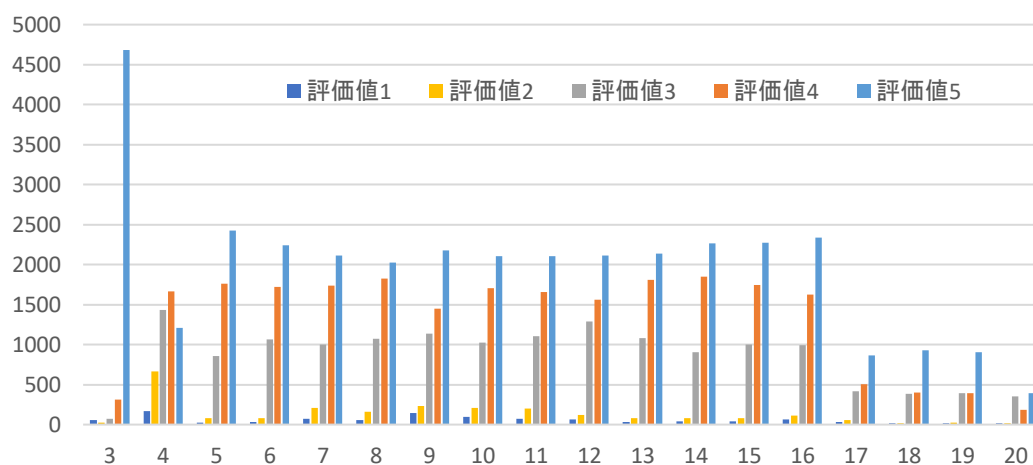


図1 設問別回答分布

2) 各設問の平均値(表1)

各設問の平均値を表1に示す。問5～19のうちで平均値が特に高い設問は、問17（実習レポート等のチェック・指導）、問18（実習準備）、問19（実習スタッフ）と、実習科目に対するものであった。実習科目に関する設問以外でも、すべての項目において4.00以上の高評価であった。

問3（出席率）及び問4（学習時間）は学生自身を評価したものである。出席率は4.86と非常に高いが、授業以外の学習時間に関しては大学全体が3.38であるのに対し、医療検査学科は3.60と多くはなっているが、時間にすると1時間程度にとどまる。

表1 設問別平均値

問番号	3	4	5	6	7	8	9	10	
平均値	4.86	3.60	4.26	4.18	4.09	4.09	4.03	4.07	
設問番号	11	12	13	14	15	16	17	18	19
平均値	4.08	4.08	4.15	4.21	4.19	4.18	4.13	4.26	4.24

3) カテゴリー別平均値(表 2)

今年度と令和元年度、平成 30 年度のカテゴリー別平均値を表 2 に示す。各平均値は昨年度に比べカテゴリー I では 0.3 ポイント上昇、他の科目も 0.1 ポイント上昇している。

表 2 カテゴリー別平均値

	I 学生自身	II 授業内容	III 授業方法	IV 学習成果	V 全体評価
平成 30 年度	3.8	3.9	3.9	4.0	4.0
令和元年度	3.9	4.0	4.0	4.1	4.1
令和 2 年度	4.2	4.1	4.1	4.2	4.2

3. 集計結果の解析と問題の所在

1) 設問・カテゴリー別評価

設問別にみて高い評価を得たのは、設問 5 (意欲的に参加した：4.26) と実習科目に関する設問 18、19 で評価平均は 4.26、4.24 であった。次いで高い評価を得たのは、設問 14 (基本的な知識を得た：評価平均 4.21)、設問 15 (考える姿勢が見についた：評価平均 4.19)、設問 6 (シラバス明示：評価平均 4.18)、設問 16 (満足度：評価平均 4.18) であった。

カテゴリー別評価の年次推移(図 2)をみると、すべてにおいて昨年度を超える高い評価であり、コロナ禍での遠隔授業、学修がマッチした学生が多かったと考えられる。また、教員側も初めての遠隔授業にも関わらず、試行錯誤し取り組んだ結果であると思われる。

約 2 か月間の自粛期間中の遠隔授業と、自粛明けのハイブリッド授業において、学生達は自分なりの学習方法と時間の使い方で、通常授業より意欲的に参加し、多くの知識と自ら考える力を養っていたことが分かる。対面授業は遠隔授業に比べ、必ずしも学修効果が高いと言い切れない結果となった。また、今年度の授業評価は遠隔授業も入っているため、回収率が 64.2%と低くなっており、少なからず結果に影響していると考えられる。今後も続く遠隔授業での回収率を上げる方策も考えていく必要がある。

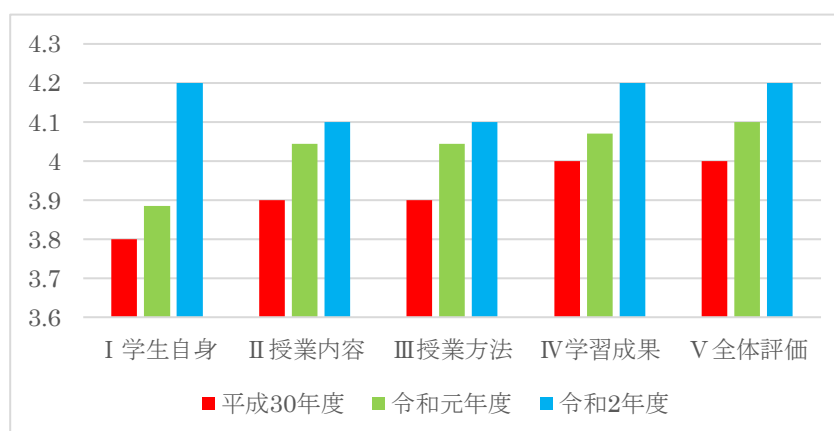


図 2 カテゴリー別評価平均の年次推移

4. 授業の改善策の検討

今年度は緊急事態宣言により遠隔授業が取り入れられたため、遠隔授業に関するものが多く挙げられている。学科長宛に提出された授業評価報告書に、多くの授業改善策が提案された。提出された報告書の中から、効果があったと記載されていた改善策や授業における問題点とされるものを以下に示す。

<遠隔授業>

- ・ 対面で行っていた 90 分の授業内容を分化し、一回の講義時間を 30 分程度になるよう短縮し、講義用の動画ファイルを作成し、YouTube で配信した。
- ・ 対面授業でなければ提示できない動画や症例画像を集中して授業後半に行った。
- ・ 学生が理解し易いように、資料に図を活用したり、重要なポイントを明示した。
- ・ 音声で文字にしてスライドに提示し、音声の聞き取りが悪い場合や電車の中でも見られるように工夫した。
- ・ manaba のプロジェクトを使い、その中で学生が課題に対して相互にコメントすることで、遠隔グループワークを行った。

<対面授業>

- ・ 後期に実施している関連科目との連携を意識した授業を行い、知識の習得等への相乗効果を計った。
- ・ manaba を用いた小テストを毎回行い、理解度をチェックした。
- ・ 対面実習では三密を避けるため A・B それぞれを二分割し、同じ実習を 4 回行い対応した。
- ・ 検査結果説明で、臨床検査技師役・患者役・評価者を各グループから選出してもらい、皆の前でロールプレイを行った。
- ・ 質問を受ける時間を多くとる。質問しやすい環境を作る。

<評価・課題・レポート等>

- ・ 期間限定の無料映像コンテンツ Web 視聴サービス(EVO)を利用した課題を課した。
- ・ 振り返り用資料を作成し、自主学習の教材として配布。

<その他、問題点>

- ・ 遠隔授業での音声録音ではより静かな環境、PC やマイクを整備し聞き取りやすくする。
- ・ 講義で使用するスライドの内容を簡潔にし、大きな文字で記載する。
- ・ 学生に質問を投げかけ、理解度を確認する。
- ・ 説明の要点を整理し、ゆっくりと授業を進めて行く

医療検査学科の「本年度の授業で工夫した点と評価結果の解析」と「次年度の課題と対策」についてテキストマイニング解析したところ、頻出語としては頻度が高い順に「授業」「遠隔」「学生」「行う」「対面」などが抽出された。また前期のみの共起ネットワ

ーク（図3）を見ると、大きなクラスターが3つ独立しており、いずれも授業の進め方やスライドの作り方、音声に関するものであった。

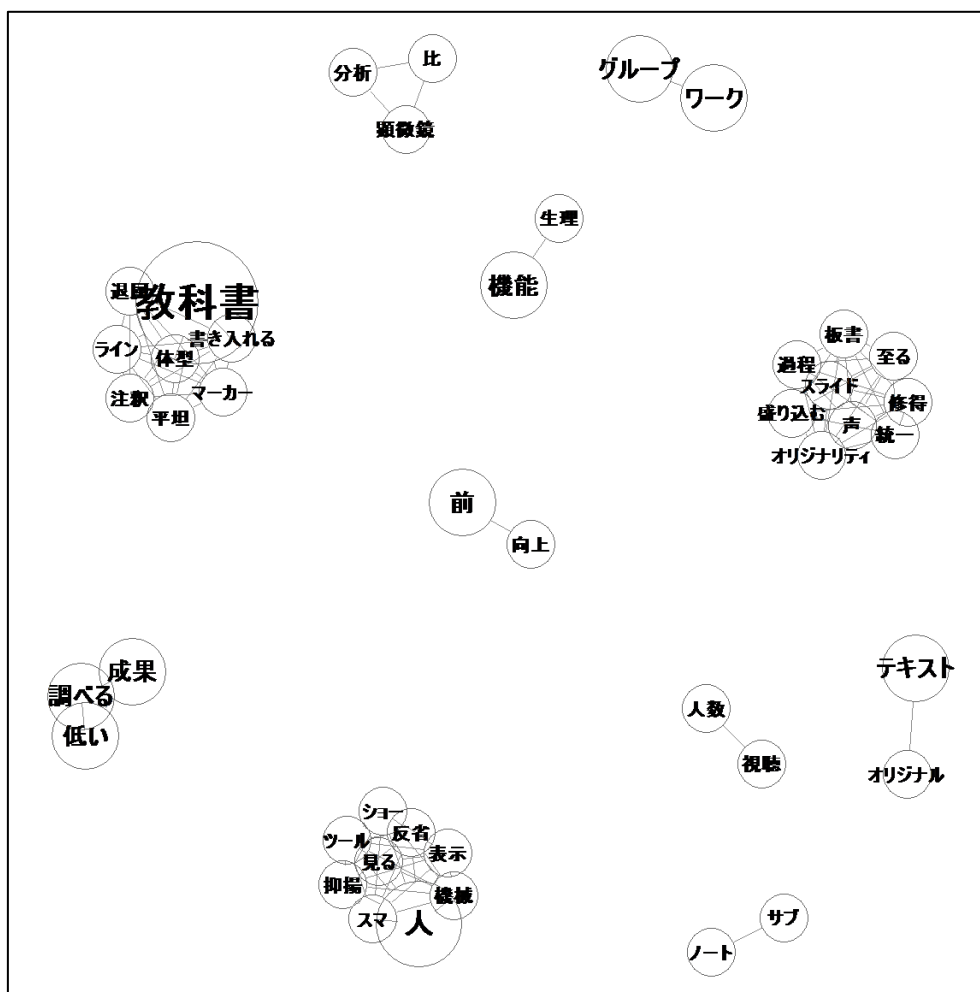


図3 共起ネットワーク

今年度は新型コロナウイルスの影響で、様々な面で制約を強いられることが多かった。そんな中、大学の講義は遠隔授業が主体となっていき学生だけではなく、教員も新しいことにチャレンジしなければならない1年となった。授業評価全体を見てみると昨年度よりも高評価となっており、今の学生にとってはインターネットを介した授業にも難なく対応していることが窺える。その一方で遠隔授業にする事で、どうしても時間数が短くなってしまったり、学生の表情が見えないため理解しているかが分からなかったりと心配な面も多い。教員からの工夫点にもある様に、普段の対面授業以上に学生からの質問を受ける時間や環境を整える必要がある。また、7月の学科会議でPCに強い教員による簡単な遠隔授業教材作成の説明会を行った。

今後しばらくは遠隔と対面のハイブリッド授業が続くと考えられる中、各教員が経験した事を共有やするなど、遠隔授業レベルを一定水準以上に上げていく必要がある。

Ⅲ. 保健科学部 診療放射線学科

1. 授業評価実施数

授業評価アンケート回答数（学生の延べ人数）：923 名

2. 学生による授業評価の集計結果

1) 設問別回答分布（図 1）

令和 2 年度前後期診療放射線学科の学生による授業評価調査の設問別回答分布を図 1 に示す。

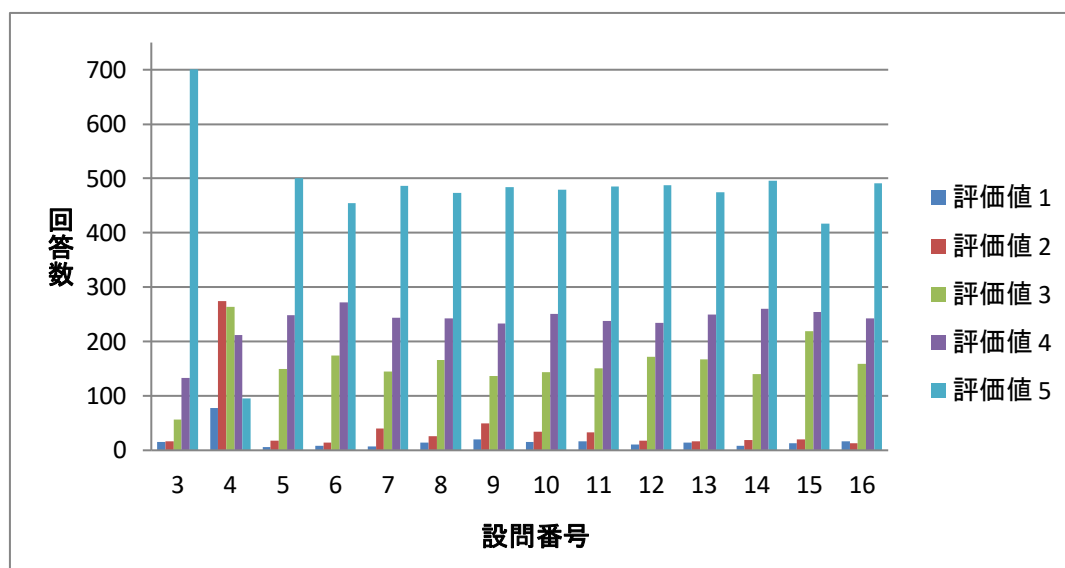


図 1 設問別回答分布

2) 各設問の平均値（表 1）

各平均値は 2.97～4.61 の間に分布していた。最も平均値が高かったのは設問 3 の「この授業への出席状況は」（4.61）であった。また、最も平均値が低かったのは設問 4 の「この授業に関連して、授業以外に学習した時間。（授業 1 回あたりの平均時間）」（2.97）であり、中央値である 3 とほぼ同じだった。

表 1 設問別平均値

設問番号	3	4	5	6	7	8	9	10
平均値	4.61	2.97	4.32	4.25	4.26	4.23	4.20	4.24
設問番号	11	12	13	14	15	16		
平均値	4.24	4.27	4.25	4.32	4.13	4.28		

3) カテゴリー別平均値（表 2）

各平均値は 4.0～4.3 の間に分布していた。高いものから V 総合評価＞Ⅲ授業方法＝Ⅳ学

習成果＝Ⅱ授業内容＞Ⅰ学生自身の順であった。

表2 カテゴリー別平均値

Ⅰ 学生自身	Ⅱ 授業内容	Ⅲ 授業方法	Ⅳ 学習成果	Ⅴ 総合評価
4.0	4.2	4.2	4.2	4.3

3. 集計結果の分析と問題の所在

1) 設問・カテゴリー別評価

設問別評価では、設問3～16の各設問における平均値上位3項目は、設問3「この授業への出席状況は」（4.61）が最も高く、設問17「レポートや課題などのチェックは適切だった」（4.33）であり、続いて設問5の「この授業に意欲的に参加した」（4.32）と設問14「授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた」（4.32）であり、いずれも4.3以上であった。

また、最も平均値が低かったのは、設問4の「この授業に関連して、授業以外に学習した時間。（授業1回あたりの平均時間）」（2.97）であり、例年指摘されている正課外の学習時間の短さみられるが改善方向ではある。その他の項目はすべて4.13以上4.61以下の範囲に分布であり、ほぼ肯定的な回答であった。また、設問4を除いたすべてにおいて、最頻回答は5（そう思う）であり、いずれの項目も高い評価であった。

次に、カテゴリー別評価では、全てのカテゴリーにおいて、全学科平均値よりも0.1ポイント低い結果であった。

2) 診療放射線学科は、本年度が、設置年度のため、昨年度調査との比較はできなかった。

4. 授業の改善策の検討

診療放射線学科の授業改善策についてテキストマイニング解析したところ、頻出語としては頻度が高い順に「授業」「遠隔」「学生」「場合」「対面」などが抽出された(表 1)。

表 1：診療放射線学科の頻出語（上位 30 語）

抽出語	頻度	抽出語	頻度	抽出語	頻度
授業	10	アドバイス	1	気	1
遠隔	6	ベース	1	祈る	1
学生	5	レポート	1	疑問	1
場合	3	悪い	1	教科	1
対面	3	課題	1	経験	1
工夫	2	学ぶ	1	継続	1
主体	2	学修	1	見える	1
出来る	2	楽しむ	1	見せる	1
増やす	2	環境	1	孤独	1
年度	2	基礎	1	今年度	1

また共起ネットワーク（図 3）を見ると、全体的にネットワークの繋が存在した。さらに、「学生」、「出来る」は、中心媒介性が高く、ネットワークの構造を保つために重要な役割を果たしていることが分かる。

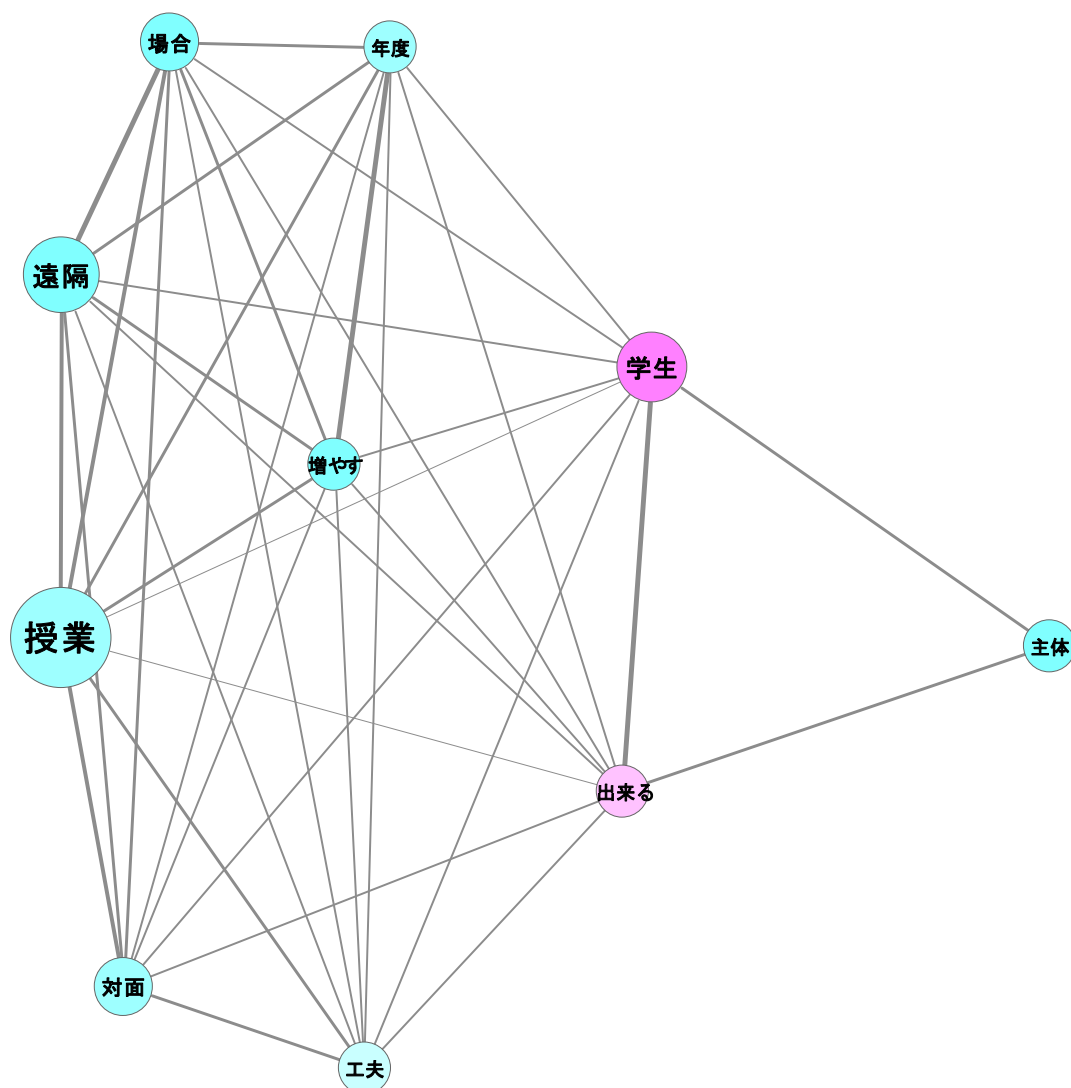


図3 共起ネットワーク

以上により、これらのことは、以下のことを示していると考えられる。

- ネットワークの構造についてまとまりがあることから、学科全員の授業改善点にある程度の共通意識がある。これは、各教員が学科全体としてしっかりと改善点について考えていることを表している。しかし、本年度は設置年度のため、回答数が少ないことに注意する必要がある。
- ネットワークの中心に位置する項目、「学生」、「出来る」は、頻出頻度が高いか、中心媒介性が高いなどの特徴があり、学科の教員全体が共通して課題だと考えている

ことが示唆される。

以上のことを、学科内 **FD** で確認し、今後このようなキーワードで話し合う事になった。各個人がしっかりと問題を自分で考え、また問題点を共有することで、よりよい授業が行うことができる良い **FD** の機会を得た。

IV. 保健科学部 看護学科

1. 授業評価実施数

1) 授業評価アンケート回答数(延べ人数):2,522 名(受講者数 4,374 名、回答率 57.7%)

2. 学生による授業評価の集計結果

1) 設問別回答分布(図1)

令和 2 年度前後期看護学科の学生による授業評価調査の設問別回答分布を図 1 に示す。

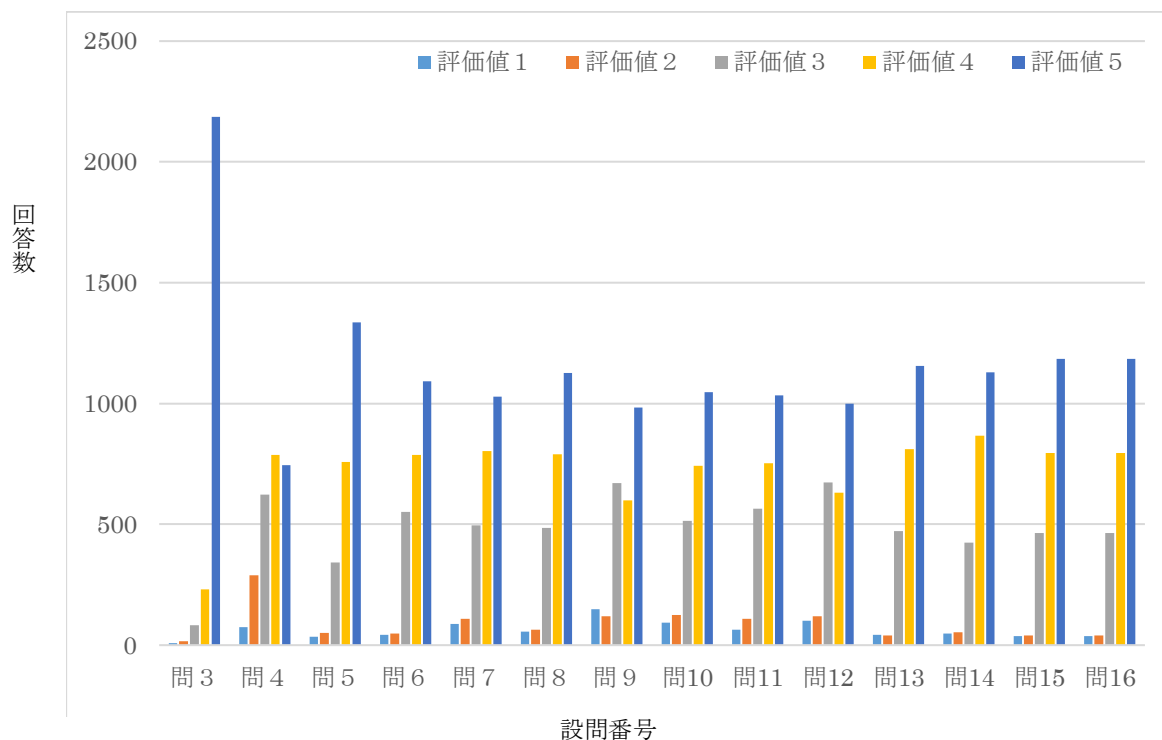


図 1 設問別回答分布

2) 各設問の平均値と昨年度調査との比較(表 1、図 2)

各設問の平均値を表 1 に示す。設問別平均値は、問 4「学習時間」問 9「聞きやすい話し方だった」問 12「学生の質問や意見への対応が十分になされている」問 18「教員間の連携、対応は適切だった」を除くと、全て 4.0 以上と高い評価を得ている。特に高い評価(4.18 以上)を得たのは、問 5「この授業に意欲的に参加した」問 13「自分にとって新しい考え方・発想を得ることが出来た」問 14「授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることが出来た」問 15「自分で調べ、考える姿勢が身についた」であった。さらに、平成 30 年度、令和元年度の調査と本年度調査の設問別平均値の比較を図 2 に示す。平均値は、問 3,4,5,6,8,13,14,15,18 に 0.04～0.42 ポイント高値となったが、その他の項目においては 0.01～0.2 ポイント低値であった。

表 1 設問別平均値

設問番号	3	4	5	6	7	8	9	10	11
平均値	4.81	3.73	4.31	4.12	4.02	4.14	3.85	4.00	4.02
設問番号	12	13	14	15	16	17	18	19	20
平均値	3.91	4.19	4.18	4.21	4.12	4.07	3.96	4.08	4.05

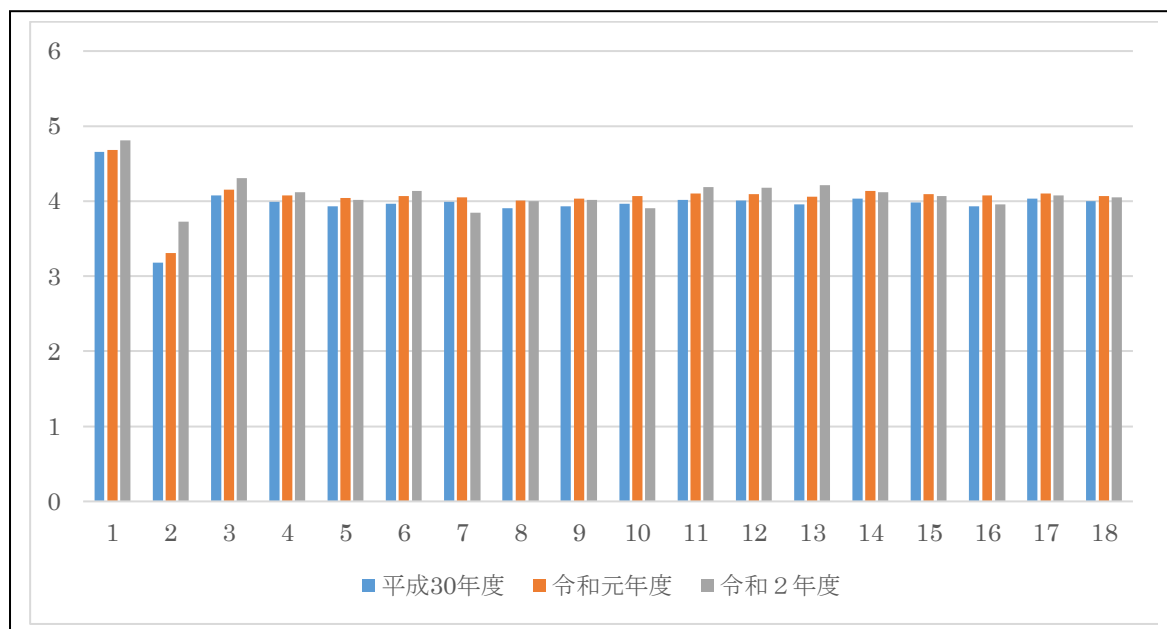


図 2 調査実施年別設問平均値

表 2 カテゴリー別平均値

	I 学生自身	II 授業内容	III 授業方法	IV 学習成果	V 全体評価
令和 2 年度	4.3	4.1	3.9	4.2	4.1

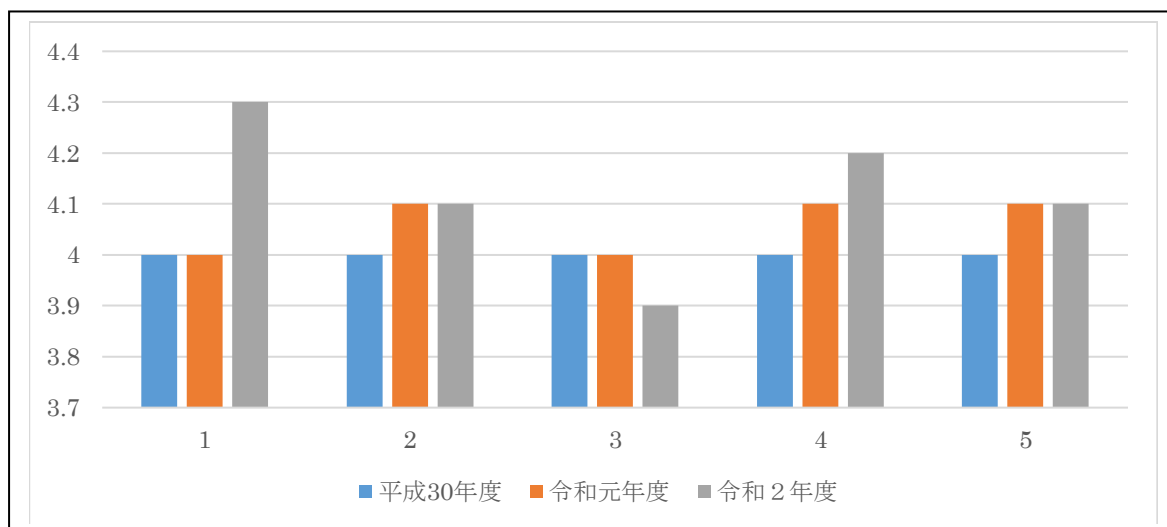


図 3 カテゴリー別評価平均の年次推移

3) カテゴリー別平均値(表 2、図 3)

令和元年度の категория別平均値を表 2 に示す。平均値は、すべて 4.0 以上と高い評価を得ている。また、平成 30 年度、令和元年度の調査と本年度調査の категория別平均値の比較を図 3 に示す。カテゴリー別平均値は昨年と比較すると、カテゴリー I が 0.3 ポイント、IV が 0.1 ポイント高値、II、V が同値、III が 0.1 ポイント低値であった。

3. 集計結果の解析と問題の所在

カテゴリー別平均値(表 2)をみると、カテゴリー I (学生自身)の平均値は 4.3、カテゴリーIV(学習成果)の平均値も 4.2 と高評価を得ている。また、カテゴリー I (学生自身)の設問 3～5 は、すべての項目の平均値が、昨年と比較して 0.3～0.42 ポイント高値を示した。特に、設問 4「授業以外に学習した時間」は、平均値が 3.73 で、昨年より 0.42 ポイント高値を示した。また、全学の平均と比較しても 0.35 ポイント高値である。さらに、カテゴリーIV(学習成果)の設問 13～15 も、すべての項目の平均値が昨年と比較して 0.09～0.15 ポイント高値を示した。特に設問 15「自分で調べ、考える姿勢が身についた」は、平均値が 4.21 で、昨年より 0.15 ポイント高値を示した。本年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、授業は主に遠隔で行われたが、学生が、主体的に学修することができ、新しい知識や考え方を得ることができたと評価できる。

しかしながら、カテゴリーIII(授業方法)の平均値は 3.9 で、昨年と比較すると全ての設問の平均値が 0.01～0.2 ポイント低値となった。さらに全学平均と比較しても、すべての設問が 0.27～0.38 ポイント低値であった。また、カテゴリー II (授業内容)の平均値は 4.1 で、設問 6,8 は 0.04～0.07 ポイント高値、設問 7「毎回の授業内容はよくまとまっていて、よく理解できた」は 0.02 ポイント低値であった。さらに、全学平均と比較すると、すべての設問の平均値が 0.15～0.27 ポイント低値であった。遠隔授業は主に音声とパワーポイントで行われたが、聞きやすい話し方、スライドなどの使い方、授業の進行には課題を残したといえる。また、質問や意見への対応も学生が満足できるものになっていなかった可能性がある。

さらに、学科別設問 18「複数教員の授業の場合教員間の連携、対応は適切だった」は平均値が 3.96 で、昨年と比較して 0.12 ポイント低値となった。本年度は、演習科目のみ対面での授業(演習)が行われたが、学生が、各教員の指導の違いに困惑していた可能性がある。次年度は教員間の連携を強化する必要がある。

4. 授業改善策の検討

上記の集計結果の解析、及び学科長に提出された授業評価報告書の「授業で工夫した点と評価結果の解析」の自由記述、さらに、2020 年度前期授業評価報告書の計量テキスト分析・テキストマイニングの結果から改善策について考察し、より良い授業の手がかりとしたい。

テキストマイニング解析したところ、頻出語としては頻度が高い順に「授業」「学生」「対面」「考える」「遠隔」「課題」「学習」などが抽出された(表 3)。

また、共起ネットワーク(図 4)を見ると、全体的にネットワークの繋が存在し、「学生」「オンライン」「課題」「テスト」「グループ」などの語を含むネットワークにまとまりが見られる。

さらに、「感染」、「実技」、「到達」、「想定」、「結果」、「実習」、「不安」、「支持」は、中心媒介性が高く、ネットワークの構造を保つために重要な役割を果たしていることが分かる。これらの言葉から読み取ると、頻出語ではないが、当然ながら新型コロナウイルス「感染」が講義授業よりも「実習」や「実技」に与える影響が多く、心理的「不安」を来していたことを示唆している。また、それに対応した取り組みがなされていたことを示唆している。

学科長に提出された「授業で工夫した点と評価結果の解析」に戻り、これらの語含む改善策

を確認すると、学習成果の向上に寄与した取り組みは、【音声と資料（主にパワーポイント）の授業】【視聴覚教材の工夫】【授業毎のテスト】【授業内容アップロード期間の延長】【少人数での対面授業】【課題（質問票やミニレポート）へのコメント返し】【学生のレポートの教材化】であった。

遠隔（オンライン）授業を余儀なくされた今年度の授業方法で、最も学生に支持されたのは【音声と資料（主にパワーポイント）の授業】であった。また、手作りの動画を作成して配信するなど【視聴覚教材の工夫】は授業内容の理解を促すことにつながった。さらに、【授業毎のテスト】を行うことで、学生の理解度を確認しながら、授業を行うことができ、不足している知識を補うことができた。また、自宅学習を能動的に進めることに繋がった。さらに、【授業内容アップロード期間の延長】をしたことは、何度でも繰り返し受講することで復習できるため、学生には高評価であった。また、知識の定着に繋がった。さらに、1 クラスを 20 人程度の少人数に分けて感染防止対策を徹底しながら演習や講義など【少人数での対面授業】を行うことで、学生の理解度を確認しながら授業を行うことができた。また、遠隔授業の内容を補うことができた。さらに、【課題（質問票やミニレポート）へのコメント返し】は、タイムリーに学生の疑問に答えることができ、双方向型の授業に近い指導ができた。また、学生は、教員のコメントを“楽しみ”と捉え、学修意欲の向上に繋がった。さらに学生のレポートを教材にして全体に説明したり、学生同士が、それぞれの意見を manaba 上で閲覧できるようにするなどの【学生のレポートの教材化】は、学生の理解度に合わせた授業の展開に繋がった。また、他学生の意見が刺激となり、学修意欲の向上につながった。さらに、教材としてレポートが採用された学生は、自己肯定感を高めることができたようである。

一方で、遠隔で行われたグループワークは、manaba 上で意見交換を行うなどの工夫が試みられたが、学生にとってはログインする手間などが煩わしいなどの理由で manaba がうまく活用できなかったり、メンバーの参加態度に対する不満が強かったなどが報告されており、学習成果の向上に結びつけることはできなかったようである。

これらのことから、次年度も遠隔授業が続く場合は、【音声と資料（主にパワーポイント）の授業】【授業内容アップロード期間の延長】【少人数での対面授業】【視聴覚教材の工夫】【課題（質問票やミニレポート）へのコメント返し】などの工夫が授業改善策として推奨できる。また、【授業毎のテスト】【学生のレポートの教材化】は、遠隔授業はもちろん、対面授業でも学修意欲、学習成果を高めるための取り組みとして推奨できる。さらに、遠隔でのグループワークに関しては、学科 FD に結びつけることで、より効果が高い授業改善を目指すことができる。

表 3 看護学科の頻出語(上位 30 語)

抽出語	頻度	抽出語	頻度	抽出語	頻度
授業	60	グループ	8	教員	6
学生	24	テスト	8	工夫	6
対面	20	次	8	取り入れる	6
考える	19	年度	8	感じる	5
遠隔	17	試験	7	看護	5
行う	15	資料	7	今回	5
課題	13	対策	7	思う	5
学習	13	評価	7	時間	5
実施	11	オンライン	6	場合	5
内容	11	教育	6	入れる	5

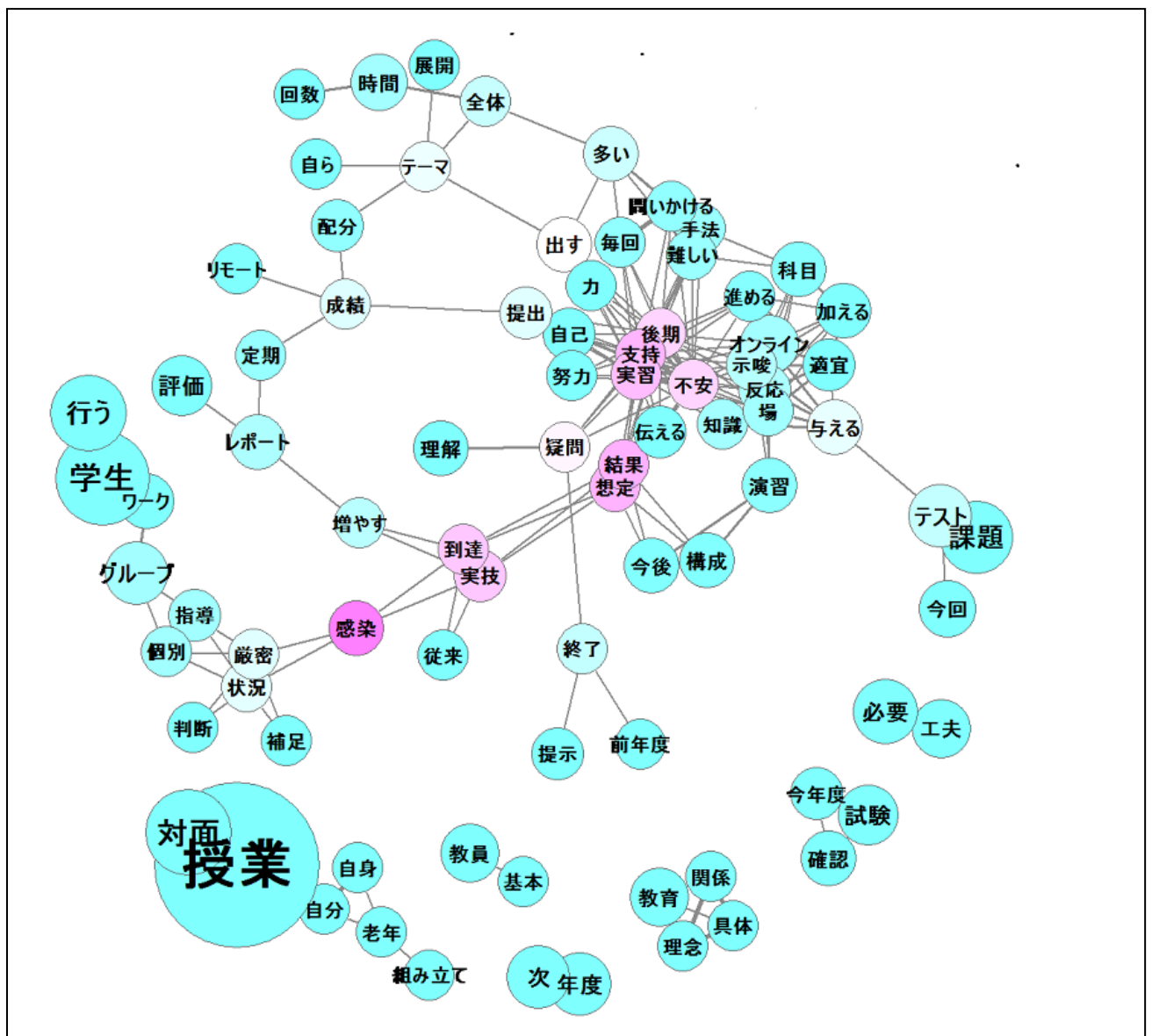


図4 共起ネットワーク

V. 教育学部 こども教育学科

1. 授業評価実施数

授業評価アンケート回答数（学生の延べ人数）：4,774 名

2. 学生による授業評価の集計結果

1) 設問別回答分布（図 1）

令和 2 年度前後期 こども教育学科の学生による授業評価調査の設問別回答分布を図 1 に示す。

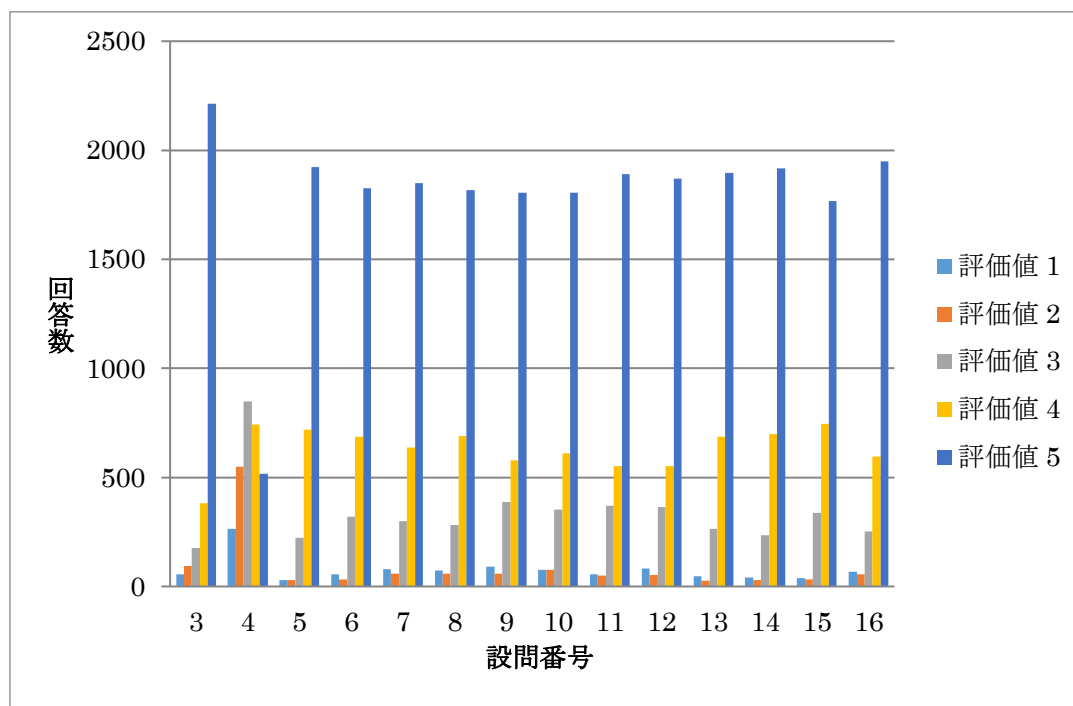


図 1 設問別回答分布

2) 各設問の平均値（表 1）

各平均値は 3.24～4.57 の間に分布していた。最も平均値が高かったのは設問 3 の「この授業への出席状況は？」（4.57）であった。また、最も平均値が低かったのは設問 4 の「この授業に関連して、授業以外に学習した時間。（授業 1 回あたりの平均時間）」（3.24）であった。

表 1 設問別平均値

設問番号	3	4	5	6	7	8	9
平均値	4.57	3.24	4.53	4.44	4.41	4.41	4.35
設問番号	10	11	12	13	14	15	16
平均値	4.37	4.43	4.40	4.49	4.51	4.43	4.47

3) カテゴリー別平均値（表 2）

各平均値は 4.1～4.5 の間に分布していた。高いものから「Ⅳ 学習成果」＝「Ⅴ 総合評価」＞「Ⅱ 授業内容」＝「Ⅲ 授業方法」＞「Ⅰ 学生自身」の順であった。

表 2 カテゴリー別平均値

I 学生自身	II 授業内容	III 授業方法	IV 学習成果	V 総合評価
4.1	4.4	4.4	4.5	4.5

3. 集計結果の分析と問題の所在

1) 設問・カテゴリー別評価

設問別評価では、設問 3～16 の各設問における平均値上位 3 項目は、設問 3「この授業への出席状況は？」（4.57）が最も高く、設問 5「この授業に意欲的に参加した」（4.53）であり、続いて設問 14「授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた」（4.51）であった。全 14 項目のうち上位 3 項目を含む 11 項目が 4.4 以上であった。そして、最も平均値が低かったのは、設問 4「この授業に関連して、授業以外に学習した時間。（授業 1 回あたりの平均時間）」（3.24）であり、例年指摘されている正課外の学習時間の短さがみられる。

また、その他の項目はすべて 4.35 以上 4.50 未満の範囲に分布であり、ほぼ肯定的な回答であった。これらの項目の最頻回答は 5（そう思う）であり、いずれの項目も高い評価であった。なお、学科独自項目のため平均値上位 3 項目からは省いたが、問 17「教員の学生への対応が公平」については 4.61 と全設問のうち最も高評価であった。

次に、カテゴリー別評価では「Ⅰ 学生自身」の 1 カテゴリーのみ全学科平均値（4.2）よりも 0.1 ポイント低い結果であった。カテゴリーの中で最も低かったのは昨年同様「Ⅰ 学生自身」である。このカテゴリーに含まれる授業時間外の学習時間の少なさが平均値を下げる結果となった。

2) 昨年度調査との比較（図 2、図 3）

まず、平成 30 年度調査と令和元年度調査と令和 2 年度調査の設問平均値を図 2 に示す。

設問 3「この授業への出席状況は？」と設問 9「聞きやすい話し方だった。」以外の 12 項目は平成 30 年から年々平均値が上昇していた。とりわけ、設問 4「この授業に関連して、授業以外に学習した時間。（授業 1 回あたりの平均時間）」は昨年度の 2.92 から 3.24 とポイントが上昇しており、中央値である 3 を超えており改善がみられたといえる。ただし、今年度は急遽開始した遠隔授業が多くあり、学生自身にとっては対面授業と異なり、大学以外の場所から受講する授業の時間と、それ以外に学習した時間の区別がしにくい状況であったことが推察できる。その結果として授業以外に学習した時間が長い傾向が発生したものと考えるのが妥当である。

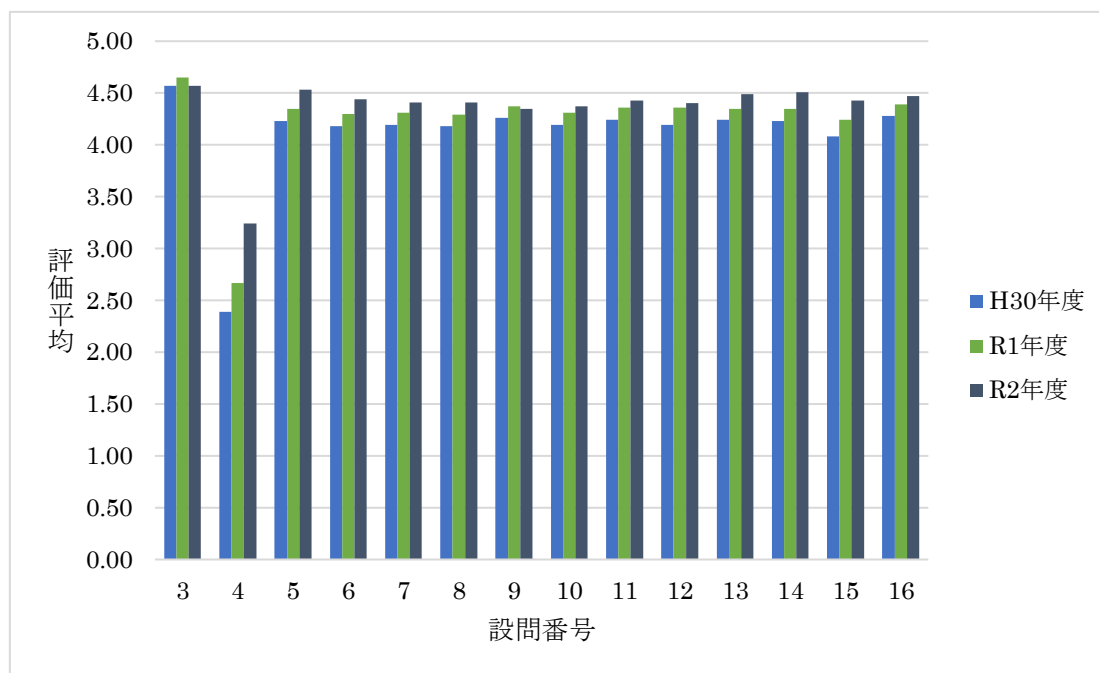


図 2 調査実施年別設問平均値

次に、平成 30 年度調査と令和元年度調査と令和 2 年度調査の 카테고리平均値を図 3 に示す。

すべてのカテゴリーにおいて平成 30 年から年々平均値が上昇していた。平均値の分布についても、令和元年度の 3.8～4.5 から令和 2 年度は 4.1～4.5 へと上昇していた。特にⅠの学生自身は 0.3 ポイント、そしてⅣの学習成果については 0.1 ポイント上昇している。これは大きく評価に値する。

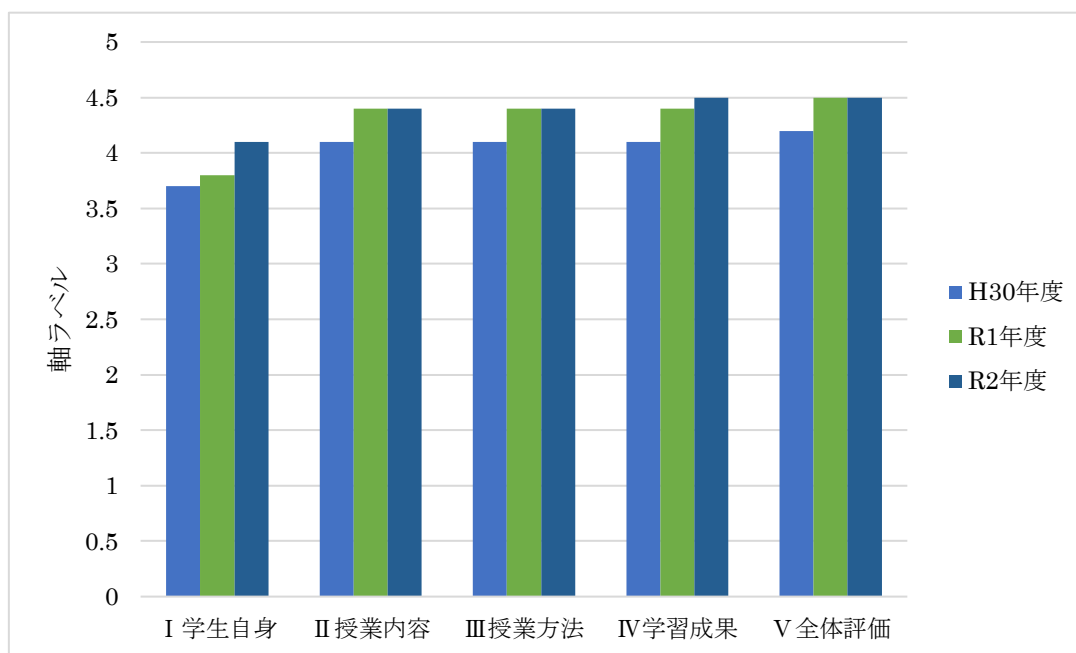


図 3 カテゴリー平均値

4. 授業の改善策の検討

こども教育学科の授業改善策についてテキストマイニング解析したところ、頻出後としては頻度が高い順に「授業」「学生」「遠隔」「対面」「思う」などが抽出された（表3）。

表3：こども教育学科の頻出語（上位29語）

抽出語	頻度	抽出語	頻度	抽出語	頻度
授業	78	実施	11	向上	6
学生	37	改善	10	今回	6
遠隔	34	考える	10	資料	6
対面	29	指導	10	出席	6
思う	20	工夫	8	保育	6
課題	16	時間	8	可能	5
次	15	状況	8	学習	5
年度	15	評価	8	方法	5
内容	14	技術	7	目指す	5
対策	12	行う	7		

また共起ネットワーク（図4）を見ると、全体的にネットワークの繋が存在しなかった。また、例年ではみられる、媒介中心性が高い語も全く存在しなかった。媒介中心性は、ネットワークの構造を保つために重要な役割を果たしている中心性の1つである。

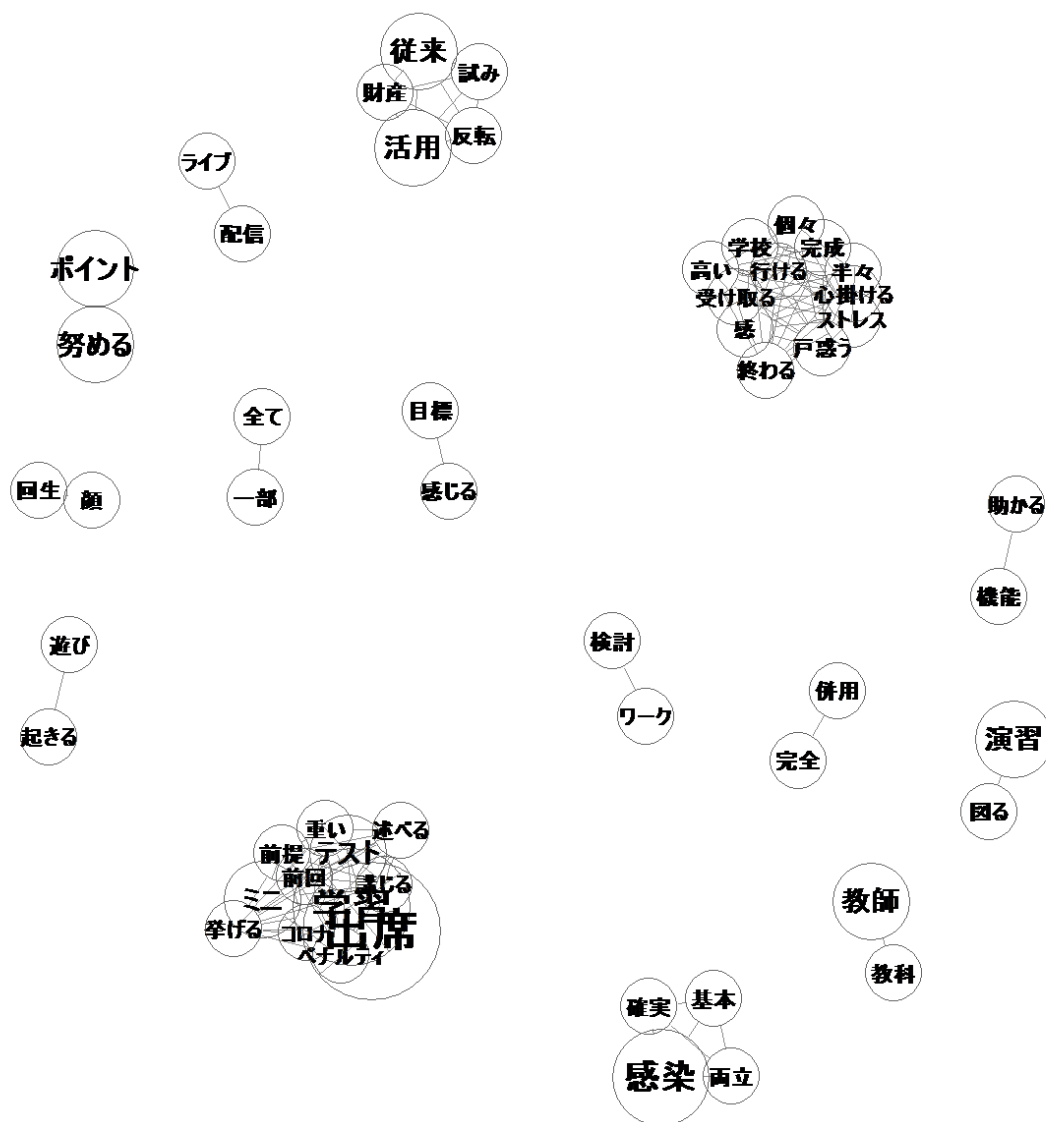


図4 共起ネットワーク

以上により、これらのことは、以下のことを示していると考えられる。共起ネットワークの構造についてまとまりがないことから、初めて遠隔授業を開始した 2020 年前期における、学科全員の授業改善点には、共通意識がない。言い換えると、遠隔授業に対応することに精一杯で、個別の教員の改善点が異なることが考えられる。これは、時代が経過して遠隔授業に慣れ、学科教員で改善点が共有されてくれば、共起ネットワークがつながってくることが予想される。

そのため、学科内で各教員の遠隔授業における改善点を FD で共有することが重要であり、実施していく。それにより、遠隔授業においても、よりよい授業が行うことができるようになるだろう。

VI. 短期大学部 口腔保健学科

1. 授業評価実施数

- ① 授業評価アンケート回答数（延べ人数）：3,486 名
（履修登録者数 5,120 名、学生回答率 68.1%）
- ② 学科長に報告書が提出された科目数：85 科目中 73 科目（85.9%）

2. 学生による授業評価の集計結果

1) 設問別回答分布（図 1）

令和 2 年度前・後期口腔保健学科の学生による授業評価調査の設問別回答分布を図 1 に示す。

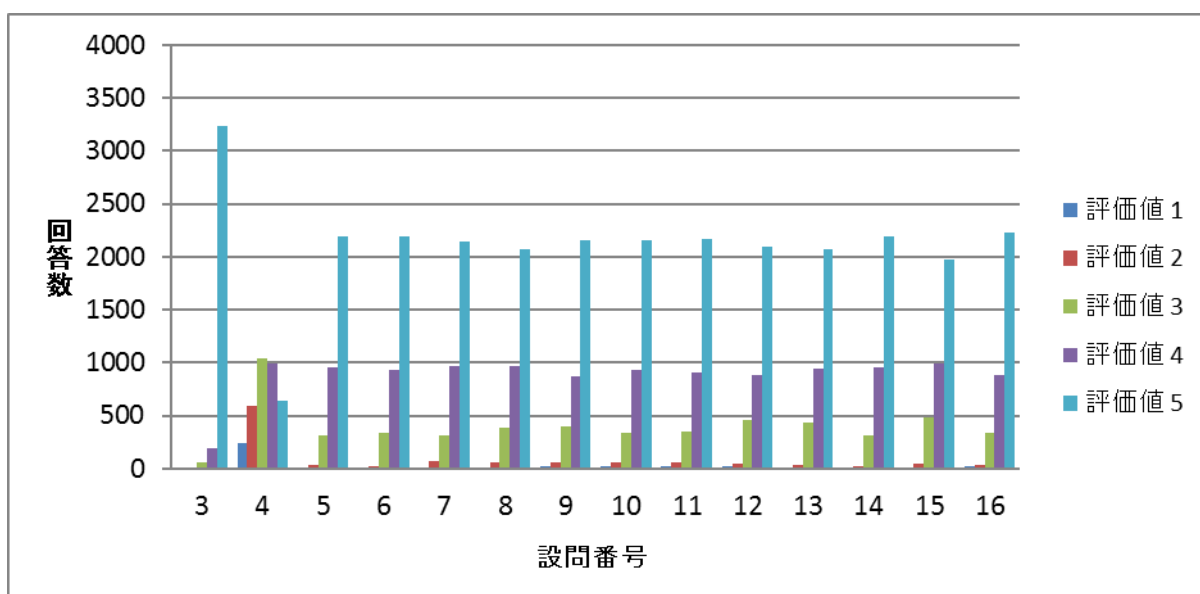


図 1 設問別回答分布

2) 設問別平均値（表 1）

令和 2 年度の各設問の平均値を表 1 に示す。

設問 5～16 のうち最も平均値が高かったのは設問 5「この授業に意欲的に参加した」(4.51) と設問 14「授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた」、設問 16「この授業を受けて満足している」(4.51) であった。また、最も平均値が低かったのは設問 15「自分で調べ、考える姿勢が身についた」(4.39) であった。設問 17.18 は学科独自項目で実習に関する問いであるが、いずれも 4.4 以上あり高値だった。

設問 3 と 4 の学生自身の評価については、設問 3「この授業への出席状況は」では 4.89、設問 4「この授業に関連して、授業以外に学習した時間（授業 1 回当たりの平均時間）」が 3.34 であり 1 時間程度の授業外学習時間であった。

表 1 設問別平均値（令和 2 年度前後期）

設問番号	3	4	5	6	7	8	9
平均値	<u>4.89</u>	<u>3.34</u>	<u>4.51</u>	<u>4.50</u>	<u>4.47</u>	<u>4.43</u>	<u>4.45</u>
設問番号	10	11	12	13	14	15	16
平均値	<u>4.47</u>	<u>4.47</u>	<u>4.42</u>	<u>4.44</u>	<u>4.51</u>	<u>4.39</u>	<u>4.51</u>
設問番号	17	18					
平均値	<u>4.43</u>	<u>4.47</u>					

*下線は R1 よりも高値を示した設問
すべての設問で昨年により高値を示した。

3) カテゴリー別平均値（表 2）

平成 30～令和 2 年度のカテゴリー別平均値を表 2 に示す。

すべての項目で R1 年度よりも高値を示した。Ⅱ授業内容、Ⅲ授業方法、Ⅴ全体評価で 4.5 とかなり高値であった。

表 2 カテゴリー別平均値

	I 学生自身	Ⅱ 授業内容	Ⅲ 授業方法	Ⅳ 学習成果	Ⅴ 全体評価
R2 年度	<u>4.2</u>	<u>4.5</u>	<u>4.5</u>	<u>4.4</u>	<u>4.5</u>
R1 年度	4.1	4.3	4.3	4.3	4.3
H30 年度	3.9	4.1	4.2	4.1	4.2

*下線は R1 よりも高値を示した設問

3. 集計結果の解析と問題の所在

1) 設問・カテゴリー別評価

すべての設問の平均値が R1 年度より高い数値であった。実習科目に関する設問 17.18 についても昨年の 4.4 を上回る結果であった。学生自身の評価である設問 5「この授業に意欲的に参加した」、総合評価である設問 16「この授業を受けて満足している」が 4.51 と最高値を示したことは、学生の授業意欲を満足させる授業であったことが示されたと考える。また、設問 14「授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた」も 4.51 と最高値を示し、設問 6「授業の到達目標がシラバスや授業でわかりやすく示された」が 4.5、設問 7「毎回の授業内容は良くまとまっていて、よく理解できた」、設問 10「板書、スライド、教材などの使い方は、わかりやすく適切だった」、設問 11「授業の進行速度は適切だった」がいずれも 4.47 であったことより、授業の方法にも学生の満足度が伺える結果であった。R2 年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から、原則的には講義科目は遠隔で、演習・実習科目は対面で実施したことが今までと大きく異なるが、その中でも R1 年度より高い評価を得たことは、遠隔授業の利点が評価につながっていると考えられる。

設問 4 の「この授業に関連して、授業以外に学習した時間」の平均値が 3.34 であり、これについても、R1 年度の 3.13 を上回り授業外学習時間の改善が認められた。これも遠隔授

業の効果の1つと考える。

また、Ⅱ～Ⅴの項目の平均値が大学全体の平均値より高値を示した。

カテゴリー別評価では、すべて4点以上であり、カテゴリーⅡ・Ⅲ・Ⅴについては4.5であった。R1年度に比べてすべての項目で評価の向上が認められた。

2) 昨年度調査との比較 (図 2.3)

H30～R2年度までの3年間の設問別年次推移を図2に示す。すべての項目において、R2年度が高値を示した。

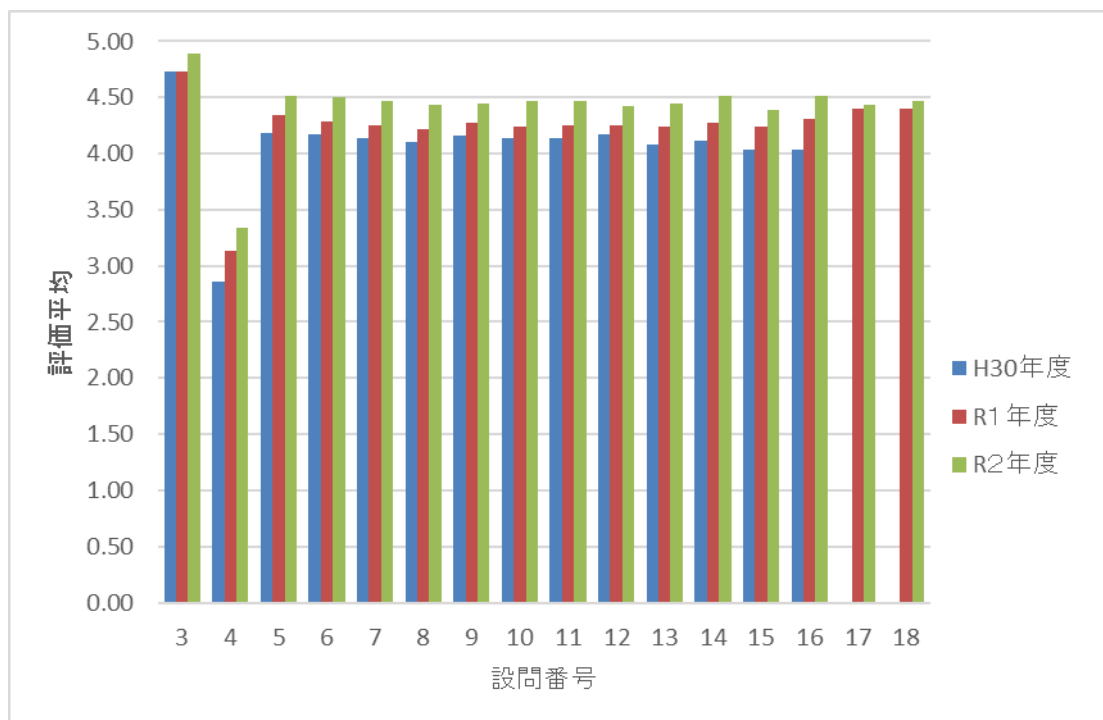


図 2. 設問別年次推移

次に、カテゴリー別年次推移を図3に示す。

カテゴリー別年次推移でも、R2年度が高値であった。

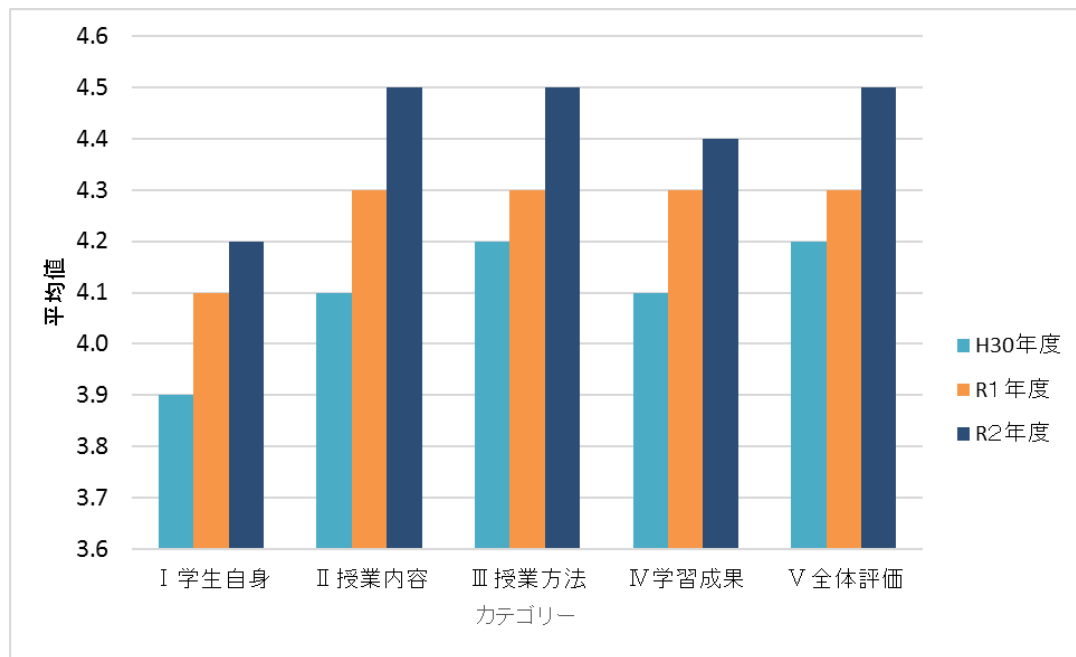


図3 カテゴリー別評価平均の年次推移

以上の結果から、R2年度は、ほぼすべての項目で高値を示した。R2年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から、原則的には講義科目は遠隔、演習・実習科目は対面で実施したことが今までと大きく異なるが、その中でも R1 年度より高い評価を得たことは、本学の遠隔授業がオンデマンド式で、1 週間程度あるいは、授業によってはそれ以降も授業の資料の閲覧が可能であることから 1 回だけではわからなくても複数回視聴することにより理解が深まるため、このような結果が得られた可能性もあり、対面の授業にはない遠隔授業の効果が示されたと考える。また、昨年度より非常勤依頼科目が少なくなり、学科教員の担当科目が多いことから、遠隔授業への移行もスムーズで、manaba course を活用し、授業を実施することができたことも要因として上げることができると考える。

また、例年課題として上げている時間外学習時間の不足問題についても R1 年度より若干の改善が認められたことは、これも遠隔授業のため自宅で学修する時間が増え、毎時間レポートなどの課題を自宅で行うことからこのような結果が得られたと考える。今後、対面の授業になっても、自宅での学修習慣を身につける工夫は続けていく必要がある。

最後に、遠隔授業のため、授業評価を学生に促すことが徹底しにくかったことから、実施、提出率が例年より低かった。来年度は授業評価実施をもっと徹底する必要がある。

4. 授業の改善策の検討

口腔保健学科の「本年度の授業で工夫した点と評価結果の解析」と「次年度の課題と対策」について前期分をテキストマイニング解析したところ、頻出語としては頻度が高い順に「授業」「遠隔」「学生」「実施」「時間」などが抽出された(表 1)。例年にない言葉を赤字で示した。遠隔授業により例年とは異なる言葉が多く見られた。

表 1：口腔保健学科の頻出語（上位 27 語）

抽出語	頻度	抽出語	頻度	抽出語	頻度
授業	56	年度	14	感じる	7
遠隔	26	内容	13	行う	7
学生	22	評価	13	方法	7
実施	21	講義	32	持つ	6
時間	18	結果	12	担当	6
考える	16	科目	11	入れる	6
次	16	必要	11	理解	6
グループ	15	ワーク	10		
学習	15	課題	8		
対面	15	思う	8		

また共起ネットワーク（図 3）を見ると、こちらも例年とは異なるネットワーク図が占められた。

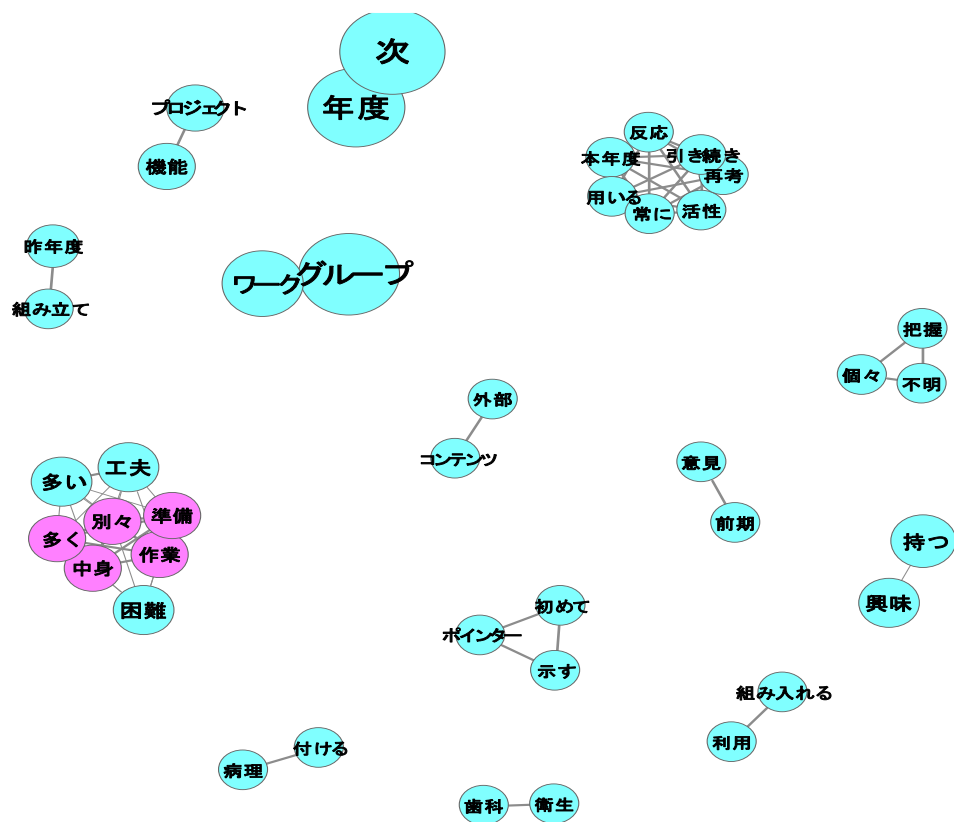


図 3 共起ネットワーク

今年度は、遠隔授業が始まり、教員も慣れない中で様々な工夫をしながら授業を展開したことから、遠隔授業の課題については個別の課題になっているため、共起ネットワーク図に示されるように今までのように共通した課題は提示されず、例年とは異なる結果が示された。また、頻出語も昨年とは異なる単語が多数示された。

新型コロナウイルス感染症を防ぐために安全な授業を実施するためには、遠隔授業は避けられず、来年度も遠隔授業が継続されることから、遠隔授業が経年実施されることで、学科の特徴などが示されるのではないかと考える。

次に、記述内容から考察すると、遠隔授業では

「わかりやすい速度で授業を進めたい」

「動画教材のバージョンアップを行う」

「遠隔授業のみでは学生の反応が解らないため、理解度に応じた追加の解説や補足説明がしにくい」

「次年度は考えるか課題を多く出したい」

「manaba プロジェクト機能を使つてのグループワークは高評価であったが、やはり顔が見えない状態ではやりにくかったという意見があったため、グループワークは対面の方が効果が高いように思う」

上記のように、後期の授業評価コメントからは、資料の充実や学生の反応の確認を課題に挙げている教員が多かった。また、遠隔実施での限界を感じる教員もいた。

遠隔授業の課題を次年度にどのように解決するかを教員が個々で考える必要があるが、それを共有することで、より良い授業を展開できるように学科内 FD で話し合いをする予定である。

VII. 短期大学部 看護学科通信制課程

1. 授業評価実施数

- ① 授業評価アンケート回答数(延べ人数) : 801 名(受講者数 801 名、回答者数 675 名)
- ② 課程長に報告書が提出された科目数: 8 科目

2. 学生による授業評価の集計結果

1) 設問別解答分布 (図1)

2020 年度前後期 看護学科通信制課程の学生による授業評価調査の設問別解答分布を図1に示す。

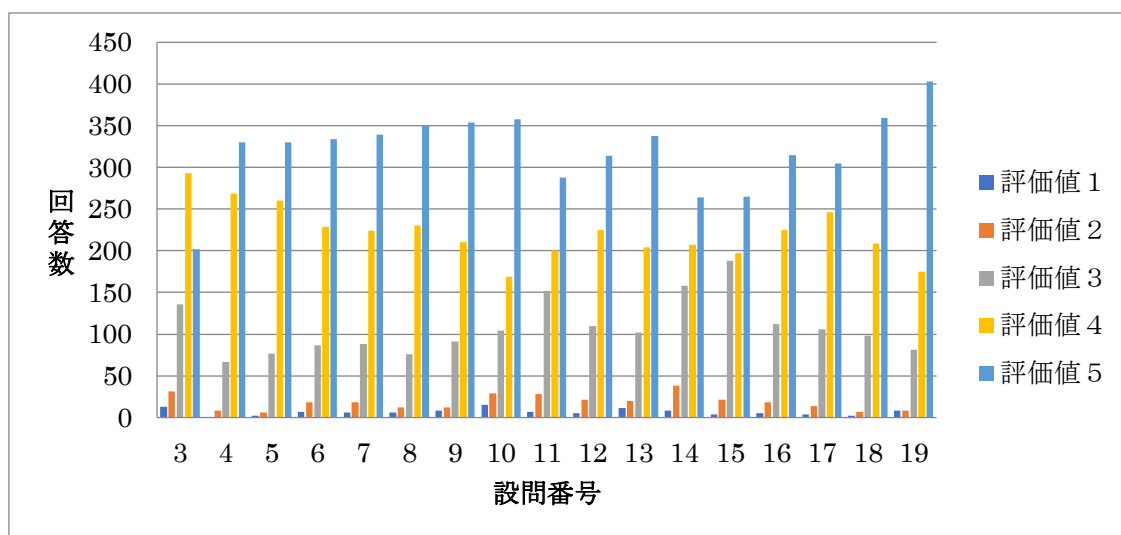


図1 設問別回答分布

2) 各設問の平均値 (表1)

設問3の学生自身の「シラバスを読んで授業内容を確認して臨みましたか」以外の各設問全てにおいて平均値 4.0～4.5 と高かった。設問3も昨年度と比べると 3.75 から 3.95 と評価が上っていた。全 17 項目の内、昨年度より評価が上がった項目は 5 項目で、同数が 2 項目、下っていたのは 10 項目であり、設問9の「授業内容は表面的でなく教員自身の意見や考えを適度に示し心に響くものであった。」設問15の「学生への質問の量、タイミングや方法は適切であった。」設問16の「自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。」などであった。総合評価の「この授業を受けて満足している。」も昨年度 4.46 に比べ 4.42 と下がっていた。

前年度と比べて全体的には大差は無いと考える。

表1 設問別平均値

設問	3	4	5	6	7	8	9	10	11
平均	3.95	4.36	4.35	4.28	4.29	4.35	4.32	4.22	4.09

設問	12	13	14	15	16	17	18	19
平均	4.22	4.24	4.01	4.03	4.23	4.24	4.36	4.42

3) カテゴリー別平均値（表2）

すべてのカテゴリーにおいて 4.0 以上で、高いものから

V 総合評価＞Ⅱ授業内容＝Ⅳ学習成果＞Ⅰ学生自身＞Ⅲ授業方法の順であった。

この結果は昨年度と同様の結果であったが、ⅢとVは 0.1 ポイント下がっていた。

表2 カテゴリー別平均値

Ⅰ 学生自身	Ⅱ 授業内容	Ⅲ 授業方法	Ⅳ 学習成果	V 総合評価
4.2	4.3	4.1	4.3	4.4

3. 集計結果の分析と問題の所在

1) 設問・カテゴリー別評価

設問別評価では、17 設問中 16 設問は平均値が 4.0～4.5 と高い評価を得ているが、昨年度と比べると、全体の平均値ではわずか 0.02 ポイントではあるが下がっていた。今年度はコロナ禍にあり、対面授業と遠隔授業の両方に対する授業評価であり、授業方法の差による影響があると考えられる。また、短期間で遠隔授業を準備したことで学生にとっては、不十分に感じられることもあるのではないかと考える。単純に前年度との比較をすることはできないが、設問別平均値 4.0 以上の設問の中で、値が低いのは「授業の進行速度は適切だった」「ノートを取るための時間はちょうど良かった」「学生への質問の量、タイミングや方法は適切であった」などの授業方法に関する項目であったことから、授業方法を含めて、今年度はさらに遠隔授業の内容を精選する必要があると思われる。しかし、このような状況下で昨年度とほぼ同様の 4.0 以上の平均値が得られたことは評価できると考える。

今年度は課程内FD及び実習検討委員会において、教員間でそれぞれの自己評価について意見交換を行ったが、評価結果やそれぞれの課題は、教員間で差があった。

以上の結果を受けて、次年度も引き続き対面授業と遠隔授業の併用が余儀なくされるために、教員間で情報共有だけでなく、意見交換をした上で授業改善に向かう必要があると考える。

4. 授業の改善策の検討

看護学科通信制課程の「本年度の授業で工夫した点と評価結果の解析」と「次年度の課題と対策」についてテキストマイニング解析したところ、頻出語としては頻度が高い順に「授業」「考える」「学生」「内容」などが抽出された(表 1)。

【結果および考察】

「授業の改善」に出てきた頻出語を抽出し(表 1)、次にこれらの単語情報を使用して共起ネットワークを作成した(図 2)。

表 1：看護学科通信制課程の頻出語（上位 30 語）

抽出語	頻度	抽出語	頻度	抽出語	頻度
授業	15	配布	5	学習	3
考える	14	方法	5	教育	3
学生	12	ノート	4	指導	3
内容	10	課題	4	文字	3
工夫	6	看護	4	ウェブ	2
必要	6	対策	4	コロナ	2
資料	5	話し方	4	スライド	2
時間	5	話す	4	テレビ	2
速度	5	リモート	3	モニター	2
対面	5	意識	3	概論	2

まず、頻出語として最も頻度が高い「授業」も 15 回と低く、それに続き「考える」が 14 回、「学生」が 12 回、「内容」が 10 回と続いている。頻度が高い抽出語は、例年上位 50～70 回であるのに比べて今年度は、もっとも多い語でも 15 回と非常に少なかった。

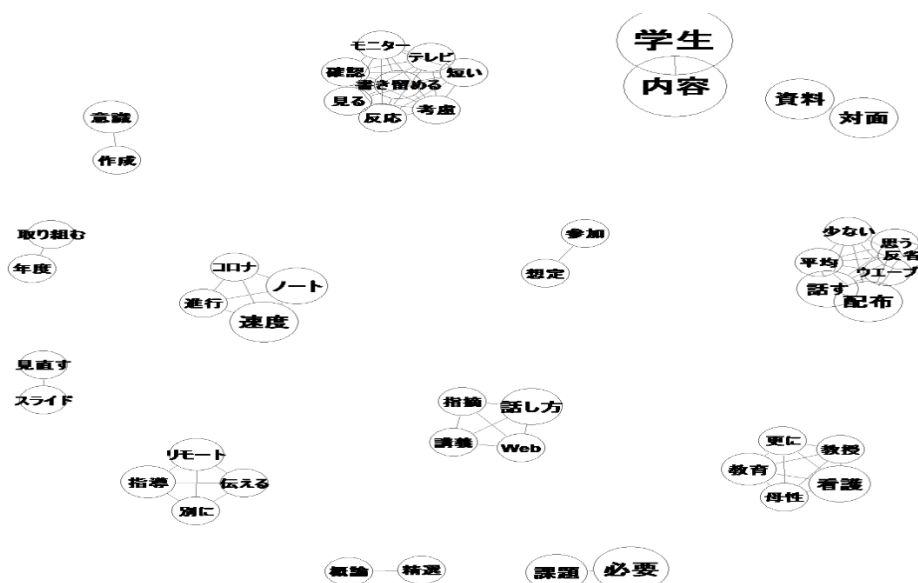


図2 共起ネットワーク

共起ネットワーク図を見ても、特徴的なのは中心媒介性がみられずネットワークがつながっていない。おそらく各教員ごとの意見の集合体ではないかと考えられる。これは、課程全体として共通した授業改善に関する意識よりも、教員個人が主体的に行う個別な授業改善の方が多いことを表している。単語の高い頻度から推定するに、授業、学生、内容などに、通信制課程での改善への取り組みが表れていると考えられる。

今年度はこれまでにない遠隔と対面授業の2種類の開講をしてきたことで、各教員がそれぞれに自身の課題に向き合った結果ではないか。今後この形態が続くことが予想される中で、各教員の抱える課題について話し合う機会を設けるべきであると考ええる。

VIII. 基盤教育分野

1. 授業評価実施数

授業評価アンケート回答数(延べ人数): 4,097 名(受講者数 6,410 名、回答率 63.9%)

② 基盤教育責任者に報告書が提出された科目数: 65 科目

2. 学生による授業評価の集計結果

1) 設問別回答分布(図1)

令和 2 年度前後期基盤教育分野の学生による授業評価調査の設問別回答分布を図 1 に示す。

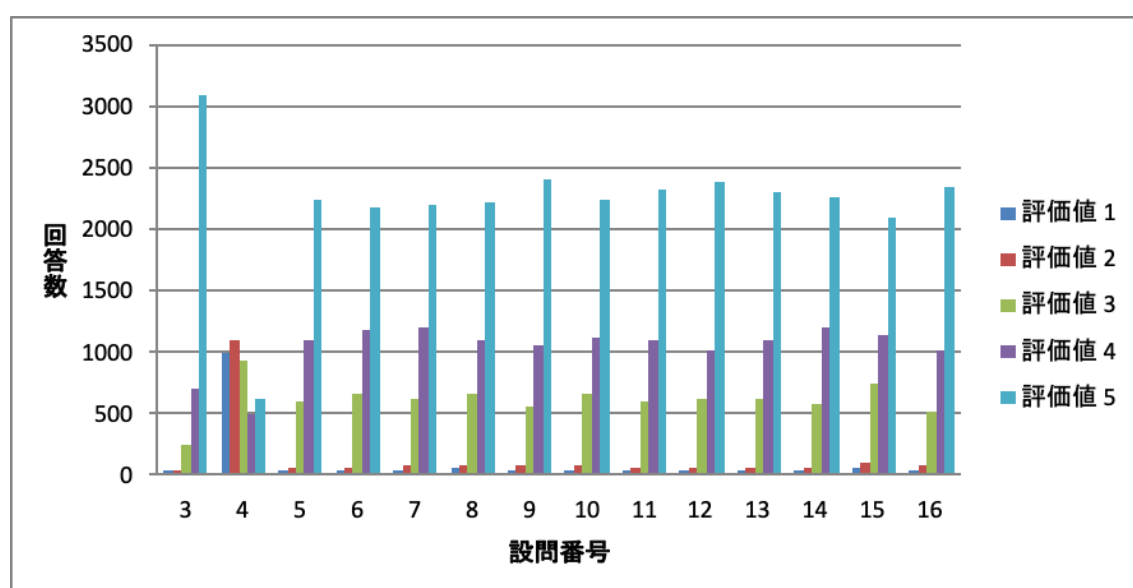


図1 設問別回答分布

2) 各設問の平均値(表 1)

各設問の平均値を表 1 に示す。問 5～16 のうちで平均値が高い設問は、問5(この授業に意欲的に参加した)、問 16(この授業を受けて満足している)、問 14(授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた)であった。一方、平均値がやや低い設問は問 12(学生の質問や意見への対応が十分になされていた)、問 15(自分で調べ、考える姿勢が身についた)であったが、何れも 4.3 以上の評価を得ており、全体として一定の評価が得られたと考える。なお、問 3(出席率)及び問 4(学習時間)は他の設問と選択肢が異なるため比較からは除外している。

表 1 設問別平均値

設問番号	3	4	5	6	7	8	9	10
平均値	4.78	3.13	4.53	4.46	4.49	4.46	4.45	4.43
設問番号	11	12	13	14	15	16		
平均値	4.49	4.39	4.45	4.52	4.39	4.53		

3) カテゴリー別平均値(表 2)

令和 2 年度のカテゴリー別平均値を表 2 に示す。カテゴリー I の学生自身がやや低くなっているが、設問 3(出席率)と設問 4(学習時間)は他の設問と選択肢が異なるため、一概に比較はできない。

表 2 カテゴリー別平均値

	I 学生自身	II 授業内容	III 授業方法	IV 学習成果	V 全体評価
R2 年度	4.1	4.5	4.4	4.5	4.5

3. 集計結果の解析と問題の所在

1) 設問・カテゴリー別評価の年次推移

図2にカテゴリー別平均値の年次推移、図3に設問別平均値の年次推移を示す。新しい基盤教育カリキュラムがスタートして 4 年目となるが、何れのカテゴリー・設問においても年々評価が上昇している。授業改善が進み、学生の評価が上がったことがうかがわれる。

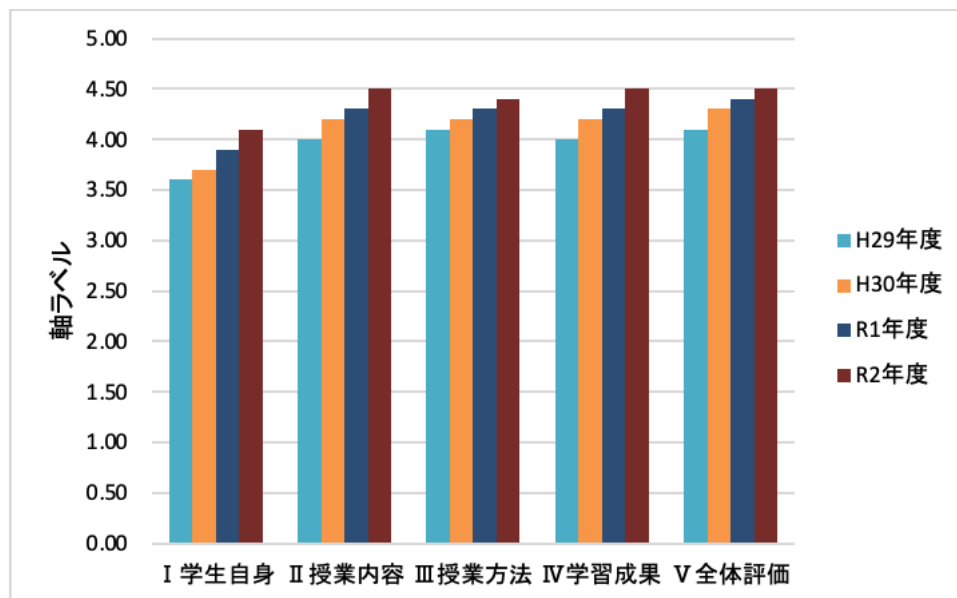


図2 カテゴリー別平均値の年次推移

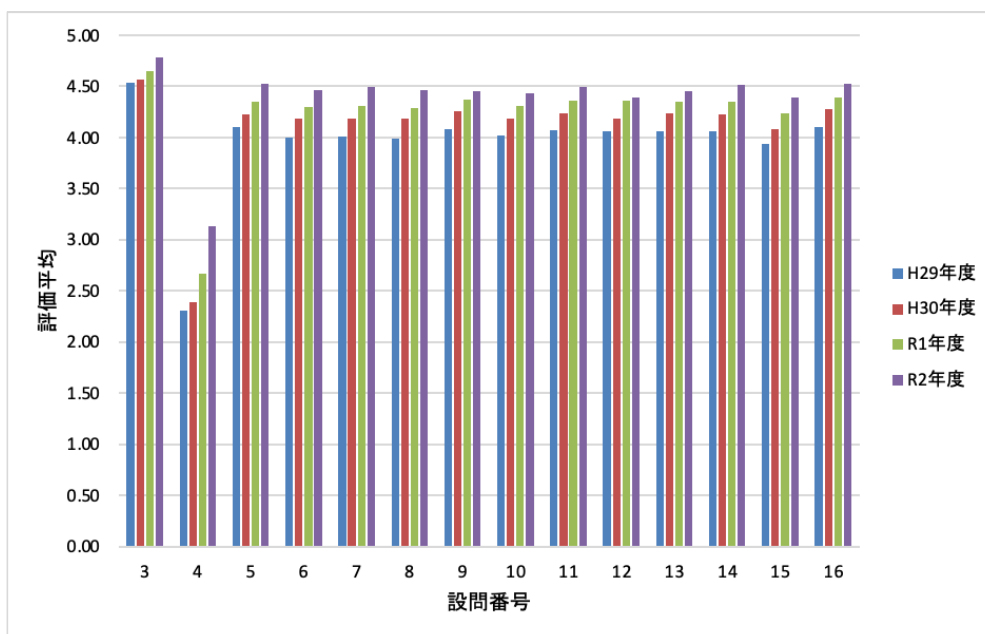


図3 設問別平均値の年次推移

2) 設問・カテゴリー別評価の全体平均との比較

図4に設問別平均値の全体平均との比較を示す。尚、全体平均には、医療検査学科・看護学科 診療放射線学科・こども教育学科・口腔保健学科の専門基礎・専門分野科目及び基盤教育分野 全科目の平均値を使用した。

設問別に比較すると、基盤教育分野は全体平均と比較して、ほとんどの設問でやや高い評価を得ているが、設問 4(授業外学習時間)は全体平均 3.38 に対して基盤教育分野平均 3.13 とやや低い値を示した。この傾向は H29,H30,R 元年度も同様であったが、その差は年々縮小されており、基盤科目での授業外学習時間が増加し、全体平均に近づいてきていることが分かる。

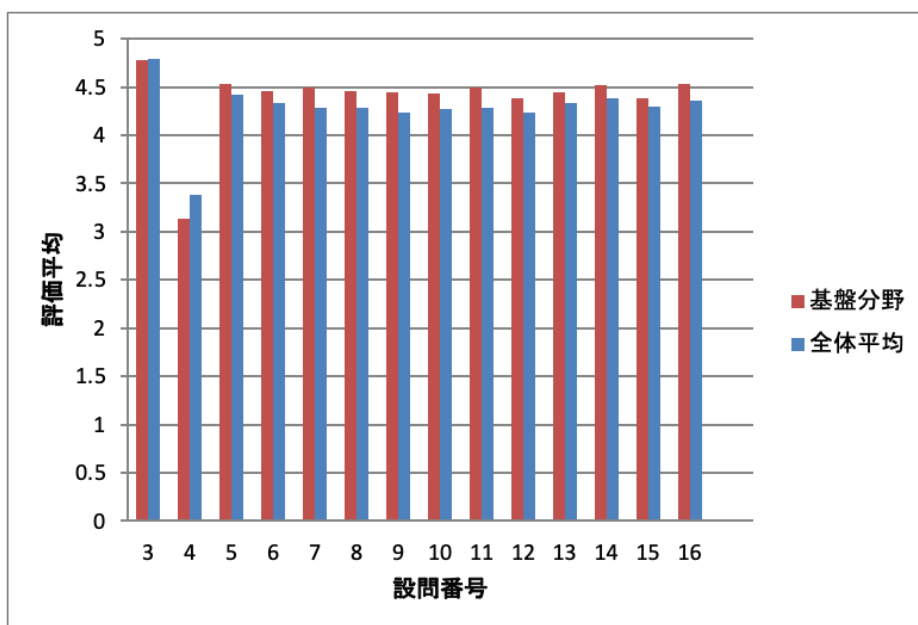


図4 設問別平均値の全体平均との比較

以上の結果から見て、学生たちは基盤教育分野の科目を受講して「満足」していることが分かる。しかし、「授業外学習時間」に関しては、基盤教育開始から4年間で学習時間を伸ばしてきているとはいえ、全体平均と比較するとまだやや低い結果となっている。基盤分野には科目の性質から授業外学習時間を増やすことが難しい科目もあると思われるが、大学での学びのスタートを担う基盤分野として、自主的・継続的な学習習慣をつけるためにも学習時間を増やす工夫がさらに求められる。

4. 授業の改善策の検討

基盤教育分野科目は、医療検査・看護・診療放射線・こども教育・口腔保健の5学科の専任教員および多くの非常勤教員によって担当されている。このため各学科の専門教育分野と異なり、授業評価報告書で得られた問題点や改善策等について担当者間での意見交換の場を持つことが難しい。そこで、上記の集計結果の解析、及び授業評価報告書の「改善策あるいは今後の授業の取り組みについて」の計量テキスト分析・テキストマイニングの結果から、基盤教育分野における授業の課題および改善策の特徴について考察し、今後の基盤教育分野の授業改善の手がかりとしたい。

基盤教育の「本年度の授業で工夫した点と評価結果の解析」と「次年度の課題と対策」についてテキストマイニング解析したところ、頻出語としては頻度が高い順に「授業」「遠隔」「学生」「次」「年度」「対面」などが抽出された(表3)。

表3：基盤教育科目の頻出語（上位30語）

抽出語	頻度	抽出語	頻度	抽出語	頻度
授業	57	増やす	9	使用	5
遠隔	26	今年度	8	受講	5
学生	18	改善	7	出来る	5
次	17	工夫	7	方法	5
年度	17	時間	7	本年度	5
対面	16	内容	7	来年度	5
課題	13	経験	6	グループ	4
考える	13	思う	6	学習	4
場合	13	意見	5	検討	4
実施	10	科目	5	今後	4

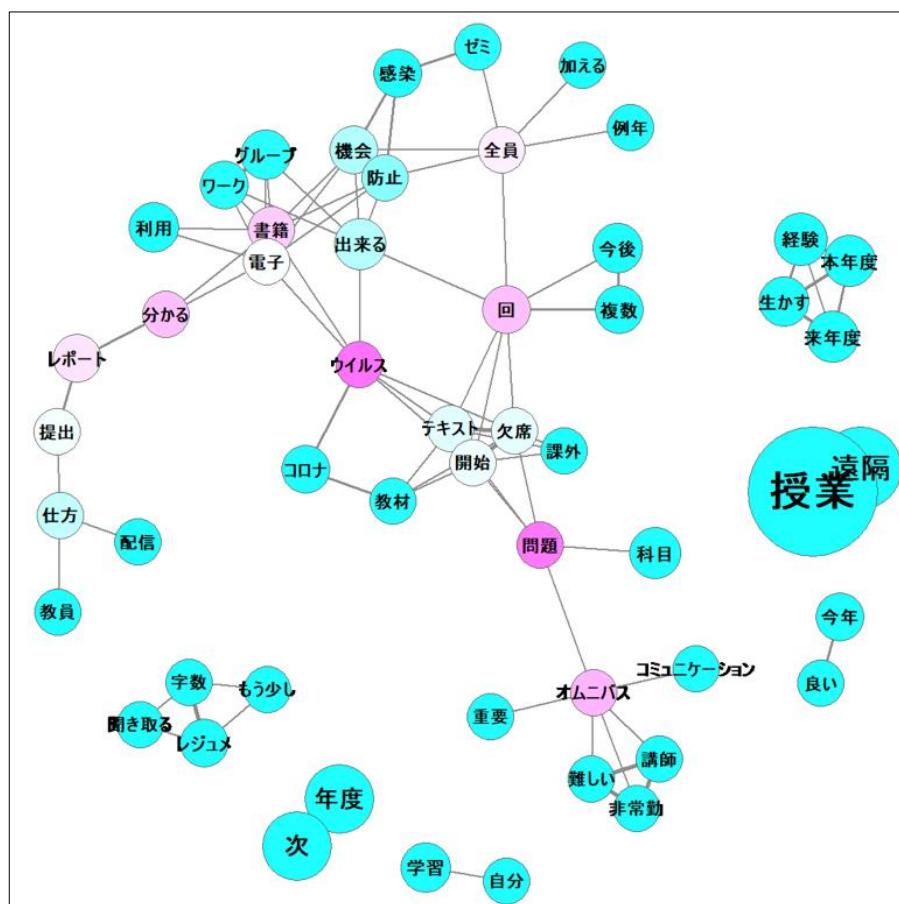


図5 共起ネットワーク

これらのテキストマイニング解析より、以下のことが考えられる。

まず、共起ネットワークを見ると、全体的にネットワークの繋がある。

また、「授業」「遠隔」が独立しているが、これは「遠隔授業」という複合語である可能性が高い。

全体として、大きな1つのネットワークの繋がりが見て取れる。その中では、「ウィルス」「問題」「オムニバス」「回」「全員」「書籍」「分かる」「レポート」は、中心媒介性が高く、ネットワークの構造を保つために重要な役割を果たしていることが分かる。以上により、これらのことは、以下のことを示していると考えられる。

- ・共起ネットワークの構造についてまとまりがある。特に、大きな共起ネットワークが1つあることから、基盤教育を行う際の改善に共通点があることを示している。

- ・ネットワークの中心に位置する項目、「ウィルス」「問題」「オムニバス」「回」「全員」「書籍」「分かる」「レポート」は、媒介中心性が高い特徴があり、教員の全体が共通して課題だと考えていることが示唆される。

- ・また、非常勤講師が入っているオムニバス形式の遠隔授業が難しいと考えていることが

示唆される。

上記の結果から、基盤教育における課題と改善方策について、「学生による授業評価報告書」の記述から考察する。まず、遠隔授業におけるオムニバス形式の授業について挙げる。

- ・ 「講師により授業方法や課題の示し方がそれぞれ異なったことや、オムニバスの科目の特性上、学生へのフィードバックが難しかった」
- ・ 「『遠隔（での提出先）がレポートとアンケートで分かれていたのが不便だった』という意見があった。」
- ・ 「学生からの意見についてほとんど答えていたものの、一部抜けてしまったことから、対応方法について教員間で事前の打ち合わせが十分ではなかったと考える。」
- ・ 「非常勤講師の授業を対面で実施できない場合、1回きりの担当なので、遠隔実施をお願いすることは難しい。対面が不可能になった場合の処置をイメージしておく必要がある。」
- ・ 「今後、複数教員で担当する授業では、遠隔授業の場合の担当の仕方、レポートの提出先や配信の仕方を統一するよう工夫ことが、学生の混乱を軽減できると考える。改善したい。」
- ・ 「お便りコーナーを設けたことにより、学生との意思疎通が取れたと思う。」

等の記述が見られた。授業方法や課題の提示方法、学生へのフィードバックなどについて、授業者が綿密に連絡をとり、統一した指導が必要であることが明らかになった。

次に、基盤教育全体に関わる記述を挙げる。

- ・ 「自分で調べて問題を解く力をつけるように出題した。」
- ・ 「遠隔授業の中で、課題に取り組む時間が2時間以上の学生が3割弱いた。この割合は例年になく高いものである。やはり遠隔授業で自習する習慣がついたためではないかと思う。」
- ・ 「後で、データをプレーバックでき、復習が容易になった。」
- ・ 「manaba 上グループワークを行った。」

という意見が見られた。遠隔授業であっても学生が主体的に学ぶことができる課題設定や、意見交流ができる環境の設定を行うことで学生の学修意欲や効果が向上したと考えられる。

最後に、今後の授業改善のヒントとなる記述を挙げる。

- ・ 「『学生同士意見を述べる時間を多くしてほしい』という意見もあった。意見を言い合えたという意見は複数あったが、教員からの話が多くなってしまったことが影響していると思われる。コロナ禍で入学してから同じ学科の学生とも話す機会が少ない中で、

学生同士もっと話したい気持ちも強かったのではないか。」

- ・ 「他者の意見を聞いて考えるだけでなく、自分の意見をもって参加できるように、事前学習の工夫を検討したい。」

という記述が見られた。意見交流の時間や機会の設定とともに、学修課題を事前に提示する反転学習などの授業方法の工夫も今後の授業改善のヒントとなると考えられる。

以上、基盤教育分野の授業評価から見えたいくつかの課題と改善の方策についてまとめた。基盤教育分野は専門分野と異なり非常に多岐にわたる科目で構成されているが、これらを一つのまとまったカリキュラムとして目標と課題を共有し、授業改善を推進するために何らかの組織的な試みが必要となるであろう。

第3部「卒業生へのアンケート調査結果」報告

I. 概要

本学では、「ディプロマ・ポリシーの達成度に焦点をあてた学修成果の点検・評価」の一つとして、卒業生および卒業生の就職先を対象としたアンケート調査（卒後評価）を実施している。さらに卒業生に対しては、「学修支援、キャリア支援、学生サービス、学修環境の整備等の学生支援の点検・評価」を目的としたアンケート調査も同時に行っている。

卒後評価結果を教職員にフィードバックすることにより、本学の教育内容・方法及び学修指導の改善や、学生生活の改善に活用している。

1. 調査から結果の公表まで

本学の卒後評価の調査実施からその結果の公表までの流れを以下に示す。

1) 対象・実施年・実施時期

- ① 卒業生アンケート：卒後1年目を対象とし、11月にアンケートを依頼し12月を回答期限とした。医療検査学科、看護学科、口腔保健学科では平成24年度から毎年実施し今回が9回目、看護学科通信制課程では平成25年度から実施し今回が8回目の調査である。こども教育学科は平成28年3月に1期生が卒業し、今年度が5回目の調査である。
- ② 就職先アンケート：就職先アンケートは、卒後1年目の卒業生の就職先を対象として3年に1回の実施している。これまでに平成24年度、平成27年度、平成30年度の3回実施しており、今年度は調査年にはあたらないため実施していない。

2) アンケート実施方法

- ① 卒業生アンケート：保健科学部、教育学部、短期大学部口腔保健学科ではアンケートの依頼葉書を郵送し、Web上での無記名回答を依頼した。回答期限前には、メールアドレスが大学に登録されている卒業生に対して、再度案内をメール送信した。短期大学部看護学科通信制課程ではアンケートを郵送し、無記名回答を依頼した回答方法は郵送での返送とWeb上での回答から選択できるようにした。
- 3) アンケート設問項目：各学科の報告書を参照されたい。
- 4) 卒後評価報告書作成：自己点検・評価委員会でアンケート結果の集計・解析を行い、学科教員の意見を反映させた学科別の卒後評価報告書を作成した。作成された報告書は年次報告書に掲載し、大学ホームページで公開した。

Ⅱ. 保健科学部 医療検査学科

1. 回収率

	発送数	回答数	回収率(%)
令和2年度	86	69	80.2
令和元年度	86	53	61.6
平成30年度	103	63	61.2

2. 調査結果

- 卒業後の進路

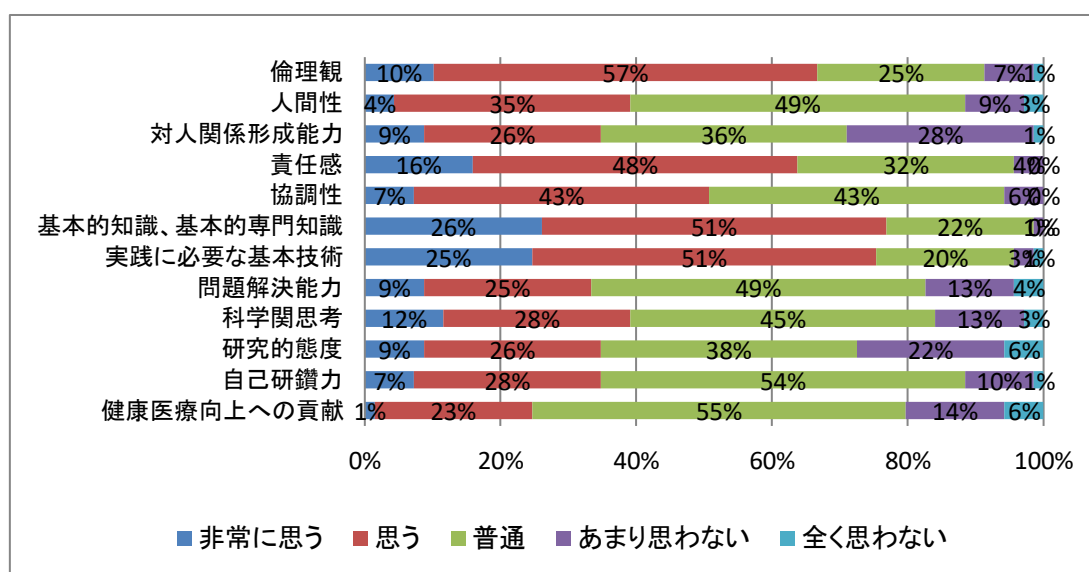
A) あなたの進路をお答えください

クリニック（生殖補助医療）	4
健診センター	3
検査センター	10
国公立病院	7
私立病院	37
進学（大学院・他の大学・専門学校）	1
大学病院	5
臨床検査関連企業	2

● ディプロマポリシーに対する評価

B) あなたは大学での学修や学生生活を通じて以下のものを身につけることができたと思いますか

1. 医療に携わるものとしての、**倫理観**を身につけることができた。
2. 医療に携わるものとしての、**豊かな人間性**を身につけることができた。
3. 医療に携わるものとしての、**対人関係形成能力**を身につけることができた。
4. チーム医療の一員として必要な、**責任感**を身につけることができた。
5. チーム医療の一員として必要な、**協調性**を身につけることができた。
6. 医療検査に必要な**基礎知識**および**基本的な専門知識**を修得することができた。
7. 医療検査の**実践**に必要な**基本的技術**を習得することができた。
8. **問題解決能力**を身につけることができた。
9. **科学的思考力**を身につけることができた。
10. **研究的態度**を身につけることができた。
11. **自己研鑽力**を身につけることができた。
12. 地域社会や国際社会で**保健医療の向上に貢献**できる能力を身につけることができた。



12項目のうち5項目については肯定的な回答（非常に思う・思う）の割合が50%以上を占めている。

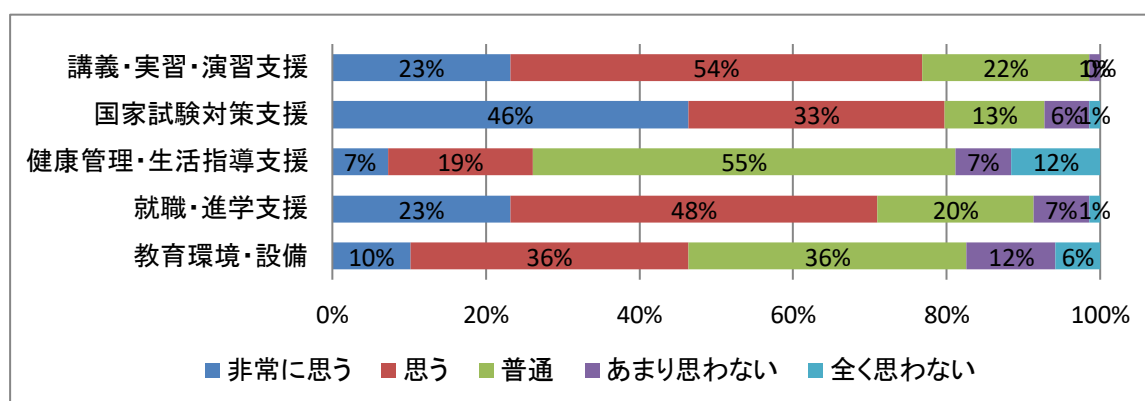
特に評価の高かったもの（肯定的な回答が70%以上）は、「B6：医療検査に必要な基礎知識および基本的な専門知識を修得することができた。（以下、基本的知識、基本的専門知識）」および「B7：医療検査の実践に必要な基本的技術を修得することができた。（以下、実践に必要な基本的技術）」の2項目であった。

特に評価の低い項目（肯定的な回答が30%以下）は「B12：地域社会や国際社会で保健医療の向上に貢献できる能力を身につけることができた。」の1項目であった。

- 本学の各種支援に対する評価

C) あなたが学生時代に大学から受けた支援等について教えてください

1. 講義・実習・演習に対する学修支援・指導がよかった。
2. 臨床検査技師国家試験に対する学修支援・指導がよかった。
3. 健康管理、生活指導に対する支援がよかった。
4. 就職・進学に対する支援がよかった。
5. 教育環境、設備（図書館、講義授業および実習設備、インターネットを含めたコンピューター設備、運動場、テニスコートなど）がよかった。



5項目のうち3項目については肯定的な回答の割合が70%以上を占めている。

特に評価の高かったもの（肯定的な回答が70%以上）は、

「1：講義・実習・演習に対する学修支援・指導がよかった。（以下、講義・実習・演習）」

「2：臨床検査技師国家試験に対する学修支援・指導がよかった。（以下、国家試験対策）」

「4：就職・進学に対する支援がよかった。（以下、就職・進学支援）」

の3項目である。

特に評価の低かったもの（肯定的な回答が30%以下）は

「3：健康管理、生活指導に対する支援がよかった。」の1項目である。

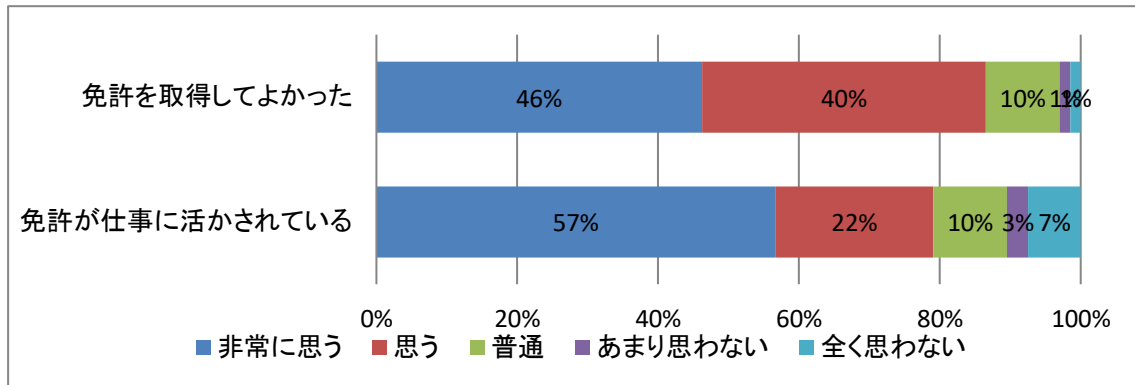
表1 過去3年の大学での支援に対する評価

大学での支援	令和2年度	令和元年度	平成30年度
講義・実習・演習に対する学修支援・指導がよかった。	3.93	4.15	4.13
臨床検査技師国家試験に対する学修支援・指導がよかった。	4.11	4.57	4.39
健康管理、生活指導に対する支援がよかった。	2.99	3.11	3.04
就職・進学に対する支援がよかった。	3.79	3.91	4.00
教育環境、設備（図書館、講義授業および実習設備、インターネットを含めたコンピューター設備、運動場、テニスコートなど）がよかった。	3.29	3.43	3.10

● 職業選択の満足度評価

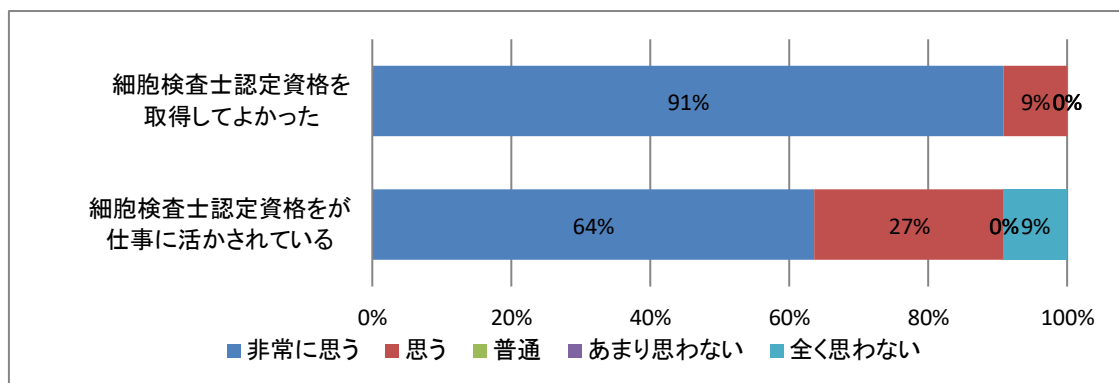
D) 臨床検査技師資格を取得された方にお尋ねします。(免許取得者のみお答え下さい)

1. 臨床検査技師免許を取得してよかったと思う。
2. 臨床検査技師免許が仕事に活かされている。



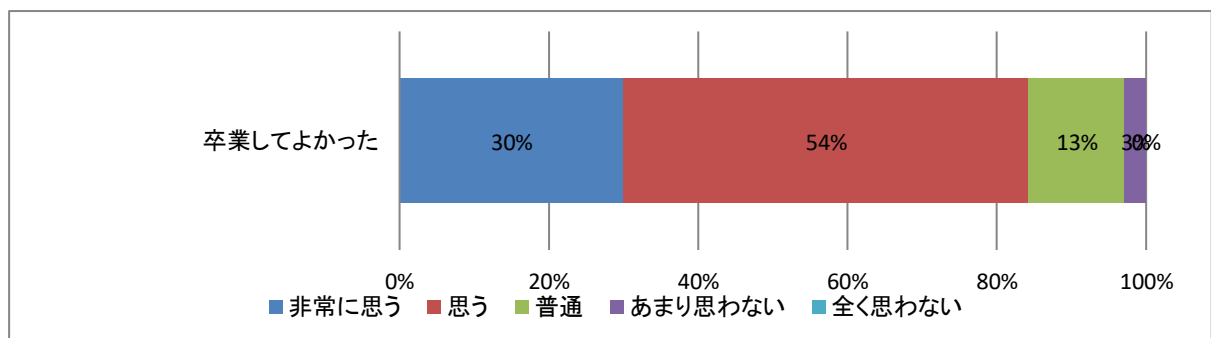
E) 細胞検査士認定資格を取得された方にお尋ねします(資格取得者のみお答え下さい)

1. 細胞検査士認定資格を取得してよかったと思う。
2. 細胞検査士認定資格が仕事に活かされている。



F) 学生時代を振り返って総合的にお答え下さい。

1. 神戸常盤大学保健科学部医療検査学科を卒業してよかったと思う。



3. 卒後評価を教育改善に活かすための取組と考察

1) 回収率

本年度アンケート回収率は、81.4%と昨年度より約 20%上昇した。これまでに中で最も高い回収率となり、アンケート結果の信ぴょう性も向上している。

2) ディプロマポリシー

ディプロマポリシーについての評価では、「B6：(基本的知識、基本的専門知識)」および「B7：(実践に必要な基本的技術)」で肯定的な回答が多い。

一方、「B2：医療に携わるものとしての、「豊かな人間性」を身につけている。」、「B3：医療に携わるものとしての、「対人関係形成能力」を身につけている。」、「B8：「問題解決能力」を身につけている。」、「B9：「科学的思考力」を身につけている。」、「B10：「研究的態度」を身につけている。」、「B11：「自己研鑽力」を身につけている。」、「B12：「地域社会や国際社会で保健医療の向上に貢献できる能力」を身につけている。」では肯定的な回答が 50%未満である。昨年度は2項目であったが、今年度は7項目と非常に多くなっており、多くの卒業生がこれらのポリシーを身につけたという実感が薄い事が推察される。中でも B3：対人関係形成力、B10：研究的態度は昨年度、一昨年度と比べ否定的な回答が多くなっており、今後の課題である。

3) 大学で受けた支援についての評価

大学で受けた支援についての評価では、「C1：(講義・実習・演習)」「C2：(国家試験対策)」「C4：(進路支援)」の3項目において毎年肯定的な回答が多く、「C1：(講義・実習・演習)」の項目は、今まで一度も否定的な回答がない。学科教員が授業、実習、委員会(就職・国家試験)に関わる支援については非常に満足していると言える。一方、「C3：健康管理、生活指導に対する支援がよかった。」、「C5：教育環境、設備(図 書館、講義授業および実習設備、インターネットを含めたコンピューター設備、運動場、テニスコートなど)がよかった。」は毎年評価が低い。健康管理については、健康管理センターが担っているが、その支援に満足していないと考えられる。他学科においてもこの2項目は評価が低く、大学として見直しが必要である。

4) 職業選択の満足度評価

臨床検査技師養成校である本学を卒業し、国家試験に合格すれば臨床検査技師の免許が与えられる。また、4年時に細胞診養成過程(条件あり)を開講しており、このコースを修了した者は在学中に細胞検査士認定試験を受験することが出来、合格すれば臨床検査技師免許と共に、その資格が与えられる。就職先によっては取得した免許、資格を活かすことができない所に就く者もいると考えられる。

5) まとめ

今年度の卒後評価は肯定的な意見が大幅に減少し、否定的な意見が多くなっていた。この結果は真摯に受け止め、学科として対応していかなければならない。今回の結果を踏まえ、学科会議で共有し、今後の対応について議論した。話し合いの場に出た意見として、学生がディプロマポリシーについて触れる機会が少ないとの意見があった。解決策として、学期初めのガイダンスや最初の授業でディプロマポリシーについて説明を行い、意識づけを行う必要がある。学生に、大学での学びはディプロマポリシーに繋がっている事を印象付けることで、学びもより深くなると考えられる。

最後に、アンケート対象の卒業生は、今なお猛威を振るう新型コロナウイルスによって、通常のプロセスを経ずに現場に立っている者がほとんどだと思われる。このような中多くの貴重な意見が得られたことに感謝し、今後の教育に活かしていかなければならない。

Ⅲ. 保健科学部 看護学科

Ⅰ. 卒業生へのアンケート調査結果

1. 回収率

	発送数	回答数	回収率
令和2年度	75	37	49.3%
令和元年度	85	25	29.4%
平成30年度	87	27	31.0%

本年度の回収率は、昨年より 19.9 ポイント上昇した。

2. 調査結果

● 回答者の背景

A) - 1 あなたの現在所属をお答えください。

病院	35
市町村	1
学校	1

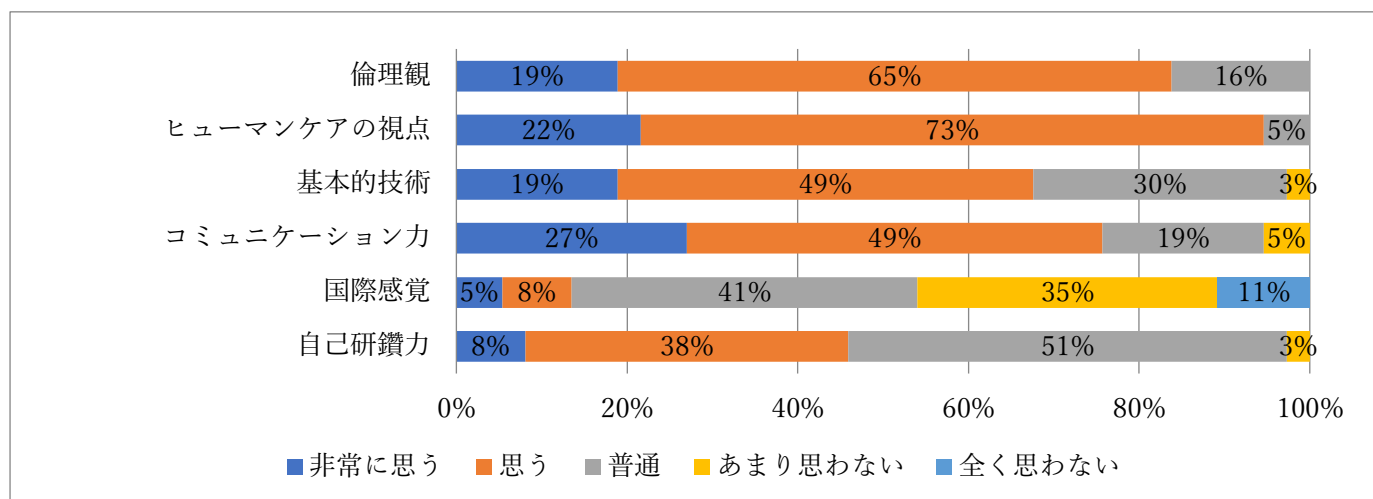
A)- 2 あなたの現在の職種についてお尋ねします。

看護師	34
保健師	2
養護教諭	1

● ディプロマポリシーに対する評価

B) あなたは以下のものを身につけることができましたと思いますか。

1. “いのち”に対する温かいまなざしと高い倫理観を身につけることができましたと思いますか
2. 看護の対象の基本的な人権を擁護し、“苦痛”を受け止め、共感的に理解するヒューマンケアの視点を身につけることができましたと思いますか
3. 科学的思考力を基盤に、健康レベルに応じた的確な判断力の基礎と安全に看護実践を行う基本的技術を修得することができましたと思いますか
4. 患者・家族や保健・医療・福祉チームと良好なコミュニケーションをとり、連携を深めるための基本的態度を身につけることができましたと思いますか
5. 医療に対する国際感覚を持ち、看護の本質を迫及し、展望するための自己研鑽能力を身につけることができましたと思いますか



6項目のうち4項目については肯定的な回答（非常に思う・思う）の割合が60%以上を占めている。肯定的な回答の平均は、61%で、昨年の47%から14ポイント上昇した。昨年と比較して、評価が上昇したのは5項目であった。

評価の高い項目（肯定的な回答が50%以上）

「看護の対象の基本的人権を擁護し、“苦痛”を受け止め、共感的に理解するヒューマンケアの視点を身につけることができた（以下、ヒューマンケアの視点）」は95%で、昨年の68%から27ポイント上昇した。また、「“いのち”に対する温かいまなざしと高い倫理観を身につけることができた（以下、倫理観）」は84%で、昨年の52%から32ポイント上昇した。「患者・家族や保健・医療・福祉チームと良好なコミュニケーションをとり、連携を深めるための基本的態度を身につけることができた（以下、コミュニケーション力）」は76%で、昨年の56%から20ポイント上昇した。さらに、「科学的思考力を基盤に、健康レベルに応じた的確な判断力の基礎と安全に看護実践を行う基本的技術を修得することができた（以下、基本的技術）」は68%で、昨年の52%から16ポイント上昇した。また、「看護の本質を追及し、展望するための自己研鑽能力を身につけることができた（以下、自己研鑽能力）」は46%で、昨年の32%から14ポイント上昇した。

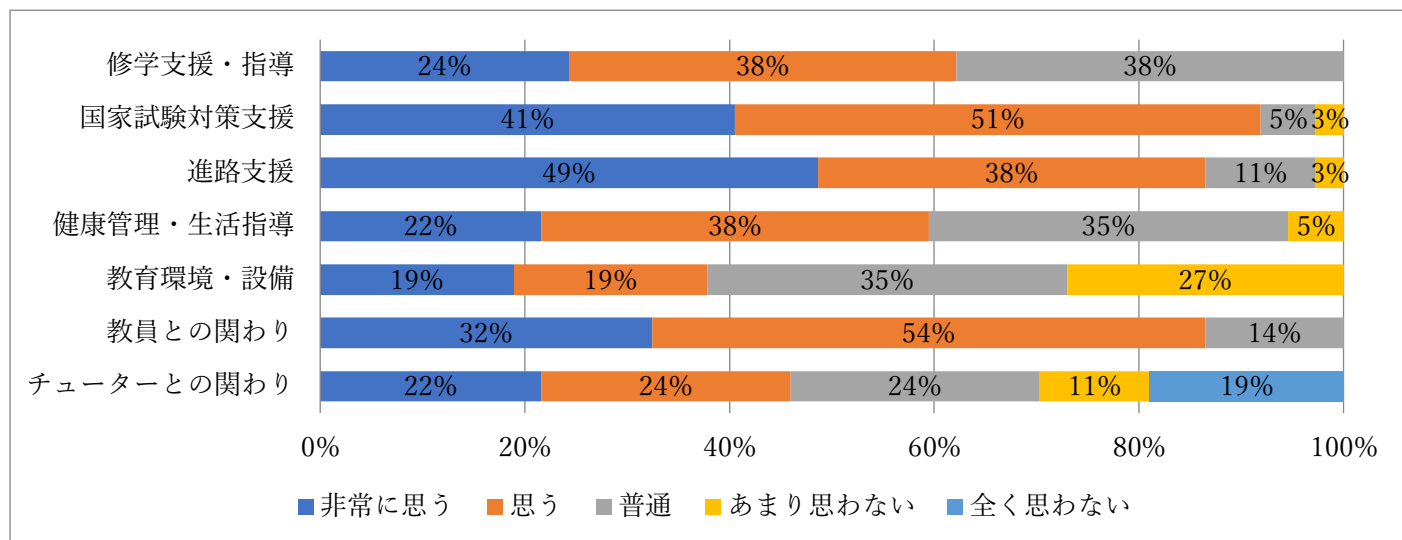
評価の低い項目（肯定的な回答が50%以下）

「国際感覚」は13%で、昨年の20%から7ポイント低下した。

● 大学の各種支援に対する評価

C) あなたは、以下の支援に満足していますか。

1. 講義・演習・実習に対する修学支援・指導について満足している
2. 国家試験に対する支援について満足している
3. 就職、進学に対する支援について満足している
4. 健康管理生活指導に対する支援について満足している
5. 教育環境、設備（図書館、講義授業および演習設備、インターネットを含めたコンピューター設備、運動場、テニスコート）などについて満足している
6. 神戸常盤大学保健科学部看護学科教員との関わりについて満足している
7. チューターとの関わりについて満足している



7項目のうち5項目については肯定的な回答（非常に思う・思う）の割合が60%以上を占めている。肯定的な回答の平均は、67%で、昨年の42%から25ポイント上昇した。昨年と比較して、すべての項目で評価が上昇した。

評価の高い項目・上昇率が高い項目（肯定的な回答が50%以上は）

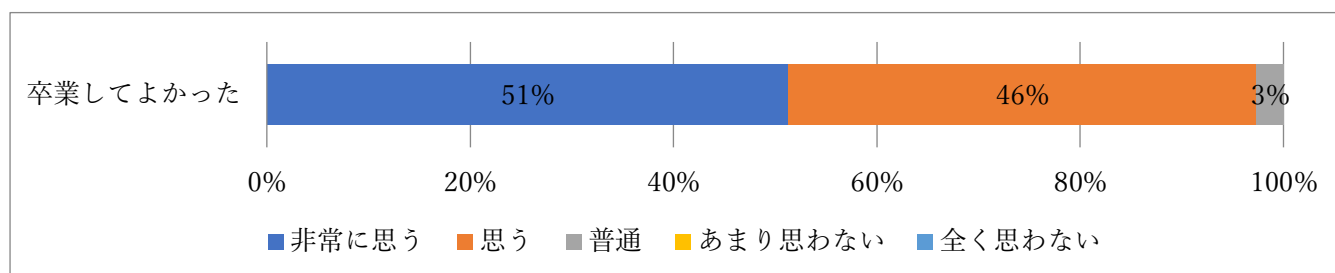
「国家試験に対する支援について満足している（以下、国家試験対策支援）」は92%で、昨年の36%から56ポイント上昇した。「神戸常盤大学保健科学部看護学科教員との関わりについて満足している（以下、教員との関わり）」は86%で、昨年の76%から10ポイント上昇した。また、「就職、進学に対する支援について満足している（以下、進路支援）」は87%で、昨年の60%から27ポイント上昇した。「講義・演習・実習に対する修学支援・指導について満足している（以下、修学支援・指導）」の62%で、昨年の40%から22ポイント上昇した。さらに、「健康管理生活指導に対する支援について満足している（以下、健康管理生活指導）」は60%で、昨年の28%から32ポイント上昇した。

評価の低い項目・低下率の高い項目（肯定的な回答が50%以下）

「チューターとの関わりについて満足している（以下、チューターとの関わり）」は46%で、昨年の36%から10ポイント上昇した。また、「教育環境、設備などについて満足している（以下、教育環境・設備）」は38%で、昨年の20%から18ポイント上昇した。

● 総合評価

D) - 1 神戸常盤大学保健科学部看護学科を卒業して良かったと思いますか。



肯定的な回答（非常に思う・思う）の割合は97%で、昨年の76%から20ポイント上昇した。また、昨年は否定的な回答（あまり思わない・全く思わない）が8%を占めたが、今年度は認められなかった。

良かった点

【教員に関すること】

- ・先生と生徒の距離が近く卒業しても関わりがあるから
- ・先生たちが優しい
- ・先生方と親密に関わることができ、凄くいい大学生活の思い出がたくさん作れました。
- ・心の通った教員が多かった。
- ・先生も親切に実習など指導してくださったし、良い友人にも出会えたから。
- ・先生と距離が近かった
- ・教員との距離が近く、質問や相談をしやすい環境であった
- ・先生との関わりが深く、なんでも相談しやすい環境にあったこと。
- ・いつも親身に相談にのってくださったり、わからないところも優しく教えてくださったから。
- ・先生が親身になってくれるから
- ・先生方がどんな時でも親身に話を聞いてくださったり、優しく指導してくださり、この大学で良かったなと思いました。
- ・先生方が熱心で優しく接してくださり安心して国家試験まで過ごせた。
- ・いい先生がたに出逢えたこと
- ・先生方が熱心で優しく接してくださり安心して国家試験まで過ごせた
- ・相談しやすい先生も多く、実習など困った時に相談しやすかった。
- ・思いやりがあった

【学修に関すること】

- ・実習での看護過程の展開を丁寧に指導して頂けたことで、現場でも自然と実践でき活かしていると感じる為
- ・今でもわからないこと(科学的根拠)を学習し解決しようとする癖がついたため。
- ・看護を詳細に学ぶことができた
- ・保健師課程がとれた。1、2年時の保健師課程担当の教員の授業を受けて保健師を目指したいと思えた。
- ・学部が少なく同じような医療系が多いので集中して学習していくことが出来たと思う。
- ・医療の他職種と一緒に勉強できるから
- ・看護師免許が取れたこと
- ・国家試験に合格できた。

【実習に関すること】

- ・実習先の病院で就職できたため、実習で病院の雰囲気を知れた
- ・救急重症病棟での実習やICU、手術室などのなかなか経験できない部署を見学ができたことが、働きだしてからもそれらの場所と関わりがあり、連携する上で役に立っているから。
- ・実習での指導でほぼ毎日先生がいた事
- ・患者さんに寄り添いながら本当にその人に必要な看護を考えることができてきたのは良かった。

【環境に関すること 他】

- ・学習できる環境が整っていた
- ・よい環境だった
- ・あたたかい環境だったので、自分のペースで学べ、前に進んでいくことができたので良かったと思う
- ・アットホーム感が好きだった
- ・楽しかった

良くなかった点

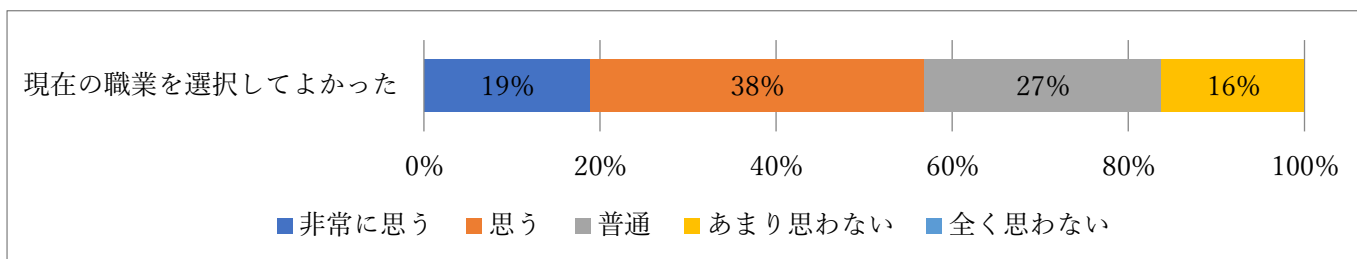
- ・食堂が狭いため、ご飯を食べる場所によく困った。また電気が暗かった。

卒業してよかった理由は、「教員に対する肯定的な思い」「学修（実習含む）に関すること」が多かった。良

くなかった理由は、「教育環境・設備（食堂）」のみであった。

● 職業選択の満足度評価

E) - 1 現在の職業を選択してよかったと思いますか。



肯定的な回答（非常に思う・思う）の割合は57%で、昨年の40%から17ポイント上昇した。また、否定的な回答（あまり思わない・全く思わない）が16%を占めたが、昨年の28%から12ポイント低下した。

E) - 2 現在の職業を選択して良かったと思う理由（自由記述）。

【現在の職業を選択して良かったか？ 非常に思う、思う】

- ・患者の回復過程に対する喜びを実感することができ、密にコミュニケーションをとることができるため。
- ・人の為に働けていることや、患者が良くなる看護実践ができることに達成感があるから
- ・患者とのコミュニケーションが楽しい
- ・しんどくても、仕事としてのやりがいを感じます。
- ・自分の仕事がスムーズに行えたり、患者に喜んでもらえると楽しいが、臨床と実習の違いもあるし、まだまだわからないことも多い。
- ・働いていて楽しい
- ・誰かの助けになっているから
- ・やりがいがある
- ・人の役に立つ仕事ができるため
- ・その人、その家族に長く寄り添い支援していける。
- ・とてもやりがいを感じるとともに、自分自身もっと成長したいと思うことができるから
- ・患者さんが回復していく姿を見れたり、「ありがとう」と言ってもらえると、この職業を選んで良かったなと思います。
- ・患者さんとの日々の関わりで改めて命の大切さに気づかれる
- ・人のために働けるから
- ・子供の時の将来の夢であり、楽しさも感じているため
- ・目の前にいる患者さんのために、少しでも役に立てていると実感できた時は頑張って免許をとって良かったと思いました。
- ・自分に合っていると感じるため。
- ・自身の最後など、一般就職では考えなかったであろうことを考えるようになったこと
- ・命にかかわる仕事なので責任感が重く、緊張感が高い。でも患者さんと話せるようになって楽しい時もある。
- ・自身で希望したクリティカル系の部署で働けていることが理由として大きい。他部署で働いた場合は良かったと思えるかわからない。今の部署では、1対2や1対3の看護を行なっているため、生きたいと願う患者やその家族に深く関わることができる。技術的な面だけではなく精神的なケアも深く行うことができるため満足している。しかしコロナの影響もあり、業務がこれ以上複雑になってしまうと後悔するかもしれない。現時点では、学校で習った理想の看護に近い看護を展開できる部署で働くことができているため、満足している。

【現在の職業を選択して良かったか？ 普通】

- ・現在はまだ良かったかよく無かったかは分からない。これから色々な経験を通して考えていきたい。
- ・看護師として働いてやりがいとかはあるが、日々の業務はつらく人間関係なども大変なことが多いから
- ・責任感が重すぎて、自分には向いていないと思う時がある
- ・忙しすぎて、よかったのか悪かったのかまだよくわからない。
- ・人間関係は悪くないが、ストレスフルな環境なので心身共にしんどい状態が続いており成長できていないと感じる。他にも向いている仕事があったのではないかと考えたりしてしまう。

【現在の職業を選択して良かったか？ あまり思わない】

- ・サービス残業が多い上に仕事量や内容と給料が見合わない
- ・思ってたより看護師の仕事は厳しかった。状態が悪い患者さんとか亡くなる患者さんを見るのがつらい
- ・看護師に向いていないと痛感しているため
- ・看護師の業務はお金はもらえるが自分に合っていなかった
- ・辞めたいと思うときがある
- ・体力的、精神的にしんどい。やりがいよりしんどさのほうが今は勝っている

● その他

F) 本学看護学科に対する要望などを自由にご記入ください。

- ・休みの日や授業がない時でもちょっとしたことで大学に出向かなければならないことも多かった→リモートやメールでやり取りしたり、提出するなどできたと思います。
- ・教科書をほぼ使わなかった→授業もレジュメがあるし、実習の際にも必要な参考書を借りてみるが多かったです。また、国家試験の勉強の際も専用の本を使用し学習していました。そのため、見にくい・理解しにくい文章の教科書を買うなら実習で活躍するなどもっとわかりやすい本をせめて購入できるようにした方が良いと思います。
- ・グループワークの際に協力が少ない生徒に対する罰則的対応があるとより皆で協力して作れると思った。グループワークでの負担が、ちゃんとやる人に偏らないよう対策を考えてほしい。
- ・看護技術(血糖測定、点滴の混注など)を実際に病院で行なっている方法で教えてもらえたらなと思いました。
- ・演習内容が現場と少し違う気がします
- ・実習先が遠いこと→ホテルに泊まったり、早朝に交通手段を使って移動しなければならないため、そこまでする必要がないと思います。
- ・就職に関して、もっと現場の情報を得られる助けがあれば就活しやすいし、自分に合った病院選びができる気がする。
- ・就職先選びは、担当の先生とも話し合いながら、自分の行きたいところに行った方が良いと思う
- ・私はチューターを利用したことが一度もないが、他の生徒は利用したことがあったため、チューター制度を統一したほうが良いと思う。(半年に一度はチューターと面談するなど)
- ・食堂の電気を明るくした方が良さそう
- ・4年間大変お世話になりました。決して良い生徒ではありませんでしたし、多くの先生方やキャリア支援課の人、事務の人に支えられてなんとか卒業できました。ありがとうございました。

自分で考えさせる看護や、参加型の授業がありとても興味深かった。自分たちで主体的に動いて考える授業はとても身になったと思う。ただ、実習に関して、個々の筆跡によって読みにくい事もあるため、記録物はパソコンで書いても良いのではないかなと思う。また、職場で多くの研修や指導を受けていて思うこととして、学生に何度か考えさせたあと、わからなかったことは教員から一例の解答を与えても良いのではないかなと思う。学生の時、フィードバックをもらって、何か自分の考えが間違っていることはわかっても、最終的にどうすればよいかわからず、同じ失敗を繰り返していたように思う。臨床を経験していないことや、学習資料を自分で集める能力も弱い場合、答えに辿りつけないこともあるため、考えてもわからなかった場合は解答を教えて知識になるようにしても良いと思う。もしくは、もう少し学習資料の活用方法(医学中央誌やメディカルオンライン)を指導してもよいと思う。

私の学年は、実習などで精神的に疲れてしまう学生が多かったように思う。ピアサポートなど、実習で疲れてしまわないように、自身の心身のケアについての指導等があってもいいのかもしれないと思った。(実習で困ったことを話し合う機会を設け、共有するなど。)

きっと学生と臨床では、求められることは違っていると思います。卒業してから、卒業生同士で話したり、自身で思ったこととして、解剖生理と病態理解が弱いと思いました。個々の授業はとても深く興味深いものが多かったのですが、知識を繋げて活用するところが少し弱かったのかなと思います。多くの症例をみて、活用することで鍛えられるところであると思いますが、もう少し看護過程の展開を増やしたり、理論に基づいた展開を行えばよりよいかなと思っています。

本当にお世話になりました。ありがとうございました。

内容は、「グループワーク」「参加型の授業」「看護技術」「実習」「就職活動」「チューター制度」「環境」に関するものであった。

3. 卒後評価を教育改善に活かすための取り組みと考察

1) 回収率

回収率は、49.3%で昨年より 19.9 ポイント上昇した。50%近い回収率なので、卒業生全体の意見を反映していると考えてよい。この結果から、質問内容、アンケート依頼・回収時期は妥当だと言える。

2) ディプロマポリシーについて

ディプロマポリシーについての評価では、「ヒューマンケアの視点」「倫理観」「コミュニケーション力」「基本的技術」の項目で肯定的な回答が 60%以上であった。また、これらすべての項目の肯定的な回答は、昨年と比較して 16～32 ポイント上昇している。この結果から、これらのポリシーは、概ね身につけることが出来たと評価できる。

一方で、「自己研鑽力」は、昨年よりも 14 ポイント上昇したとはいえ、肯定的な回答が 46%と低評価であった。また、「国際感覚」は、肯定的な回答が 13%と低評価で、昨年よりも 7 ポイント低下した。この結果から、これらのポリシーを身につけることができたとはいえない。今後は、「自己研鑽力」「国際感覚」の育成を改正カリキュラムに盛り込むなどの対策が必要である。

3) 大学で受けた支援についての評価（卒業生調査）

大学で受けた支援についての評価では、「国家試験対策支援」「進路支援」「教員との関わり」が肯定的な回答が 85%以上と高評価であった。特に「国家試験対策支援」は肯定的な回答が 92%で、昨年と比較して 56 ポイント上昇している。調査対象の 9 期生の国家試験合格率は 94.6%（全国平均 89.2%）、保健師国家試験は 100%（全国平均 91.5%）いずれも、全国平均を上回る結果であった。また、9 期生は国家試験委員会による、国家試験対策講座（学科教員による講座）を 3 年次から受講している。これらの結果や対策が学生の満足度を上昇させたと考える。今後も、支援の継続を期待したい。また、「進路支援」は、昨年と比較して 27 ポイント上昇している。調査対象の 9 期生は、就職率 97.3%で、在学中に神戸市教員採用試験に養護教諭として合格した学生や、助産学専攻科に進学した学生がいたことから、就職委員会、教職支援センターをはじめとする教職員の適切な指導に満足していたことが考えられる。さらに、「健康管理」は、肯定的な回答が 60%で、昨年と比較して 32 ポイント上昇した。この結果から、学生は、健康管理センターの活動を中心とした教職員の支援に満足していたと考える。

一方で「チューターとのかかわり」は 46%で、昨年と比較して 10 ポイント上昇したにもかかわらず、依然低評価である。今後は、定期的な面接を強化するなど、学生が満足できる支援が必要である。さらに、「教育環境・設備」の肯定的回答は 38%で、昨年と比較して 18 ポイント上昇したにもかかわらず、依然低評価である。学修成果の向上を目指すためにも学生の声をくみ上げ、環境の改善を図る必要がある。

4) 総合評価についての評価

総合評価は、肯定的な回答が 97%と高評価であったことから、学生は、本学で過ごした 4 年間に満足していることが伺える。自由記述からその要因を考えてみると、「教員に対する肯定的な意見」が一番多かった。この結果から、教員との良好な関係が学生生活の満足度を上げていると考える。今後もこれまで通り、丁寧な教育と、学生へのきめ細やかなケアを継続する必要がある。

5) 職業選択の満足度評価

職業選択の満足度評価は、肯定的な回答が 57%で、昨年と比較して 17 ポイント上昇した。その理由として「患者の回復過程に喜びを感じる」「患者が良くなる看護ができると達成感がある」など患者の喜びを自分の喜びとして感じられる姿が確認できた。また、否定的な回答（あまり思わない・全く思わない）は 16%であった。今年度から、理由を自由記述で問うことを追加した結果、「体力的・精神的にしんどい」「サービス残業が多い」「状態の悪い患者さんや亡くなる患者さんを見るのが辛い」などが理由であることがわかった。9 期生が就職 1 年目をスタートさせた令和 2（2020）年は、COVID19 の流行で市町村、学校、臨床は、どこも多忙極まりない状況にあったことが予測される。そのため、通常の卒後教育を受けることが難しかった可能性がある。しかし、社会がどのような状況下でも学生が受けるリアリティショックが少しでも軽減されるような教育を工夫する必要がある。

IV. 教育学部 こども教育学科

1. 回収率

送付先：就職先

	発送数	回答数	回収率
令和2年度	78	42	53.8
令和元年度	83	27	32.5
平成30年度	85	23	27.0

2. 調査結果

● 卒業後の進路

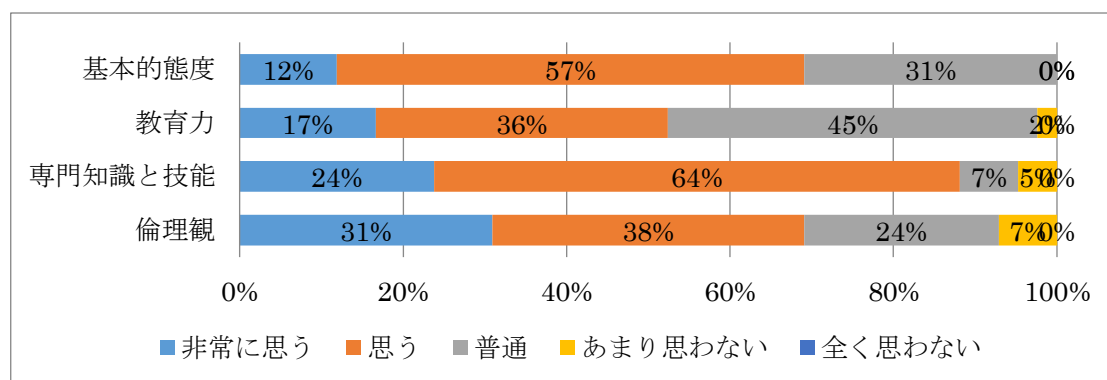
A) あなたの卒業時の進路についてお答えください。

保育所	11
認定こども園	11
幼稚園	2
小学校	8
社会福祉施設	8
国家公務員	1
進学（大学院・他の大学・専門学校）	1

● ディプロマポリシーの達成度を問う設問

B) あなたは大学での学修や学生生活を通じて以下のものを身につけることができたと思いますか。

1. 実践の場において自ら課題を見いだし研究することにより、保育や教育の質を高める態度を身につけることができた。
2. 理論と実践を統合し、社会の要請に応えることのできる教育力を身につけることができた。
3. こどもの心身の発達を支えるための専門知識と技能を身につけることができた。
4. こどもの保育・教育に携わる者に必要な豊かな人間性と高い倫理観を身につけることができた。

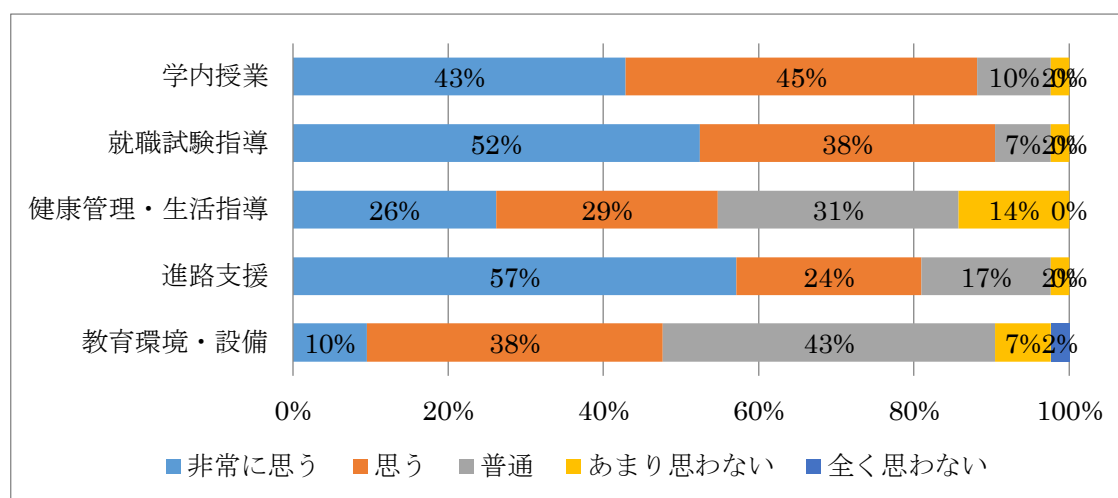


全体的には肯定的回答（非常に思う・思う）の割合が半数～9割弱と高評価であった。肯定的回答が最も高かったのは「3. こどもの心身の発達を支えるための専門知識と技能を身につけることができた。」で88%である。次いで「1. 実践の場において自ら課題を見いだし研究することにより、保育や教育の質を高める態度を身につけることができた。」と「4. こどもの保育・教育に携わる者に必要な豊かな人間性と高い倫理観を身につけることができた。」が69%であった。なお、「2. 理論と実践を統合し、社会の要請に応えることのできる教育力を身につけることができた。」は4項目の中では肯定的回答が最も低い53%であるが、中立的回答（普通）が45%を占めており、否定的回答（あまり思わない・全く思わない）は2%であった。

● 大学の支援等に関する設問

C) あなたが学生時代に大学から受けた支援等について答えて下さい。

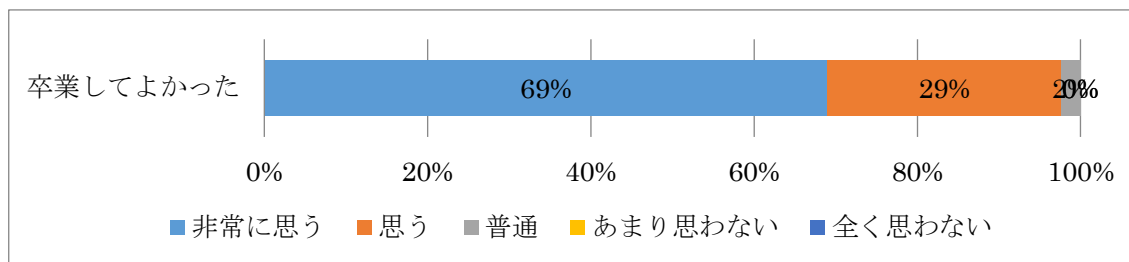
1. 講義・実習・演習に対する学修支援・指導がよかった。
2. 就職試験に対する学修支援・指導がよかった。
3. 健康管理、生活指導に対する支援がよかった。
4. 就職・進学に対する支援がよかった。
5. 教育環境、設備（図書館、講義授業および実習設備、インターネットを含めたコンピュータ設備、運動場、テニスコートなど）がよかった。



全体的には肯定的回答（非常に思う・思う）の割合が半数弱～9割と高評価である。肯定的回答が最も高かったのは「2. 就職試験に対する学修支援・指導がよかった。」が90%、次いで「1. 講義・実習・演習に対する学修支援・指導がよかった。」が88%、「4. 就職・進学に対する支援がよかった。」が81%であった。否定的回答（あまり思わない・全く思わない）は、「3. 健康管理、生活指導に対する支援がよかった。」が14%、「5. 教育環境、設備（図書館、講義授業および実習設備、インターネットを含めたコンピュータ設備、運動場、テニスコートなど）がよかった。」に9%みられた。これらの2項目は、中立的回答（普通）の割合がそれぞれ31%、43%と相対的に高いといえる。

● 総合評価を問う設問

D) 神戸常盤大学教育学部こども教育学科を卒業してよかったと思う。

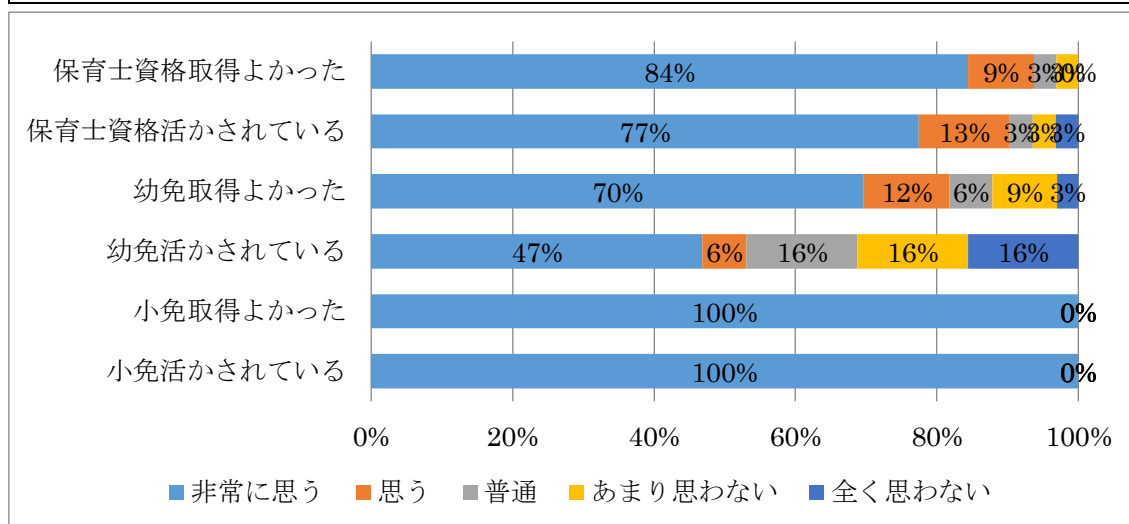


肯定的回答（非常に思う・思う）の割合が 98%であった。

● 取得した資格について問う設問

E) 資格についてお尋ねします。

1. 保育士資格を取得された方にお尋ねします。（免許取得者のみお答え下さい）
 - 1) 保育士資格を取得してよかったと思う。
 - 2) 保育士資格が仕事に活かされている。
2. 幼稚園教諭 1 種免許状を取得された方にお尋ねします。（免許取得者のみお答え下さい）
 - 1) 幼稚園教諭 1 種免許状を取得してよかったと思う。
 - 2) 幼稚園教諭 1 種免許状が仕事に活かされている。
3. 小学校教諭 1 種免許状を取得された方にお尋ねします。（免許取得者のみお答え下さい）
 - 1) 小学校教諭 1 種免許状を取得してよかったと思う。
 - 2) 小学校教諭 1 種免許状が仕事に活かされている。



資格・免許の取得は、小学校教諭において「非常に思う」と回答した割合が 100%であった。保育士の肯定的回答（非常に思う・思う）は 93%，幼稚園教諭の肯定的回答は 82%であった。次に、資格・免許が活かされているかについては、小学校教諭において「非常に思う」と回答した割合が 100%であった。保育士の肯定的回答は 90%であったが、幼稚園教諭の肯定的回答は 53%であり、保育士と比べると相対的に低かった。

- 大学への要望、アドバイス、感じた事などについての自由記述

F) 本学こども教育学科に対するご要望、アドバイス、感じたこと、などご自由にご記入下さい。

- ・後輩の皆様がより良い学生生活を送るために、就職活動は、神戸常盤大学卒業の現役の先輩方に働いて感じたこと等、いい面や悪い面も含めて就職先の詳しい話や情報を聞く機会が増えてほしいと感じます。
- ・私の園が月案、週案が必ずあるので書き方をもっと教えてもらいたかったです。
- ・大学時代にもたくさん教えていただいたのですが、保育の現場で活用できる制作とかを大学時代にもっとたくさん知れたら今も使えたのかなと思う。
- ・保育・教育現場には、子どもと関わらない事務仕事もあります。新学期を迎えるに当たって職員のしなければいけないことやお便りの書き方などにも少し触れていただけると、4月からさらに即戦力として働ける人材育成につながるのではないかと思います。
- ・授業の空きコマをせめて1コマにしてほしかった。
- ・五期生の卒業式の代わりを企画していただけると言う話を小耳に挟みました。実現していただけると嬉しいです。
- ・卒業式が無くなったので、いつか同窓会があれば参加したい。
- ・先生と学生が近い距離感で学習できる環境がとても良かったです。

要望の内容は「もっと卒業生から情報を聞く機会がほしい」「月案・週案や制作をもっと知りたい」「子どもと関わらない事務仕事にも触れてほしい」「授業の空きコマは1コマに」「卒業式の代わり・同窓会」などであった。

3. 卒後学生アンケートを教育改善に活かすための取り組みと考察

1) 回収率

こども教育学科は平成28年3月に1期生を送り出した。そのため、他学科とは異なり今回の調査が4度目の調査である。例年の課題であるアンケートの回収率の低さについては、前回調査の32.5%から半数を超えて53.8%と上昇した。自由記述の要望にあるように、今回の調査対象となった卒業生は、COVID-19のために卒業式の挙行が叶わず、本調査実施を呼びかけるきっかけともなる学科独自のホームカミングデーも、現在に至るまで実施できずにいる状況である。このような状況にもかかわらず、過去の調査よりも回収率が高かったことは、喜ばしい限りである。しかし、53.8%という数字は十分な回収率とは言えない。今後も回収率増加が課題である。

2) ディプロマポリシーについての評価

ディプロマポリシーについての評価は、全体的に否定的回答が7%以下であることは評価できる。その中では、「2. 理論と実践を統合し、社会の要請に応えることのできる教育力を身につけることができた。」が他の3項目と比べて相対的に肯定的回答が低く、中立的回答が高かったことは、社会人1年目という実践経験の少なさから低い自己評価になったことが考えられる。昨年度も同様の傾向がみられており、分析の際に指摘していることであるが、卒後6ヶ月程度の段階での回答は難しい項目であるといえよう。

3) 大学で受けた支援についての評価

学生への支援についての評価としては、全体的に否定的回答が 14%以下であることは評価できる。しかし、否定的回答の割合が高くないものの、肯定的回答に着目すると「5. 教育環境、設備（図書館、講義授業および実習設備、インターネットを含めたコンピューター設備、運動場、テニスコートなど）がよかった。」が 48%と半数に満たず、高評価を得ているとはいいがたい。このことについては、コンピュータールームの利用を例に挙げると、授業で使用している時間帯は学生が自由に使用できないなど、学生目線で考えると制限付きの利用しかできない、ということがあるだろう。また、教室の狭さやエレベーターがない建物があるなど、在学中から学生の声を聞くこともある。これらの不満が肯定的回答の低さに繋がっていると推測できる。他には、「3. 健康管理、生活指導に対する支援がよかった。」も肯定的回答が 55%強の割合に留まっているが、否定的回答が 14%と 5 項目の中では相対的に高い割合を示していた。学科の体制としては、1～2 年生は担任を中心に、3～4 年生は担任とゼミ担当教員が、学生の健康や生活指導面に注意を払い、学科会議でも共有しているが、それだけでは十分ではないと感じた者がいたと考えられる。他には全学的なことになるが、健康管理センターによる支援の充実が期待される。次に、肯定的回答が相対的に高かった 3 項目（「1. 講義・実習・演習に対する学修支援・指導がよかった。」「2. 就職試験に対する学修支援・指導がよかった。」「4. 就職・進学に対する支援がよかった。」）については、就職委員会や教職支援センターの取り組みが評価されたものといえよう。学科としては、引き続き力を入れて取り組みたい。

4) 総合評価についての評価

総合評価は「非常に思う」「思う」合わせて 98%と非常に高い肯定的評価を得ていた。本学で過ごした 4 年間に満足していることが伺える。自由記述の内容から「先生と学生が近い距離感で学習できる環境」「どの先生方も全力で私たち学生のバックアップ」「先生方が温かく相談」「ゼミの先生だけでなく多くの先生方が、将来への不安や悩みをととても親身になり聞いて一緒に考え」など、教員との関係性が高評価に繋がったと考える。これらの点については、学科の特徴としてアピールしており、今後も学生が大学生活を満足できるよう努力していきたい。

5) 資格取得についての評価

資格・免許取得についての肯定的評価は、80%以上と高い評価が得られた。一方で、これらが活かされているかという点については、小学校教諭免許は 100%、保育士資格は 90%の肯定的評価が得られたのに対して、幼稚園教諭免許は肯定的評価が 53%、否定的評価が 32%と、他の 2 つの資格・免許とは異なる傾向であった。このことについては、まず幼稚園への就職者数が少ないことが原因だと考える。また、幼稚園以外の幼稚園教諭免許を活かせる職場として認定こども園がある。しかし、認定こども園に採用された新任は、複数担任で受け持つ 3 歳未満児に配属される傾向があり、このことも幼稚園教諭免許の活用を実感できない原因ではないかと推測できる。これに対して、保育士資格を活かせる職場には、保育所と認定こども園と社会福祉施設があるが、保育所と社会福祉施設への就職者数は幼稚園就職者よりも多く、幼稚園教諭免許よりも保育士資格の方が活用を実感できると推測でき

る。卒後直後の段階では今後も幼稚園教諭免許の活用が実感できないという声上がるかもしれないが、保育所の認定こども園化や3歳児以上のクラスへの配属など、将来的には幼稚園教諭免許の活用が実感できる機会が増えるものとする。

V. 短期大学部 口腔保健学科

1. 回収率

調査実施年度 (対象者)	発送数	回答数	回収率
令和2年度 (3年3月卒業生)	79	52	65.8%
令和1年度 (31年3月卒業生)	58	27	46.6%
平成30年度 (30年3月卒業生)	74	31	41.9%

2. 調査結果

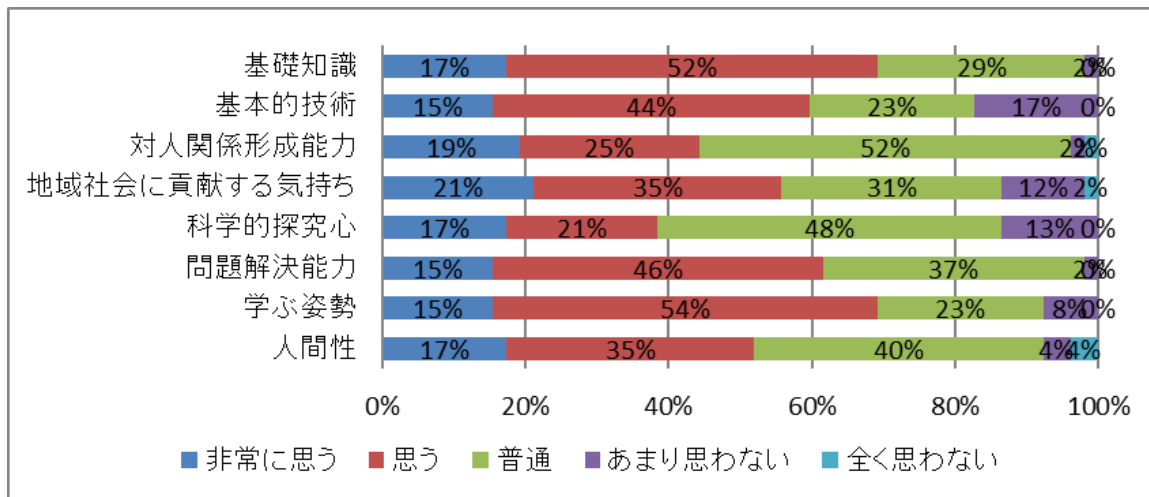
● 調査A：現在の勤務先の状況

口腔保健センター	1
歯科診療所	46
歯科診療所、介護保険施設	1
専攻科進学	2
病院	2

● 調査B：ディプロマポリシーに対する評価

B) あなたは神戸常盤大学短期大学部（以下、常盤短大）での学修や学生生活を通じて以下のものを身につけることができたと思いますか。

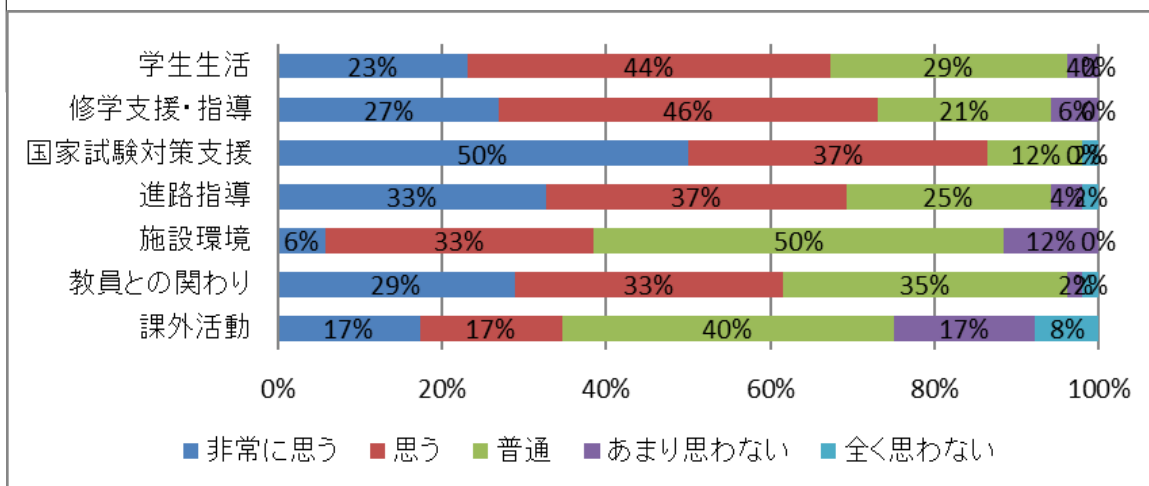
1. 常盤短大では現在の職場にとって必要な**基礎知識**を身につけることができた。
2. 常盤短大では現在の職場にとって必要な**基本的技術**を身につけることができた。
3. 常盤短大では**個々の命と人格を尊重した対人関係形成能力**を身につけることができた。
4. 常盤短大では**地域社会に貢献する気持ち**を身につけることができた。
5. 常盤短大では**科学的探究心**を身につけることができた。
6. 常盤短大では**問題解決能力**を身につけることができた。
7. 常盤短大では**生涯を通じて学ぶ姿勢**を身につけることができた。
8. 常盤短大では**心豊かな人間性**を身につけることができた。



● 調査 C：大学で受けた支援に対する評価

C) あなたが学生時代に神戸常盤大学短期大学部から受けた支援等について教えてください。

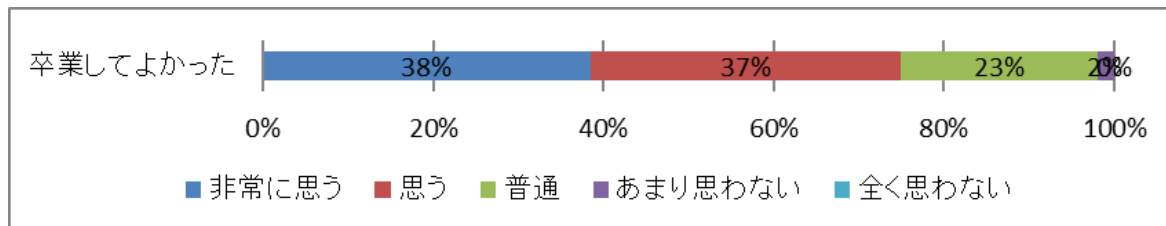
1. あなたにとって常盤短大での**学生生活**は**全体**としてよかった。
2. あなたにとって常盤短大での**学習**に対する支援はよかった。
3. あなたにとって常盤短大での**国家試験**に対する支援・対策・指導はよかった。
4. あなたにとって常盤短大での**就職・進学**に対する支援、対策、指導はよかった。
5. あなたにとって常盤短大での**施設環境**（図書館、教室、演習・実習設備、インターネットを含めたコンピューター設備、食堂、運動場、テニスコートなど）はよかった。
6. あなたにとって常盤短大での**教員との関わり**はよかった。
7. あなたにとって常盤短大での**授業外の活動**（課外活動：部活、ボランティアなど）はよかった。



調査 D：総合評価

- 学生時代を振り返って総合的にお応えください。

神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科を卒業してよかったと思う。



B. 卒後評価を教育改善に活かすための取組と考察

1. 回収率

今年度も昨年度に引き続き卒業生へのアンケート調査を行った。回収率は昨年よりさらに 19.2%上昇した。年々回収率は増加しているが、これは、学生時代から、web を使ったアンケートに、学生自身が慣れている世代であるためであると考えられる。回収率が今後も増えるように在学時に卒業生アンケートの存在等を十分に周知しておくことも回収率向上につながると考える。

2. ディプロマポリシーに対する評価

肯定的回答（非常に思う・思う）、否定的回答（あまり思わない・全く思わない）の分布をみると、すべての項目で、「非常に思う」「思う」「普通」という意見が、80%を超えており、教育効果が高いことが伺えた。また、「B1 基礎知識」「B43 対人関係形成能力」「B6.問題解決能力」「B7.学ぶ姿勢」「B8.人間性」については90%を超えていた。特に「B6.問題解決能力」は98%であったことから、この力を今後の医療現場での仕事に十分に活かして欲しいと思った。さらに、今年度の回答の特徴として、「全く思わない」という回答が、0%であった項目が「B1.基礎知識」「B2.基本的技術」「B5.科学的探究心」「B6.問題解決能力」「B7.学ぶ姿勢」と5項目あり、残り3項目については5%未満であった。以上のことから、3年間の学びに対するディプロマポリシーの評価はすべての項目について高い結果であると考えられる。

自由記述の回答の中に、「臨床に必要な技術を学べたら良かった」「科学的探究心をつける前に分析する能力を伸ばすとよい」などの意見があった。学年進行に沿って、基礎学習からステップアップする中で応用力を付けるカリキュラムの構築など、今後の参考としたい。

3. 大学で受けた支援に対する評価

肯定的回答（非常に思う・思う）、否定的回答（あまり思わない・全く思わない）の分布をみると、全ての項目において、「非常に思う」「思う」「普通」という意見が、70%を超えており、各種の支援がうまくいっていることが伺える。特に、「非常に思う」と「思う」の肯定的な意見については、「C3.国家試験対策支援」で87%であり、非常に高い評価を得ている。また「C4.進路指導」で70%、「教員との関わり」においても、62%となっており本学科が、高校生に説明している「教員との距離が近く、教員も人数も多いため安心して学べる」点について、実際に学生生活中に実感してもらえている結果となった。すべての項目で、高評価を得ていることから、学生にとって支援がうまく行っていることが示された。

自由記述の中に「大学内の食堂の見直しをしてほしい。席数が少ない」「ポータルシステムがあるのに、課題や授業後のレポートが自筆提出であったことから、もう少し活用してほしい」「災害や警報の連絡が遅かった」などの意見があった。食堂については例年意見が出ており、学部が増えたことから早急に検討する必要がある。また、ポータルシステムの活用については、R2 年度は新型コロナウイルス感染症対策のため、この年度よりかなりポータルシステムや manaba course の活用が進歩したことから改善がみられたと考える。

4. 総合評価

総合評価は、「非常に思う」、「思う」という肯定的意見が 75%で「普通」を入れると 98%であったことから学科の教育が学生に伝わっていることが示された。

5. まとめ

本アンケートの目的は、就職（進学）後に、本学で身につけた能力が役に立っているのかを自己評価してもらい、それを詳細に分析・検討して今後の教育に反映させることである。さらには、その能力を身につけるための各種支援や設備面での環境が整っているかを確認するためでもある。そのため例年、回収率の向上を課題として取り組んできたが、今年度は 65.8%と目標として 50%を超えることができた。今後も、さらなる回収率の向上を目指して、卒業前にこのアンケートの実施について周知徹底し、協力を要請するつもりである。

歯科衛生士教育の場合には、大学、短期大学、専門学校があり、すべて同じ資格を取得することにはなるが、どのような歯科衛生士になるかは教育の内容で大きく変わる。本学のコンセプトであるテーラーメイド教育は、学生個々の能力や資質を見据えて、学生の個性を生かす教育であり、それが達成できれば学生生活の満足度も上がる。その中で本学の卒業生からは満足度の高い評価を得ることができていることは、評価に値すると考える。口腔保健学科は 2022 年度より 4 年制への移行準備に入っているが、短期大学時代に培ったテーラーメイド教育を 1 年増えることでさらにバージョンアップさせ、他校にはない特徴を持った歯科衛生士の育成に取り組んでいきたい。そのため、来年度以降も、卒業生や 3 年に 1 度行われる就職先のアンケートを継続し、その意見を教育の質向上につなげていきたい。

VI. 短期大学部 看護学科通信制課程

1. 回収率

	発送数	回答数	回収率
2020 年度	128	45	35.1%
2019 年度	128	46	35.9%
平成 30 年度	111	44	39.6%

2. 調査結果

回答者の背景

A) あなた自身についてお尋ねします。

性別および年齢 (人)

	回答	無回答	合計
30 歳未満	0	0	0
30 歳代	12	0	12
40 歳代	17	0	17
50 歳以上	16	0	16
合計	45	0	45

就業の状況 (人)

	合計
働いている	44
働いていない	1
無回答	0
合計	45

勤務場所 (人)

	合計
病院	20
診療所または開業医	8
老人保健施設または特別老人ホーム	8
その他	8
合計	44

その他：訪問看護ステーション、保育所、特別支援学校、児童福祉施設、居宅介護支援事業所、介護付有料老人ホーム、派遣

卒業後の職場（人）

	合計
勤務先が変わった	17
部署が変わった	1
役職に変化があった	1
看護職以外に転職した	1
変わっていない	22
その他	2
合計	44

役職に変化があった：師長、

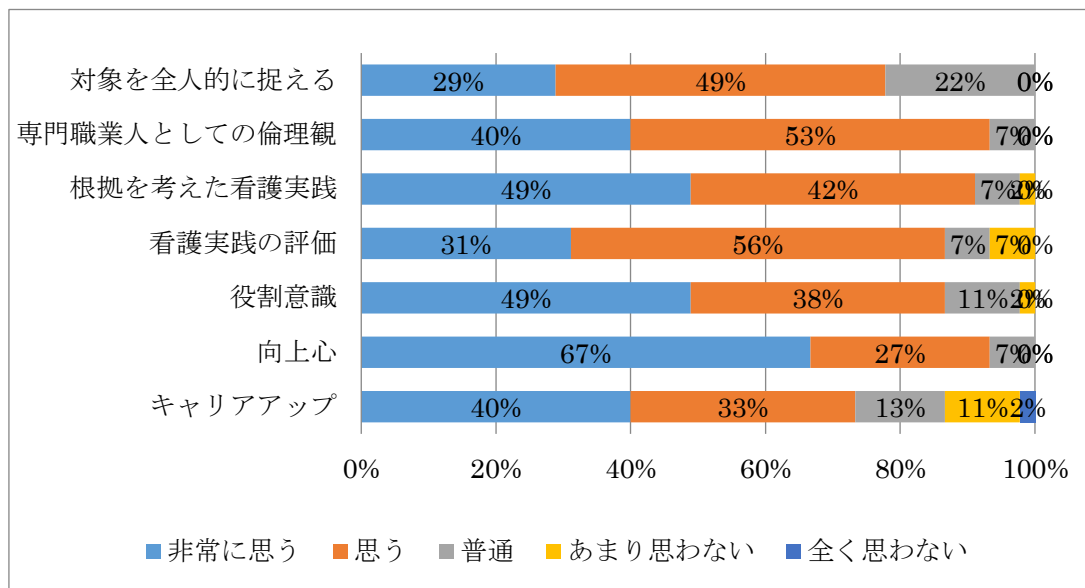
進学の有無（人）

	合計
進学した	1
進学の意思はあるが、準備中である	7
進学していない	37
合計	45

● ディプロマポリシーに対する評価

C) ディプロマポリシーの視点からご自身についてお答えください。

1. 対象を全人的にとらえることができるようになった。
2. 専門職業人としての倫理観を持って行動するようになった。
3. 根拠、エビデンスを考えながら看護の実践が行えるようになった。
4. 看護実践を評価するようになった。
5. 保健医療福祉チームの中で看護専門職の役割を意識するようになった。
6. 向上心を持ち看護の専門性を深めたいと思うようになった。
7. 今後キャリアアップを目指し、進学または専門分野に進みたいと思うようになった。



昨年と比較すると 6 項目すべてにおいて肯定的な回答（非常に思う・思う）が上回った。昨年最も低い水準であった「キャリアアップ」61%が今年度は 73%であり、「向上心」94%、「専門職業人としての倫理観」93%、「根拠を考えた看護実践」91%は、昨年は見られなかった 90%を超える肯定的な回答であった。昨年多くみられた普通という回答は全項目で減少しており結果、否定的な回答（あまり思わない・全く思わない）は昨年と同程度か低い水準であった。「看護実践の評価」「役割意識」2 項目のみがわずかに 1～3%昨年を上回った。

一昨年まで減少傾向であった「キャリアアップ」については、肯定的回答が昨年は前年比 11%上昇し、今年度は更に 12%の上昇がみられた。

自由記述内容を以下に示す。

（対象を全人的に捉える）

- ・看護をするにあたってまずは患者様を全人的に捉え、全体像と状況を把握して、ニーズに沿った援助を考えるようになった。

（専門職業人としての倫理観）

- ・本学で学んだことで倫理観を意識しながら看護を行うようになった。
- ・看護とは何かを真剣に向き合って看護を考えるようになった。

（根拠を考えた看護実践）

- ・エビデンスに基づいて行動できるようになった。
- ・一つ一つ根拠を持った看護を行うことの大切さを学び、日々患者様への対応につながればと考えている。
- ・根拠が分かるようになり、胸を張って看護できるようになった。
- ・系統的なものの見方、科学的根拠に基づいた問題解決について学びを深めることができた。

（看護実践の評価）

- ・看護業務に対して自信をもって発言できるようになった。
- ・大学病院の救命センターで勤務していて、毎日の自己学習や課題レポートに取り組みながら看護実践についている。本学での学びが大きいと感じている。

(役割意識)

- ・コロナ感染の拡大の中、私なりに少しでも社会の役に立てる道筋が見え、やりがいに繋がっている。
- ・今までになかった責任の重い仕事を任されるようになり、仕事に対するモチベーションが上がったように感じる。

(向上心)

- ・何事にも向上心を持ち、看護に関われるようになりました。
- ・自身の意欲・意思を常に保持していくことの難しさを学び、前に向かって進んでいくことの大切さを学ぶことが出来た。

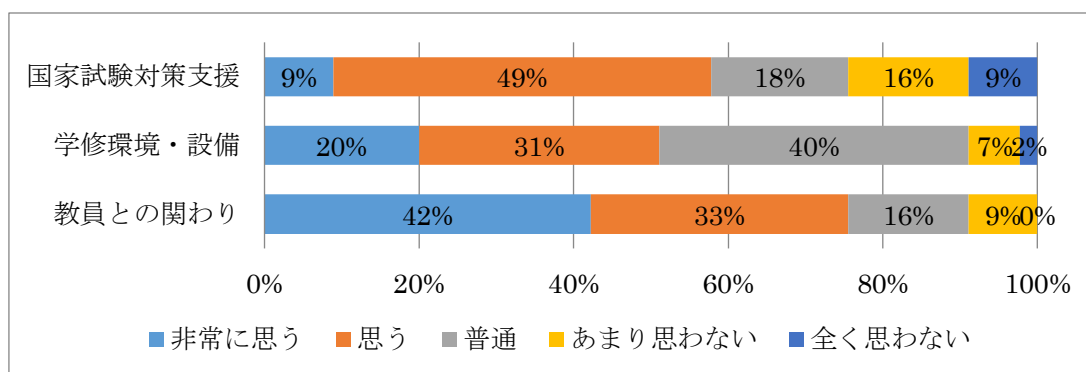
(キャリアアップ)

- ・保健師の進学に興味を持つようになった。
- ・糖尿病治療指導士を受験するため事例 10 例に取り組んでいる。
- ・看護の仕事が楽しくなり、もっと学びを深めたいと思うようになり、自身の夢ははっきりしたものになり、今そこに向かって進めている。
- ・常盤での体験は自分の自信に繋がり、学ぶことへの自信が付き、進学への後押しになった。

- 本学の各種支援に対する評価

D) 大学の支援に対してお答えください。

1. あなたにとって神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程での国家試験に対する支援はいかがでしたか。
2. あなたにとって神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程での学修環境、設備はいかがでしたか。(教室、図書館、ハローホール、地方会場など)
3. あなたにとって神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程での教職員との関わりはいかがでしたか。(対面授業、レポート添削、学修相談、電話対応などを含む)



肯定的回答（非常に思う・思う）は3項目とも昨年より上回っていた。「国家試験対策支援」53%から58%へ、「学修環境・設備」37%から51%へ、「教員との関わり」74%から75%であった。国家試験対策支援では、自由記述から教員の叱咤激励や厳しい言葉も肯定的に捉えることができたことによると考える。教員との関わりは、昨年を1%上回り75%であった。前年同様にチューター制をとり引き続いて支援を図ったことによると考える。

自由記述内容を以下に示す。

（国家試験対策支援）

- ・国家試験前に先生が本気で怒ってくださった言葉「こんな苦しいことを超えてきたんだから大丈夫」と言う言葉で頑張れた。
- ・怖いと思う言葉もありましたが、そう思わせてくれる言葉があつて一発合格できたと感謝している。
- ・11月末頃に実施した全国模試がとても役立ちました。自分の順位も把握でき、勉強の励みになった。
- ・1年生の時から過去問を意識したレポートや講義を行っていただくと有難い。
- ・金沢会場にももっと説明会や模試などの機会を設けて欲しかった。
- ・国試対策の時間をもう少し割いて頂きたい。参加の有無は自由だが、国試対策授業があるとモチベーションが上がると感じた。
- ・国試対策では、合格者のスケジュールなど分かりやすいスケジュールプランがあれば良いと感じた。
- ・他の専門学校のようにWEBでの国試対策があれば良いと思った。
- ・国試に対しての支援がとても少なく感じた。これで勉強して行けば大丈夫と思えるサポートがあれば良いと思った。
- ・さわ研でも言われていたが、国家試験は解剖生理がベースであるので、レポート設題は全く無意味であったと思う。一度で合格したのはさわ研の講義のおかげと思っている。
- ・自分は東京アカデミーに夏から通学し何とか国試に合格したと思っている。模試だけの国試対策だけでは合格しないと思う。

（学習環境・設備）

- ・東京の市ヶ谷の会場は便がよく困ることはなかった。
- ・北陸でスクーリングや、地元で実習出来て良かったので、知人にも勧めている。
- ・授業後ハローホールの利用可で勉強する場の提供がレポート作成に役立った。

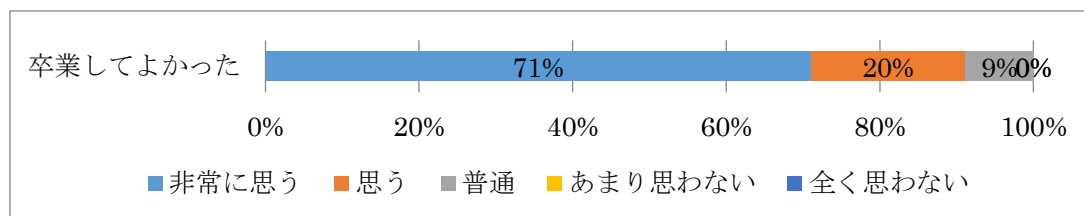
（教員との関わり）

- ・レポートで分からない時、分かりやすくサポートをして下さり有難かった。
- ・レポート添削で、電話で相談するとどの先生方も丁寧に指導して下さった。
- ・パソコンを通じての先生との関わりでしたが、熱意がコメントから伝わってきた。
先生方は親切で時に厳しく真剣に看護に向き合ってこられた方ばかりだと思った。
- ・教職員の先生方に親身になってアドバイスをしていただきました。実習先でのトラブル時も「負けたふりして勝つのよ」と言ってもらい頑張っていける力を貰った。
- ・落ち込んだ時の先生からのメールが心の支えであり、話を聞いてくださり親身だったこ

とが何よりの励みとなった。

- 総合評価

B) 学生時代を振り返って総合的にお答えください。



肯定的にとらえている学生（非常に思う・思う）は91%とほとんどを占め、残りの9%が普通であった。否定的回答は昨年2%あったが、今年度は0であった。

自由記述について

全て肯定的な意見であり、教員との関わりでも述べられているように教員への感謝と学ぶことの喜びと、看護の素晴らしさ等の記述が多く見られた。

特にスクーリングについては教員の看護観や体験談を生で聞くことで自身のエネルギー源となり、看護の学びを超えて、人生や人間を学ぶことが出来たという回答もあった。

看護師資格と学位の取得ができたことが良かったという記述には本学での単位が認められ他大学へ編入できたというキャリアアップの記述もあった。

本学での教員と友人の出会いに感謝しているという記述や、本学で倫理観やエビデンスに基づいた看護実践などを学び、意識を高く持てたことが、今とても役立っているという記述もあった。

3. 卒後評価を教育改善に活かすための取組みと考察

今回の卒業生からのアンケート調査結果を今後の教育に活かすために、結果の総括を2021年4月の課程会議において共有し、今後の活動に活かす。

昨年度の取り組みの評価

1) 国家試験に対する支援

国家試験対策支援は昨年度の結果と比べ、肯定的回答は5%upの58%であり、否定的回答は昨年29%から今年度25%と減ったが、全く思わないが7%から9%と増加していた。数値的には評価できると考える。

自由記述をみると「相談したことに対して良い助言がいただけた。」「国家資格を得ることが出来たのは教職員の皆さんの支援があつてのことと感謝している。」など感謝の意見が複数みられている反面、「国試対策がとても少ないと思った」「模試だけの国試対策では合格しない」などの要望もあった。本学では模試以外にも講座なども実施しているが、相対的に国試の学習時間が少ないと感じる学生がいることを考慮し、今後取り組みを

考える必要があるのではないかと考える。

2) 学生へのかかわり方

教職員のかかわりに関しては、肯定的回答が 75%と昨年度とほぼ同様の評価であった。これは一昨年度から担当制をとって学生と関わるような体制を継続したことと、学生が登校する機会をとらえて、学生個々の進捗状況に合わせた学習計画の見直しを図るという取り組みを継続している結果である。但し「あまり思わない」と答えた卒業生は「大変な思いは沢山した、学校での人間関係も色々とあった。」「思う所はあり、学生一人一人に寄り添った学校になってほしい。」と記述している。更にきめ細やかに CCN システムの質問回答のコーナーの活用の強化を今後も図っていく。教員の担当制を取っているが更に推進し、教員間の連携を図り、学生との個々の関わりを大切にする必要がある。学習へのモチベーションの維持と卒業に向けた支援を継続していく。

3) キャリアアップを目指す学生への支援

全 7 項目のダイブプロマポリシーの項目の内、一番低かった「キャリアアップ」について肯定的回答（非常に思う・思う）は一昨年度より続けて up しており本年度は 73%であった。自由記述の内容から、実際に編入学した、キャリアアップのために準備中である、将来看護の教員を目指したい、など具体的な記述も見られた。学生のキャリアアップに対する意識が高くなっていることを受けて、意欲を持つ学生に対しては、在学中からの情報の受け止めや提供、個別な指導など支援を考えていくことが必要であると考ええる。

今回のアンケート結果に関しては、今後も協議を継続して教育改善に努めていきたいと考えている。卒後アンケートの回収率は年々減少傾向である。今回のアンケート結果は対象卒業生の約 3 分の 1 のアンケート結果であり、全体像をつかんでいるとは言えない。卒業後の意識や動向を把握するためには、回収率の増を図ることが必要である。今後、卒業時に卒後アンケートの意義を伝え協力を要請していき、継続的に次年度の回収率の増加をはかっていく。